

東海地区

大学図書館協議会誌



53

2 0 0 8

東海地区大学図書館協議会

東海地区大学図書館協議会誌 第53号 2008

目 次

卷 頭 言	尾張図書館学の底力	
	愛知淑徳大学図書館長	久保 朝孝 1
講 演 要 旨	平成19年度「図書館職員基礎研修」	
	大学図書館職員に求められているものー改革は魄より始めよー	
	お茶の水女子大学参与	雨森 弘行 2
	アメリカの研究図書館 歴史と現状	
	中部大学附属三浦記念図書館	松林 正己 12
	平成19年度第2回研修会「魅力ある大学図書館をめざして」	
	どこから拓く？ 大学図書館の可能性－学習支援の視点から	
	同志社大学総合情報センター	井上 真琴 19
	ここから拓いた！ お茶大図書館活性化のための5つの作戦	
	お茶の水女子大学附属図書館	茂出木理子 30
	第62回（2008年度）研究集会「尾張図書館学の底力」	
	岩瀬文庫と〈本の町〉	
	名古屋大学大学院文学研究科教授	塩村 耕 39
	貸本屋史上の大物－公共図書館の原点－	
	前佛教大学教授	長友千代治 48
事 例 報 告	愛知県立大学学術情報センターにおけるICTリテラシー促進の試み －「ICT よろず相談所」の開設とその運用－	
	愛知県立大学学術情報課	米井勝一郎 59
行 事	第62回（2008年度）総会・研究集会	65
新図書館紹介	名古屋工業大学附属図書館	71
会 則 等		72
総会当番館一覧		75
加盟館一覧		76
役員館一覧		80
研修会一覧		81
広告主一覧		

巻頭言

尾張図書館学の底力

愛知淑徳大学図書館長
久保朝孝

平成20年8月8日(金)、本学長久手キャンパスを会場として第62回東海地区大学図書館協議会総会・研究集会が開催された。

その際、研究集会については、そのテーマから運営次第までの一切を会場校が担当するという慣例により、今回は以下のような二本立ての講演会を企画・実施させていただいた。

〈講演I〉岩瀬文庫と「本の町」 名古屋大学大学院文学研究科教授 塩村耕先生

〈講演II〉貸本屋史上の大物—公共図書館の原点— 前佛教大学教授 長友千代治先生

実は、私が勤務先から本職を命じられたのはついこの四月のことだった。今年は源氏物語千年紀ということで、平安時代の文学を専攻しているとはいってもその末席を汚すだけの私にも、それなりに各種行事や執筆に関わる予定があった。忙しい一年になりそうだなど多少の覚悟はしていたものの、まさか図書館の仕事に関わることになろうとは、夢にさえ思わぬことだった。しかも、私立大学図書館協会西地区部会に所属する東海地区協議会の理事校として、二年目の重い任務を抱えて。

しかしながら、この私立大学図書館協会の各種行事に参加していく中で、門外漢ゆえであろう、あれこれと面白い現象に気づかされることもあった。その一つが、この東海地区大学図書館の活動のきわめて活発なことであった。西地区部会は、このほかに阪神地区、京都地区、中国・四国地区、九州地区から構成されているが、その中で特に研修関係行事の最も盛んなのが、この東海地区なのだった。それも他を圧倒的に引き離して。

なぜだろうと漠然とした疑問を抱えていた頃に、ちょうど今回の企画を考える時期が重なったので、これ幸いと本稿表題のようなテーマを思いついた次第。講師には日頃からそのお仕事ぶりに驚嘆させられ、また教えられることのまことに多いお二人に、迷うことなく決した。また、ともにご快諾いただいたことは欣快の極みであった。

塩村先生のお話は、現在その悉皆調査に当たられている岩瀬文庫(西尾市／明治41年開設)の紹介と、その蔵書の特筆すべき具体例を通して評価される文庫としての卓越性、そして文庫創設者の豪商岩崎弥助の顕彰ということが主旋律であった。そしてこのテーマと表裏をなす旋律として、書物の人類史的意義が説かれたのであった。人間は死を知るものであるがゆえにこそ、その個体としての死を乗り越えて、過去や未来の人間とコミュニケーションを交わすことを喜びとした、その媒体が書物であると。だから人間のことを *homo librarius* と呼ぶことにしよう、という実にユニークな提案もなさって。

続いて長友先生は、江戸時代後期から明治時代末期にかけて開業した名古屋の代表的な貸本屋「大物」について、貸本屋史上の経緯とその意義を、興味深く豊富な資料を駆使してお話し下さいました。坪内逍遙がその文学的素養をはぐくんだ場所であった大物は、あたかも今の図書館のようでもあったという。店の賑わいは、そのまま名古屋の人々の書物への関心の深さと広がりを物語る。

本好きが高じてそのまま日本有数の私立図書館を作り上げてしまう人物がいて、一方では貸本屋に群がる多くの人々がいる。尾張(西尾は三河だが)人は本が好きなのだ。そしてそれこそが、この地域の図書館学を支える基盤だったのだ。当たり前のようなことだが、図書館に関わるものとして、その原点にあらためて思いを巡らす機会となったようである。

大学図書館職員に求められているもの — 改革は隗より始めよ —

お茶の水女子大学参与
雨森弘行

[レジュメ]

はじめに

今日、国の高等教育制度は未曾有の変革を遂げつつあり、大学改革は着実に進行している。

一方、高度情報社会といわれる社会情勢の中にあって、ITに係る技術革新は目覚しく、日常生活の中における人々の知識の獲得や情報受・発信に係る技術は飛躍的に拡大している。このような状況の中にあって、大学図書館はこれまで以上に思い切った改革・改善が余儀なくされており、その成否は設置母体である大学の浮沈に係わっているといつても過言ではない。

昨年3月文部科学省から「学術情報基盤の今後の在り方について」という報告¹⁾が出された。その中で、大学図書館等の整備の在り方について網羅的に課題が整理され、併せて具体的な対応策が提言されている。また、本年3月には、大学図書館関係の研究者による大学図書館機能の再検討に関する科学研究費補助金による実証的な研究の成果報告書²⁾も出されている。

従って、各大学図書館はそれぞれの大学の置かれている実情に応じて、これらの報告に盛り込まれた諸課題を達成することが現下の急務となっている。それ故、大学図書館職員にいま求められているものは、これらの課題達成に向けて全力を挙げて改革・改善に取り組むことであるといえよう。

i. 大学図書館職員に求められているもの

大学図書館のこの課題達成のために図書館職員に求められているものは二つある。一つは、職員個々人が意識改革を行い、「資質と能力（コンピテンシー）の向上³⁾」に取り組むこと。もう一つは組織（図書館及び大学）の一員として、図書

館及び大学の将来を見据えて、「戦略的マネジメント（Strategic Management）⁴⁾」に取り組むことである。この二つのことは、所属する大学図書館がどのような環境や条件の下に置かれていくよりも、およそ改革を進める際の基本となる。従って、各人は現在の立場の如何に拘わらず、常に問題意識を持ちながら、個人として、更には組織の一員としての役割を自覚し、当面する諸課題の達成に向けて積極的に取り組んでいくことが肝要である。それはまた、最近、図書館経営において注目されている EBM（Evidence Based Management）⁵⁾の実践にも繋がることになると考える。

ii. 個人の課題—資質と能力の向上—は、例えば、次のような研鑽を不斷に積み重ねて行く⁶⁾。

- ① 旺盛なサービス精神を養う。
可能性の限りを尽くして、利用者の求めに応える。
- ② 現状に対して常に問題意識を持つ。
環境の変化や利用者のニーズを敏感に受け止める。
- ③ 図書館についての哲学を持つ。
図書館は何のために誰のために在るのかを考える。
- ④ 想像力・構想力を豊かにする。
大学と図書館（界）の在るべき姿を常に想い描く。
- ⑤ 豊かな感性を磨く。
左脳思考の限界を補って、発想を豊かに展開する。
- ⑥ 細密な企画力・作文力を鍛える。
制度改革はシナリオ創りによって成否が分かれる。

- ⑦ 情熱的な行動力・交渉力を身に付ける。
ステークホルダーの説得は、情熱によって決まる。
- ⑧ 関係者と情報を共有し、協働化を図る。
コミュニケーションを密にして、想いを共有する。
- ⑨ 館長と共に行動し得る経営感覚を養う。
予算要求やパブリシティ等の経験を積み重ねる。
- ⑩ 得意の専門分野（語学等を含む。）を持つ。
大学院等での研究やそれと同等の自己研鑽を積む。

iii. 組織の課題—戦略的マネジメントは、ミドル・アップダウント⁷⁾と協働によって推進する。

- ① 全学的な意思形成と協働体制（教員、事務職員、図書館職員）の構築
- ② 戦略プランニング委員会の設置
- ③ 外部環境分析・内部要因分析（SWOT分析による）の実施
- ④ ミッションとビジョンの決定
- ⑤ 包括戦略の策定（「成果体系図」による全体計画の可視化）
- ⑥ 評価と戦略へのフィードバック

iv. 結語（粹）

およそ改革・改善というものは、その必要性に気付いた者が自分の頭で考え、自ら行動を起こす以外に実現への途は開かれない。どんなに優れた論文や報告書を積み上げてみても、それだけでは何も変わらない。要は、知識を知恵に転化して、自ら一歩を踏み出すことである。そして、その踏み出した者たちが互いに連携・協働し、組織力を高めていくことである。

[講演]

序 今日は、私がこれまで40年以上に亘って大学図書館や図書館・情報行政に関わってまいりました経験の中から、今日のテーマに関して皆様のご参考になるだろうと思われるお話をいたしたいと思っております。それで二つの資料を用意し

ております。一つは、一枚ものの「レジュメ」でありますて、その中に今日の話の要点をしたためておりますので、それをよくお読みになっていたきたいと思います。特に、末尾に掲げております参考文献については、ぜひその本文をお読みいただくことをお勧めいたします。それから、もう一つが「参照文献」でありますて、これは必要に応じて適宜、参照していただきたいと思います。もし、これからのお話が時間切れになりました場合には、後ほどご一読くださいようお願いいたします。それから、今日の話は、パワーポイントを使って進めてまいりますが、スライドのコピー資料はお配りすることをいたしませんので、スクリーンの方をご注目いただきたいと思います。

私の話は、レジュメにもありますように、4つの柱がありますが、特に、2番目の「個人の課題」に多くの時間を割いて話したいと思っております。

はじめに（大学図書館共通の方向性と目標）

ご承知のように、昨年3月に文部科学省の科学技術・学術審議会の学術情報基盤作業部会から、「学術情報基盤の今後の在り方について」という報告が出されました。この中で、大学図書館の現状と課題と今後の対応策について報告がなされております。これは、この部会の中に置かれた大学図書館ワーキンググループによって作成されたものですが、そのメンバーの中に名古屋大学の伊藤館長先生と共に私も参画させていただいた、若干の意見を述べさせていただいたという経緯があります。その中に、「3. 今後の対応策」として、6つの項目が掲げられております。これらは、おそらく程度の差こそあれ、すべての大学図書館に共通する事項であると思われますので、各大学においては、速やかにその方向に向けて改革・改善の努力を払っていけばよい、ということになるわけですが、肝心なことは、その場合、皆さん各個人として、どのような心構えでその仕事に取組んでいけばよいかということになります。

1. 大学図書館職員に求められているもの

そこで私はいま大学図書館職員に求められている大事なことは二つあると思っております。それは、個人の課題と、組織としての課題の二つです。

まず個人の課題としては、個々人の資質と能力を向上させることに尽きると思います。ここに、コンピテンシーという言葉が出てきますが、これは最近、企業などの人事管理で注目されている言葉で、会社の中で優れた業績を挙げている社員の“行動特性”を指して言っておりますが、それを基準にして、他の社員の人事考課の際の評価に生かしていくこうとする、人材育成の手法に関わるもので、簡単に言えば、人は誰でも長所と短所をもっており、その長所を職務の上でいかに伸ばしていくことができるかが、その組織全体のマンパワーの向上を実現することに繋がるという考え方があります。

そこで、レジュメの2番目のタイトルである「資質と能力の向上」に「研鑽を不斷に積み重ねていく」としておりますのは、参考文献の6番目に挙げております「七つの習慣」(R.コヴィー著)という本の中で引用されている古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉に依拠しているものです。それは、「人格は繰り返す行動の総計である。それゆえに優秀さは単発的な行動にあらず、習慣である。」というものです。つまり、優秀さは、一時的なパフォーマンスのようなものではなくて、毎日毎日積み重ねていく「習慣」によって実現していくものであり、人格というものはそのようにして形成されていくものである、ということですね。言われてみれば当たり前のようにも思われますが、たいへん意義深い言葉です。そして、この本の著者はこの言葉を引用しながら、「習慣」に必要なものは、何をするか・なぜするかという『知識』と、それをどうやってするかという『スキル』と、何よりも実行したいという気持ち－『やる気』－が必要であるとして、この三位一体が成り立ったときに初めて「習慣」が実現できるということを解説しております。私も全く同感です。私がここで敢えて「研鑽を不斷に積み重ねていく」と表現したのは、そのような理由によるものです。

2. 個人の課題—資質と能力の課題—は、例えば、

次のような研鑽を不斷に積み重ねていく。

さて、私はその研鑽すべき事柄として、レジュメの「2」に示しておりますように、①から⑩までの10項目を掲げております。

まず、最初に①旺盛なサービス精神を養う。という項目があります。このことについては、どなたも異論はないだろうと思いますが、私は、図書館において、その図書館で所蔵していない図書資料の提供を求められたときの対応が、その図書館のサービスの度合いを推し測る有力なバロメーターの一つになるのではないかと思っております。

そこで、今から43年ばかり前の、まだ皆さんがお生まれになっていない時代ですが、その頃の私の体験談を紹介させていただきます。

当時、私は青森県に在ります国立の弘前大学の医学部の図書館に勤務して間もない頃でした。

あるとき、大学院の学生が図書館にやってきて、実は今学位論文を作成中で、どうしても参照しなければならない文献があって、その文献は日本国内には無くて、ソ連（現ロシア）のレニングラード国立図書館にあることが分かっているんですが、その文献のコピーを取り寄せてもらうことはできませんか、というリクエストを持ち込んできました。今では図書館の国際ILLなどは何でもないことかも知れませんが、当時、米ソ対立の冷戦状態の中では、ソ連の国内のことは一般的にもあまりよく分かっておらず、まして、大学としてもそれまで彼の国とはほとんどお付き合いも無かったものですから、当時の職場の先輩や上司に伺っても、このようなりクエストに関しては取り扱い規則も前例もないでの、これは体よく断った方がよいといわんばかりの反応でした。しかし、現に目の前に文献の入手を求めているお客様がいて、しかも、その文献の所在も分かっているのに、それに対して応えてやらないのは、図書館としては“自殺行為”にも等しい対応ではないかと思い直して、とにかく“ダメもと”でもいいからと思い、苦手の英文で手紙をしたため、先方に送ったんですね。案の定、2週間経っても何の音沙汰

も無く、やっぱり駄目だったかと諦めかけていた矢先に、ようやく返信と文献のコピーが送られてきました。私はとても嬉しくて、早速、そのコピーを学生さんに渡したところ、本人からもたいへん感謝されました。しかも、心配していた費用の請求に関しては、無料でよい、そのかわり、貴学発行の紀要である「Hirosaki Medical Journal」所載の（或る）論文のコピーを替わりに送って欲しい、という旨の返信が添えられていました。私はそのとき、念願の文献が入手できたという喜びもさることながら、当方の事情を賢察したその温情溢るる先方の図書館員の配慮にたいへん感動いたしました。と同時に、もしこれが立場が逆だったとしたら、果たして、当方がそのような配慮をすることが出来たであろうか、と考えたとき、内心忸怩たる思いを禁じえませんでした。そして、この経験から私は二つのことを学びました。一つは、利用者からの資料要求には、それがたとえ未所蔵の資料であっても、あらゆる手立てを尽くして応えなければならない、ということ。もう一つは、目の前にいる利用者だけが利用者なのではなく、国内外の他の図書館からの要求に対しても、相手館の事情に十分配慮した適切な対応ができるよう、図書館ネットワークを整備して、日頃からそのようなサービス精神を養える環境づくりが必要である、ということです。後年、あの英国のBLDSC創設の立役者として有名なアーカートさんの「図書館は利用者の要求に応えていなくても、それは明らかにならない。」（「図書館業務の基本原則（2）」）という言葉に出会ったとき、そのドキりとするような鋭く本質をついた指摘に、あらためて、図書館サービスの本質を思い知らされたような気持ちになり、それ以来、このときの教訓を常に反芻しながら、どんなユーザーに対しても懇切に対応するように心掛けるとともに、図書館ネットワークづくりの必要性を強く意識するようになりました。

次に、②現状に対して常に問題意識を持つ。ということと、⑥緻密な企画力・作文力を鍛える。という項目についての事例を紹介します。

それは、国立大学図書館間におけるILL（文献相互貸借）業務に係る“料金清算”制度の改革に関することです。1977年度までの国立大学等の図書館では、国の会計制度上のきまりから、各国立大学等の図書館同士の文献複写による資料の相互貸借に伴う料金の清算は、その都度、各大学間ににおいて個別に行われていました。わずか1件当たり数百円程度の費用が発生した場合でも、校費扱いの場合は、国費の授受に必要とされる納入告知書を発行して処理するし、私費扱いの場合はわざわざ現金書留にしたり、あるいは多くの場合、それも省略して普通郵便の中に潜り込ませて郵送したりして処理するというのが大方の図書館の現場の実態でした。そのため、現場では複写作業に加えて、費用の授受・送金という煩わしい会計処理をもこなさなければならず、このサービス業務は、極めて非能率的で時間の掛かるものでしたが、理不尽だと思いつつも、国の制度上、仕方が無いものだと諦めていたものでした。そして、その問題意識をずっと持ち続けていた私は、それから15年ほど経った頃、二度の転勤を経て、文部省の大学学術局（情報図書館課）に係長として勤務しておりました。そんなあるとき、大臣官房会計課の法規担当の係長さんから、何か会計事務の簡素化に資する改善テーマはありませんか、という打診を受けたんですね。私はすかさず、この案件を俎上に挙げてもらおうと思い立ちました。幸いなことに、その当時の直属の上司であった情報図書館課長は、後に小泉内閣時代の文部科学大臣になられた、あの遠山女史でしたが、私の提案に対して「それでは、お手並み拝見ね！」という一言で、その仕事をすべて任せてくれました。それから約一年掛りでその仕事に取組むことになるわけですが、その改革はどんなことだったかといいますと、この絵（ppt）のような仕組みを創って、それを基にした新たな図書館プロパーの会計事務の改善を実現するというものでした。この過程で最もエネルギーを費やしたのは何だったかといいますと、それは、この改善によって、自分の所掌する業務に直接影響を受けることになる文部省会計部署の三十数名の担当官への説得工作でした。文

部省では、年間の取り扱い金額が、高々数千万円規模の業務に関わる改善検討などに、関係担当官を一堂に集めて説明会などを開くことはしませんので、彼らが日常業務を行っている中に、こちらから入り込んでいって一人ひとり説得していくしか無かったんですね。早く済む人で30分位、長くかかる人では、相手の仕事の関係上1～2週間も掛けて辛抱強く説得しなければなりませんでした。このとき私は「自分がやらなきゃ誰がやる！今やらなきゃいつ出来る！」という言葉を常に自らに言い聞かせながら、奮闘して取組んでいました。その結果、幸いにして、省内の関係業務担当官のすべてを説得することができました。また「複写センター」の機能を担って頂くことになる大阪大学附属図書館の幹部職員の方々をはじめ、他大学の図書館関係者の方々からもアイディアや協力を頂きました。そして、最終的に各国立大学宛に発出された文部省学術国際局長・会計課長連名の公文書や添付の実施要項の作成に当たっては、現場の実務上の混乱や会計法令に抵触することのないよう、細心の注意を払って、30時間を超える徹夜作業で入念に作成しました。その甲斐があって、この改善は実現することができました。その後、この制度は更に20年を経て、この複写センターの機能は大阪大学からNIIに替わり、その適用される対象機関も公私立大学まで拡充された料金清算のシステムになり、今日に至っていることはご承知のとおりです。

さて、次は③図書館についての哲学を持つ。ということです。これについては、あらためて多くのことを話す必要はないだろうと思います。皆さんよくご存知の、有名なインドの図書館学者ランガナータンの「図書館学の五法則」を始めとして、先ほど挙げたアーカートさんの「図書館業務の基本原則」等これまで多くの先人によって語られた優れた言葉が残されています。参考資料にありますように、私も短い経験ではありますが、その経験を踏まえて考え出した図書館に関する私なりの哲学があります。お手許にある名古屋大学附属図書館研究年報の創刊号に掲載されました『図

書館の「仲よし」の源を究める』という論文をお読みいただければ幸いです。それは三重県立図書館の新館の際に、“真に開かれた図書館”を実現するために、「すべての図書館をすべての利用者に」というスローガンを策定することによって具現化していくことになるわけですが、その事例を少しご紹介したいと思います。私はこの図書館が新設されたときに文部省から出向してきたわけですが、驚いたことに、この新しい図書館を新築するに際して、三重県にはグランドデザインとよべるもののが全く無かったんですね。ですから、九分どおり出来上がっていた図書館の建物に、どんな“魂”を入れるのかを考えなければなりませんでした。

そこで真っ先に手掛けたのが、県が用意していた唯一のキーワードであった「開かれた図書館」を具現化することでした。当時の県の教育委員会規則によると、図書館資料の館外貸出には、利用者に、いわゆる“在住、在職、在学”的制約条件が付いていて、この条件を満たしていない利用者は、館外貸出を受けることが出来ない制度になっていたんですね。こんな図書館がまだ日本に在ったのかと驚きましたが、よく調べてみると、何もこれは三重県だけに限ったことではなくて、全国の公共図書館では別に珍しいことでは無かったということを知って更に驚いたんですが、とにかくこの問題を解決しなければならないと考えまして、先ほど申し上げた「すべての図書館をすべての利用者に」というスローガンを考えて、新館運営の基本理念とすることにして、早速、この教育委員会の規則の改正（該当条文の削除）を進言しました。

ところが、教育委員会の担当課長の強い抵抗に遭うんですね。一般にお役所は既定の規則や慣例をいじることに拒否反応を起こすのですが、新館の開館を目前にして、こんなことで躊躇していくは改革を先に進められないで、止むを得ず教育長に直訴しました。そしたら教育長はすぐ了解してくれて、規則改正の指示を出して、開館間際の委員会に付議してくれたお陰で、無事、目的が達成され、マスコミにも大きく取り上げられること

になるんですが、そうなると件の課長さんも、まるで掌を返したように、「館長よかったです！」と言って喜んでくれたんですね。そして、この改革は、それに続いて取り組んだ、大学図書館をも含む“館種を越えた図書館ネットワーク（MILAI）”の構築を成功に導くうえでも、大きな影響を与えてくれました。このように、およそ図書館に関して何か新しい改革・改善を企図し、実行する場合には、その根本に“哲学”が無くては、事柄を前に進めることができません。ですから、若いときから、常に図書館に対する自分なりの哲学を深めておくことがたいへん大切だと思います。

次に、その哲学に基づいて考えたことを具現化するときに、④想像力・構想力を豊かにする。⑦情熱的な行動力・交渉力を身に付ける。という能力を不斷から磨いておくこともまた必須の要件になります。そのことに関してはこの三重県での事例の中にもあるのですが、ここではそれとは別的事例をご紹介したいと思います。

皆さんご承知のように、今日、大学図書館にとって不可欠の仕組みである「学術情報システム」（その中枢の NACSIS）の構想を実現する段階で、多くの人々の努力や協力のお陰があったわけですが、その一助として、私もささやかながら大学図書館の現場の立場から、全国の実務者がこのシステムについて理解を深めることができるようになるための仕組み創りに取組んだ経緯があります。

それは、この学術情報システムが、今後、我が国の大学図書館界にとって、不可欠の存在になっていくものであり、何を置いても大学図書館の現場の職員にその内容を理解してもらうことが急務であったわけですが、1980 年にこのシステムの構想が盛り込まれた学術審議会の答申が出された当時、残念なことに、一部の学識者や図書館関係者の中から、誤解や偏見に基づく批判的な論評が公に出始めたんですね。そのため、図書館の現場の実務者に無用の不安感が広がる兆しが見え始めたことに、私は強い危機感を抱きました。そこで、その当時、横浜国立大学附属図書館の課長をしていた私は、たまたま横国大が日本図書館協

会の大学図書館部会の部会長校を担当していたものですから、全国の大学図書館職員が一堂に会して意見交換・情報交換を行える、「大学図書館研究集会」という新しい場作りを、部会の新規事業として立ち上げることを提案し、日図協の理事会に諮ってもらうとともに、国公私立の各大学図書館組織にも鋭意働きかけて、それを実現いたしました。そのとき、私はまず横国大の部長と館長を説得し、次いで日図協の部会の各委員に対して働き掛け、すべての段取りと準備は横国大で責任を持って行うからと言って了解を取り付け、徹夜してシナリオをつくりました。そして館長と分担して、神奈川県の長洲知事や特別講演に経済学者の大塚久雄先生（ICU）、基調講演に長澤雅男先生（東大）などに交渉して、これらの方々を招聘するとともに、各国公私立大学の図書館で先駆的な活躍をしている中堅の図書館専門職員の方々に呼びかけてスタッフをお願いして、実質上、横国大図書館が主体となって、1980 年 9 月に第 1 回の研究集会を横浜開港記念館で開催することができました。そして、更に引き続き第 2 回も横国大が主体となって東京（国立婦人教育会館）で開催して、それ以降は順次、関西と東京で交互に開催するという方式を確立していくわけですが、その第 1 回から数回に亘って、「学術情報システム」に関する内容をメインテーマにして、文部省関係者や図書館・情報学研究者などを交えて全国の実務者同士が意見交換・情報交換を行っていった結果、この構想や実現の必要性についての理解が深まり、システムを軌道に乗せるための協働体制づくりの機運が醸成されていったという経緯があります。この事業は国から指導を受けたわけでもなく、日図協や他の団体から要請されたわけでもなく、その当時の大学図書館界の状況や現場の“空気”を感じ取って、図書館の現場にいた私が発意し、想像力を逞しくし、構想力を發揮して企画立案を行うと同時に、それを実現するために、多くの関係者（ステークホルダー）の方々を情熱を持って説得し、賛同と協力を得ることによって実現させたものでした。幸いにもこの企画は成功して、その後も継続していくことになりますが、互いに設置

者別の枠を越えて大学図書館職員が共通の目標に向かって意識を高めていくうえで、大いに効果があったのではないかと思っております。何事によらず、このように新しい事業を起こしてそれを軌道に乗せていくときには、想像力・構想力と情熱的な行動力・交渉力が必須の要件になると思っております。

次に⑤**豊かな感性を磨く**。というのは、これから時代に様々な企画を成功させるためには、論理的な思考だけでは不十分で、いわゆる左脳思考の限界を右脳思考で補って発想を豊かにすることもまた、とても大切な要件になるのではないかと思っております。これは図書館での事例ではありませんが、私が現在おりますお茶の水女子大学で昨年開催しました、映画と講演会の特別企画（「いのち・こころ・祈り」）の催事で、副学長兼図書館長である羽入先生と私の協働作業によって実現した事例です。その着想から始まって具体的な企画立案を行い、外部の二人の芸術家（米国のマウント・ホリヨーク大学の八柳先生と日本の映画「地球交響曲」の龍村監督）への出演交渉を進めるとともに、ポスター・チラシのデザイン（pptで紹介）から作成と配布、そして、当日の対談のコーディネーターを羽入先生が担当する役割まで含めて、ほとんど二人の手づくりで事業を進めて成功させることになりましたが、その鍵となったのは、いわば当事者同士の互いの感性が共鳴し合えたことにあったのではないかと思っております。今後、大学図書館では、情報・資料の提供のみならず、資料展示会や講演会、音楽会など、多様な企画事業の展開がますます必要となってくることが予想されますが、その場合に担当する職員の感性が、その成否にとても大きく影響することになると思います。

⑥**関係者と情報を共有し、協働化を図る**。ということは、日頃、皆さんよくご経験になっていることだと思いますが、およそ組織の中の複数の人間で何か仕事を進める際には、常に関係者との間でコミュニケーションを密にすることと、それに

よって、取組む仕事についての共通理解をもち、互いに同一歩調をとって、課題達成のために協働していくことが必要であります。お手許の「参考資料」の7～9頁に、『日本の科学者』という雑誌に掲載された私の論文が出ておりますが、これは横浜国立大学在職中に、当時の学内の図書館運営委員会の先生方と共に取組んだ「図書集中化」の改革について、教員と図書館職員とが共にどのような考え方でこの課題に取り組んだかということを、公の場で表明したもの一つです。これによつて、それまで学内で揉めていた問題の論点が整理され、一定の方向付けが行われていったという経緯がありました。大学図書館の改革・改善にとって教員と図書館職員との間の情報の共有と協働は、とても大事なことだと思います。

⑦**館長と共に行動し得る経営感覚を養う**。これは、ひょっとして新任職員の皆さんにとっては、やや違和感を感じになられるかもしれませんかもしそうだとしたら、それこそが問題であります。これは決して部課長さんや係長さんのような一部の幹部職員だけに該当する事項ではなくて、図書館に勤務している全ての職員が自覚しなければならない事柄であると思っております。館長が今どんな課題について、何を考え、どんな行動をとっているかということについては、常日頃から注意を払っておくことが大切です。そして、そのことは、例えば、大学内の予算要求の際の資料づくりであるとか、対外的な業者との折衝であるとか、あるいは何か新しい事業を実施するための準備段階で、対外的にどんなふうにPRをするかとか、図書館が直面している経営上の問題点や方策などについて認識を深めて、いわゆる“経営感覚”を養っておくということは、すべての職員にとって必要なことです。

そして最後の⑧**得意の専門分野（語学等を含む）を持つ**。ということは、これから大学図書館職員にとっては、ぜひとも心掛けておくべき事柄であると思います。特に、かねて懸案になっている大学図書館の専門職制の確立にとって、教育もで

きるサブジェクト・ライブラリアンがぜひ必要だという時代が、もう既に来ておりますので、図書館情報学に限らず、何か自分の得意とする専門分野（語学を含む。）について、大学院レベルでの研究や、それと同等の自己研鑽を日頃から積み重ねておくことが大切だと思っております。

3. 組織の課題—戦略的マネジメントは、ミドル・アップダウンと協働によって推進する。

戦略的マネジメント（経営）とは、専門家の定義によれば、まず、組織の使命、将来像、目標を明確にし、その実現のために必要な諸活動を無駄なく（戦略的経営）計画に組み立て、その計画を遂行することを通じて目標達成を目指す経営手法である（寺田幸弘「戦略策定の理論と技法」）、ということになります。そこで、一般的には、次のような項目立てが考えられます。即ち、①全学的な意思形成と協働体制（教員、事務職員、図書館職員）の構築 ②戦略プランニング委員会の設置 ③外部環境分析・内部要因分析（SWOT分析による）の実施 ④ミッションとビジョンの決定 ⑤包括戦略の策定（「成果体系図」による全体計画の可視化） ⑥評価と戦略へのフィードバックです。それから、マネジメント・スタイルとしては、よく言われるトップダウン型とボトムアップ型がありますが、もう一つ大事なスタイルとして、ミドル・アップダウン型と呼ばれるスタイルがあつて、それがいま多くの「創造的な企業」といわれている民間企業などで実践されていることが、一橋大学の野中郁次郎先生などによって学問的（参考文献7.）に証明されているものです。これは、およそ会社などの組織の中では、ミドル（すなわち部課長レベル）が所管の業務に関して直属の部下を統率して、最も多くの情報を容易に入手できる立場にいると同時に、トップに対しても直近の立場にいて、上意下達と下意上達を迅速に行える恰好の立場にいることから、このミドルが積極的に発意・立案して、トップとボトムに速やかに働き掛けることによって、組織の意思決定と実践において極めて優れた成果をもたらすという理論です。しかし、これは何も企業の世界ばかりではなく

く、行政や大学の世界においても、意識するしないに拘わらず、既にかなりのところで行われております。そこで、ここでは私の直接経験した二つの事例をご紹介したいと思います。

その一つは、私が一昨年まで役員をしておりました私立の名古屋女子大学での中期計画策定に関する事例です。この手法は、かつて、名古屋大学が法人化に際して中期計画を策定した際に用いた手法で、当時、名古屋大学の総長補佐をしておられた池田先生（現在、名城大学副学長）が日本で初めて本格的にこの手法を採用し、実績を挙げられたのですが、その池田先生に直接ご指導を仰ぎながら、私が言い出しちゃって名古屋女子大学で試みたものです。この手法の最大の特徴は、大学の置かれた状況分析とそれに基づく戦略判断を、SWOT分析（強み、弱み、機会、脅威という四つの観点から大学を取り巻く現況を分析し、改革のベクトルを定める。）という科学的・合理的な考え方で進めるところにあります。そして、その分析と判断に基づいて、ミッションとビジョンを定め、その実現に必要な幾つかのカテゴリー（ドメイン）を設定し、そのドメイン毎に、具体的な目標設定と詳細計画を策定して、最終的にそれらの全容が可視化できるようにするため、「成果体系図」というものを作成するんですね。それを見ると、自分の担当する役割が全学の改革計画のどの部分に位置するのかということと、それが他の改革計画とどのように有機的に関連しているのかが一目瞭然に分かるとともに、責任の所在も明らかになるという利点があります。幸いにも、大羽学長のご理解とご支援を得て、この戦略策定を全学的に実施できた結果、一番熱心に取組まれた家政学部の食物栄養学科長の酒井先生から先頃ご連絡を頂きまして、昨年度の管理栄養士の国家試験合格率が、目標に掲げた100%で全国のトップになったという快挙の報に接することができました。この手法の優れている点もさることながら、このような手法を有効に活用することによって、関係者が一致して、いま大学が置かれている状況に対する危機感を共有し、現状打開へ向けて

共通認識を持って改革・改善に鋭意取組んだことが、その結果を齎したのだと思っております。要は、そのような意識を組織の構成員一人ひとりが持てるかどうかに掛かっているのだと思っております。

次は、お茶の水女子大学附属図書館における機関リポジトリの構築についての事例です。

お茶の水女子大学では、機関リポジトリの構築に向けて、今までほとんど準備が出来ていなかつた状態の中から、いかにしてそれを実現するに至ったかについて、図書館の職員（井上、廣田の両氏）が作成したパワーポイントで紹介します。

これは、お茶大のホームページを見ていただければよくお分かりになれると思いますが、今年の4月にスタートしてから一昨日の段階で、全学で863件のコンテンツが入力されております。この中で特徴的なことは、全教員のアニュアル・レポートがすべて搭載されているということです。そのことが先頃のNIIの委員会での審査でも高く評価されました。それから、何よりも本学では学長、館長、課長（いずれも女性）の3人が三拍子揃って強力なリーダーシップを発揮していることが強みです。それから、この事業には様々な著作権の問題が絡んできますので、そのことについて疑問や不安を抱いている学内の先生方に対して、文化庁の担当官や弁護士など外部の専門家を招いて学内研修を行って、その疑問を解消していくこともまた功を奏したものと思っております。この一連のプロセスで、お茶大では特別な経営手法などを意識して用いたわけではありませんが、図書館の茂出木課長が、羽入館長を通じてまさに“ミドル・アップダウントラネジメント”そのものを実践していて、それに職員の皆さんのが相呼応するとともに、郷学長をはじめとして、学内の先生方が積極的に協力してくれた結果として、次々に改革を実現していくことができたと思っております。

お茶大では、この間、何もこの機関リポジトリの構築だけに労力を割いていたわけではなくて、コンピュータのリプレイスだとか、目録データの遡及入力だとか、図書館建物の改修工事だとか、

いろんなことを並行して進めていたんですね。まるで、盆とクリスマスと正月が一緒に来たような状況の中で皆さんのが頑張っていたんです。

そして、この1年間を振り返って、目標達成の要因を図書館の現場の職員の人達が次のように総括しているのが印象的です。すなわち「小規模大学のよさを再確認したこと。学長のもとに早期にプロジェクトチームが設置されたこと。教員が極めて協力的であったこと。そして何よりも職員のチームワークができたこと。」です。

ここに、いま大学図書館に求められている最も大事なものは何かということが、端的に示されていると言ってもよいのではないでしょうか。

4. 結語

およそ改革・改善というものは、その必要性に気付いた者が自分の頭で考え、自ら行動を起こす以外に実現への途は開かれません。どんなに優れた論文や報告書を積み上げてみても、それだけでは何も変わりません。要は、知識を知恵に転化して自ら一步を踏み出すことです。そして、その踏み出した者たちが互いに連携・協働し、組織力を高めていくことです。その際、前に述べたミドル・アップダウントラネジメントは、多くの創造的な企業でその成果が実証されている手法ですが、それは先進的な大学図書館でも事実上、既に広く行われております。また、初任者にとって大事なことは、各界の先輩が新人に対して異口同音に助言しているように、常に二つ上の上司になったつもりで、かつ、より高い目標を掲げて仕事に取り組むことです。それは、より大局的な視野と責任感を持って仕事に取り組むことができるようになる秘訣でもあります。ミドルやトップになってから、いきなりリーダーシップを発揮しようと思っても無理です。それ故、資質や能力を高め、視野を広めることは、若い時から常に努力と経験を積み重ねる（ことを習慣にする）ことによって、自ら実践していく以外にありません。その結果として、新たな展望も開けてくるし、更なる創意工夫も必ずしも可能になってくるのです。とりわけ、大事な次のキーワードを忘れないことです。

それは「ミッション、ヴィジョン、パッション、アクション」の四つのキーワードです。

最後に私の座右の銘をご紹介します。「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは（ ）の為さぬなりけり。」は、皆さんよくご承知の江戸後期の米沢藩主で数々の改革を成し遂げた名君といわれる上杉鷹山の歌ですが、括弧の部分にはご承知のように「人」という文字が書かれております。この歌を拳拳服膺していつも音読していた私はあるとき、「ひと」という読みは、「他人」という文字を書いた場合でも、そのように読めることから、ここの部分をいつの間にか「成らぬは他人（ひと）の為さぬなりけり」というふうに、事が成らないのは自分のせいではなく、何処かの誰かのせいであるかのように曲解しようとしている気持ちが自分の中に見え隠れすることに気付いたんですね。これではいけないと思い直して、それ以来、こここのところを敢えて「自分」という言葉に置き換えて「成らぬは自分の為さぬなりけり」と言い替えるようにしております。すべて物事の成否は、それを敢えて自分の責任に引き寄せて捉えて、どんなレベルで始めてもいいですから、自ら率先して第一歩を踏み出すように心掛けければ、必ずその後の展望も開けてくるように思います。

「自分がやらなきゃ誰がやる！今やらなきゃいつ出来る！」（改革は魄より始めよ！）

皆さんの今後のご健闘を心から期待しております。

（本稿は当日の講演に加筆修正を行ったものです。）

〈参考文献〉

- 1) 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会「学術情報基盤の今後の在り方について」（報告）（平成18年3月23日）
- 2) 土屋俊 他「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」（科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書）（平成19年3月）
- 3) ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク『キー・コンピテンシー』（2007年7月、明石書店）
- 4) 龍 慶昭、佐々木亮『大学の戦略的マネジメント』（2005年9月、多賀出版）
- 5) 永田治樹「エビデンスに基づく図書館経営」（2007年第55回日本図書館情報学会研究大会シンポジウム）
- 6) スティーブン・R・コヴィー『7つの習慣』（2004年6月、キングペラー出版）
- 7) 野中郁次郎、竹内弘高『知識創造企業』（2004年3月、東洋経済新報社）
- 8) 逸村裕、竹内比呂也『変わりゆく大学図書館』（2005年7月、勁草書房）

アメリカの研究図書館 歴史と現状

中部大学附属三浦記念図書館

松林正己

アメリカ図書館界の豊かさと多様性を説明するには、様々な切り口すなわち側面からアプローチが可能である。本稿では主としてアメリカの高等教育を支える研究図書館を中心に紹介したい。

研究図書館とはなにか？

アメリカで〈研究図書館（Research Library）〉と呼ばれる機関が加盟する組織が現在3つある。最大組織はアメリカ図書館協会（American Library Association: ALA）傘下の〈大学研究図書館協会（Association of College and Research Libraries: ACRL）〉¹⁾で、機関と個人会員によっても構成される。二つめは〈研究図書館協会（Association of Research Libraries: ARL）〉²⁾で、米国議会図書館（以下LC）を筆頭にアメリカの主要な研究（＝大学院）大学の図書館が加盟する。国立図書館はその国の出版物を包括的かつ網羅的に収蔵する関係で研究図書館機能を必然的に従属させる。加盟館でLC以外にも高等教育に直接は関わらないニューヨーク公共図書館も加盟している。資格はアメリカの高等教育機関を10種類に分類したカーネギー高等教育機関分類表（The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education™）³⁾で、上位クラス博士課程研究大学（Doctoral/Research Universities）に属し、15以上の博士課程（専門領域）をもち、全学で毎年50名以上の博士学位を授与している大学の図書館が、審査を経て、加盟を認められ、年会費2万ドルを納める。ARLは研究図書館の品質を審査し、研究大学の知的資源の品質維持と提供されるサービス品質に関わる国際的な評価指標の維持を使命にしている。見方によればARLは研究大学の名門クラブのような存在である。三つめは、独立した研究図書館が加盟する〈独立系研

究図書館協会（The Independent Research Libraries Association: IRLA）〉⁴⁾がある。この協会は1972年にARLから分離・独立した組織である。IRLA加盟の図書館は教育機関ではないために、ARLの評価基準に馴染まないために発足した。

洗練された図書館をいくつ見学しようとも、サービスの品質を精確に理解するには、使ってみないかぎり、実感できない。アメリカで研修を受けるだけでは、図書館の強さや豊かさを実感しにくい。それは運営の基盤が見えないからである。たとえば、洗練されたサービス品質格差の幅が、アメリカの場合狭い。それは研究図書館として品質を戦前から競って、整備してきた蓄積があるからだ。競争にあたっては、ARLの評価基準が利用され、高品質のサービスを提供できる水準なり標準が暗黙に存在する。その基準は学術情報としての扱い方であり、ANSIやNISOの標準規格としてマニュアル化されてはいない。ARLの年次図書館統計書では、蔵書冊数など基本的な18種類の数値が比較されているに過ぎない。逐次刊行物ならば所蔵状況を欠号状況応じてポイント制で採点して、定性的な評価値に変えて測定したり、目録品質をLCの目録データを基準（LCの目録データは絶対的な存在で、専門職キャタロガー以外修正作業はできない）に品質を評価、図書館経営上は専門的な基準が設定されて、競争原理が働いている。それらを紹介する紙幅はないので、研究図書館の有機的なつながり方を中心にする。読者諸賢が将来旅行や出張で、その地を踏まれる可能性の高いニューヨークを事例にして始めよう。

日本で一番知名度のあるアメリカの図書館は、ニューヨーク公共図書館（New York Public Library: NYPL）ではないだろうか。それはこの図

書館正面の光景と三階のローズ閲覧室の映像で始まる『ゴーストバスターズ』で、その存在を知られ、現在でも愉快で楽しい映画として知られているからだ。アメリカについてあまり知らない人でも「アメリカの図書館といえば、ゴーストバスターズに出てくる・・・」と云われるくらいだ。NYPLについては菅谷明子著「未来をつくる図書館」⁵⁾に詳細な報告があるし、拙著⁶⁾でも紹介したので、是非参照願いたい。

NYPLの図書館文化を地道に支えるとともに文化的成熟の象徴として Library Way⁷⁾と名づけられた通りが41丁目にある。歩道には図書館文化に相応しい名句名言を刻んだ銅板はめ込まれ、人々を楽しませている。銅板モニュメントを寄贈しているのは、近くのグランド・セントラル・ステーションが関わる財團で、マンハッタン最大の繁華街で活動している諸機関が構成する。いわば NYPL は地元でも最大の支持を得ていることを証明した文化事業なのである。Library Wayに刻まれた名句を一つご紹介しよう。いずれも名文句で、エピグラフなどに引けそうなものが多い。たとえば「情報は光、情報それ自体、何かの光 (Information is light, Information, in itself, about anything, is light.)」著者は映画脚本家で映画監督でもある Tom Stoppard (1937-) が著書 Night and Day⁸⁾の中で記した一文章である。なかなか哲学・文学的名句ではないか? こうした名文が96枚も歩道に埋め込まれていてことになっており、読んで歩くだけでも楽しい。残念ながら不心得者はどこにもおり、読めないものがかなりあるように思われる。

この歩道に面して、ブックオフが店を開きしているのを2006年秋に見つけて仰天した。日本の古書店文化を挑発する存在だが、アメリカの書籍文化の殿堂 NYPL 本館前での営業は果敢な挑戦にも見える。アメリカの書店文化は日本以上に健全で豊かある。図書館員並みに書誌情報精通してレファレンスのできる人も多い。ただの安売りで日本の古書価格を破壊した商法が、アメリカでどのように受け入れられるであろうか? 実に興味深い。

アメリカの図書館文化を牽引するニューヨークの歴史

ニューヨークの図書館文化が豊かになった背景には、ニューヨークがアメリカの経済を牽引している歴史がある。象徴的な歴史として世界最初の「図書館長会議 (Librarians' Convention)」が1853年9月15-17日に開催され、この会議は図書館雑誌としても世界で最初に刊行された「ノートン文献彙報 (Norton's Literary Gazette)」を出版していたチャールズ・B・ノートンらが企画し、議長にスミソニアン研究機構図書館長のチャールズ・ジュエット (Charles Coffin Jewett, 1816-1868) が取まり、事務局にイエールとハーヴィードを修了したばかりの少壯氣鋭ダニエル・コイト・ギルマン (Daniel Coit Gilman, 1831-1908 ALA 永久会員 後にジョンズ・ホプキンス大学初代学長) も参加していた。図書館を近代の知的営為として社会的に制度化した会議で、のちには ARL の起源としてその名を残す。参加者は13州から82名である。会議の大きな成果は、総合目録、現在の「全米総合目録 (National Union Catalog: NUC)」に相当する提案がなされたこと (19世紀に実現はしていないが、この事業を引き継いだのは ARL と LC である) とワシントンDCに事務局をおく図書館協会設立構想が提案されたことである。この会議は毎年定期的な開催を予定されたが、経済不況と南北戦争のために、1876年にフィラデルフィアでのALA 設立までは、中断されたままであった。

私設図書館の興隆：その遺産と伝統

NYPL以外にも私設図書館として著名な図書館がある。マンハッタンには19世紀から富豪が多く住んでいたため、さまざまなコレクターがいた。収集されたのは書物、絵画から骨董などの諸美術品まで多岐にわたる。メトロポリタン美術館などの収蔵品は彼らコレクターたちの遺産が寄託され、公開されたものである。寄託せずに私設機関として知的財産を公開している図書館や美術館も多数ある。

マンハッタンの観光スポットとして一番人気のある図書館博物館では、印刷文化の至宝グーテン

ベルク聖書3セットを所蔵するモルガン図書館博物館（The Morgan Library & Museum）である。エドガー・アラン・ポーやジェーン・オースティンらの手稿などオリジナリティの高い原稿等を多数所蔵し、楽譜も世界で無二のものばかりである、モーツアルトの「ハフナー」を筆頭に、シューベルト、バッハ、マーラー、ベートーベン、シェーンベルクなどの作曲家の自筆譜を展示している。すべて研究利用に応じている。2006年4月に3つの図書館博物館をつなぐ増築・リニューアル工事を世界的な建築家レンゾ・ピアノ（Renzo Piano）が竣工させ、大きな話題となり、ニューヨーク・タイムズなど新聞でも竣工を報道している。この図書館は全米史蹟の指定を受けているIRLAの加盟館である。NYPLに較べると小さな図書館・博物館であるが、コレクションの品質はARL加盟の図書館でも比肩できない貴重な資料を上述のとおり多数所蔵し、研究図書館としての品質を語っている。

ブロードウェイの劇場街を中心にカーネギー・ホール、メトロポリタン歌劇場を中心としたリンカーン・センターにはジュリアード音楽院、ニューヨーク公共図書館パフォーマンス芸術研究図書館や20を越す劇場・ホールが集積する。モルガン図書館からリンカーン・センターまでは歩いても20分位で、マンハッタンの豊かな芸術環境がわかる。パフォーマンス芸術を教育から創作、実演と鑑賞までの一貫体制を備えているのがマンハッタンであり、それを知の記憶装置として維持・保管しているのが図書館（北米の大図書館は、活字資料とともにアーカイブや博物資料を多数所蔵している。英語圏では博物館、図書館とアーカイブ三者の関係を、頭文字をとってMLAと呼ぶ）で、それを見事に実践している。過去の偉大な手稿楽譜を保存するのがモルガンならば、かつて上演された作品を映像、衣装やシナリオとして保存しているのがNYPLパフォーマンス芸術図書館で、展示エリアで旧作をビデオ上演し、衣装や楽譜を展示して、利用者を楽しませる。

図書館を築いたモルガンもカーネギーと親交があり、図書館の意義を親子2代で知悉していた。

初代館長は黒人女性のベル・ダ・コスタ・グリーン（Belle da Costa Greene）で、西洋書誌学に造詣が深く、モルガンの絶大な信頼の下に資料の選択を担当していた⁹⁾。

モルガン図書館博物館、NYPLパフォーマンス芸術図書館、そしてジュリアード音楽院の図書館に加えて北には全米屈指のコロンビア大学バトラー図書館、南にはニューヨーク大学ボブスト図書館があり、パフォーマンス芸術を中心にクラシック音楽研究や文学研究には実に豊かな資源を調査、体験、検証できる環境を完備した〈島〉である。それも手稿、印刷媒体、視聴覚資料等、音楽研究には必須のあらゆる媒体を駆使でき、実際に音楽では最大の価値を持つ〈音源〉それ自体を隣接のホールで鑑賞・体験できるまさに活きた空間がマンハッタンの研究図書館自体を構成している稀有な街でもある。

高等教育における研究図書館の出現

高等教育における研究図書館の成立は、研究大学の成立とともににある。この前提で図書館史を振り返るとジョンズ・ホプキンス大学の存在が浮かび上がる。ジョンズ・ホプキンスは1876年建国百周年に開学する。

大学図書館は大学の使命遂行のためにあるが、アメリカの研究大学のように、在学生の大半が大学院生で、学部生が10%前後の大学と日本のように逆に学部生が大半で、院生が10～20%の大学制度では図書館のコレクション内容が自ずと異なる。

研究大学の嚆矢ジョンズ・ホプキンスの初代学長ギルマンの図書館長としての実績を調査していると、イエールの図書館を自ずと、彼が館長を務めていたため、調査せざるを得ず、昨年から調査を開始した。そこでイエール大学の模様をお話しよう。キャンパスは18世紀からゴシックをベースにした建物で統一されている。誇ってきた学部生向け図書館Cross Campus Libraryを改装して、Bass Libraryを設計するさいにも、ゴシックに馴染むものが要求され、既製品を使わずに特注の調度品で見事である。ゆえに内部の雰囲気は地

味だが、数十年後には使い込まれて、本館スターリング記念図書館との風景や雰囲気から違和感がない。近代建築を決して排除している訳ではない。ルイス・カーンが設計した美術館が二つもあり、美術館は19世紀までは図書館の一部であった。20世紀にスターリング本館が竣工してから、美術館を関係学部の建物に移管した。スターリング図書館もゴシック基調である。典型的デザインは新聞室を飾る象嵌のような細木細工はまさにゴシックの真髄で、現代では滅多にお目にかかれないので感動する。中庭も中世ヨーロッパの館を思わせる佇まいと、落ち着いていて野外での読書に適した雰囲気がある。その中庭に面した東側の建物が、アーカイブズを閲覧する手稿・アーカイブズ部である。調査の合間にイエールの同僚諸氏の配慮で見学した分館の専門（主題別）図書館を紹介しよう。



写真1 正面がスターリング記念図書館で、芝の下にBass Libraryがある。

まず新聞室の隣にある音楽図書館は数年前に中庭に屋根を張り、その下に増築されたもので、あたかもドーム閲覧室のように天井の高い部屋である。2階部分が楽譜書架と閲覧室、1階部分は音楽資料のCDなどを聴くブースとピアニカまでおいでいる。

2階以上の研究図書館は、学外者は原則的に利用できない。そのなかに東アジア図書館もある。東アジア図書館は、閲覧席の仕切りに障子をアレンジして、雰囲気の演出が工夫されている。東

アジア図書館と呼ばれるとおり収蔵している資料は、CJKすなわち中国、日本、韓国語の資料が直接閲覧できる。東アジア図書館設置に向けて、北米で最初に尽力したのは朝河貫一（1873–1948）イェール大学教授である。アナール学派とも交流のあった世界的な歴史学者で、主著は邦訳されているので、詳細な紹介は割愛する。朝河は東アジア図書館設立にさいして、ギルマンに助言を求めたが、ギルマンは素っ気ない返事を送ったらしい。

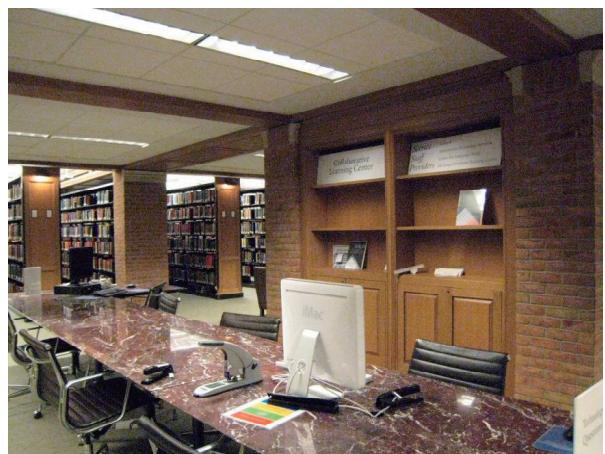


写真2 ラーニング・コモンズ Collaborative Learning Center

2階の一室には、アメリカでは国宝級のコレクションがある。ベンジャミン・フランクリン文書編集室（The Papers of Benjamin Franklin）である。かつてフィラデルフィアの図書館組合（Library Company of Philadelphia: LCP）を訪ねた経験から、見学を申し出ると快く案内してもらえた。本来ならばLCPが行うべきベンジャミン・フランクリンの書簡アーカイブズをイエール大学が保存・共有（他機関所蔵の文書は複写で所蔵。すなわち新たな書簡などが見つかれば、複写物で入手、保存し、著作集の改訂追加原稿となる）し、著作集The Papers of Benjamin Franklinの改訂作業を続けている。まさに研究図書館の典型である。「なぜイエールにあるのですか、LCPじゃなくて？」と尋ねると「これは卒業生のコレクターが寄贈してくれたのです」と明快な返事を頂けた。歴史を保存するのは図書館や博物館のみならずコレクターが実に大きな役割を果たしている。個人所有に限

界が来れば、コレクションに相応しい委託または寄託機関として大学図書館が選ばるべきである。

LCP も思いつきで突然訪問したが、同僚ということで副館長のマン（Mann）さんが重要な書庫をわざわざ案内してくださった。私がオハイオ大学のアセンズでキャタロガーをしていたというと、昨日会った人はアセンズの公共図書館長に就任するために挨拶に来た「これも縁だね」と感慨こめて話された。図書館人の同僚は、どこでもお互いに友愛に満ちた関係が維持できる実に貴重な職業である。

最後は稀覯本収集で世界的に著名で、図書館建築としても有名なバイネットキ稀覯本手稿図書館（Beinecke Rare Book & Manuscript Library）¹⁰⁾に登場願おう。壁が大理石板で、太陽光を通し、書庫が展示部から見える独特の雰囲気の空間となっている。バイネットキは、日本と稀覯本に関する意義の見出し方が違い、多いに勉強になる。「活用されない資料は、価値がない」という初代アメリカ図書館協会会长ジャスティン・ウィンザー（Justin Winsor, 1831 – 1896）の名言は生きている。たとえば、サマー・セッションでは、高校生にまで稀覯本を使ったシェイクスピア研究講座などが開かれ、稀覯本を活かした保存と活用を進めている。これを見ても教育品質の厚さをどのように評価すべき、を考えるべきであろう。こうしたバイネットキの活動を教えてくださったのは、稀覯本閲覧部で唯一の日本人女性スタッフだった斎藤さんで、一昨年の春先に逮捕された古地図泥棒の発見者でもある。この事件は日本でも新聞報道されたし、ニューヨーク・タイムズは実に詳細な報道をしている。

ARL の歴史的展開

研究図書館の現状を北米レベルで理解するには、ARL の歴史的経緯やその活動を知らずしては理解が深まらない。HP を見れば、年表など歴史的経緯や成果を説明した文書が掲載されてはいるが、歴史的な因果関係や意味は判りにくい。幸いにも LC 職員で、ARL の歴史を博士論文として執

筆した人がいる。LC 海外事務所に在籍したマックゴワン博士で、ARL の図書館史を LC に寄託された ARL 文書をもとに創設から 40 年後の 1970 年代までを記述している。本論文は 20 世紀アメリカの研究開発体制に研究図書館とその協会が如何に連携したかを実証した壮大なパノラマである。

マックゴワンは研究図書館の定義を最初に試みる。研究図書館の類似概念を整理し、i) Reference library、ii) Research library、iii) Scholarly library を峻別、自らの定義として「研究図書館は探究（investigation）を推進可能にする図書館で、探究対象の重要な（critical）あるいは科学（学問）的で、体系的な探究に関わる情報を提供する要素を備えていること」と述べている。

アメリカ社会における研究大学

では研究大学（The Research University）は、アメリカではどのような社会的評価を得ているのであろうか？アメリカ社会史百科事典によれば、第二次世界大戦以降に研究大学のある街では「最大の無煙産業（the largest smokeless industry）」として地元経済の牽引車として大きな役割を果たしているのが共通している。私が最初に仕事をしたオハイオ大学のあるアセンズでも最大の雇用機関で、ボルティモア市内にはジョンズ・ホプキンスはメリーランド州最大の雇用機関と謳った広告が随所に見られる。

ジョンズ・ホプキンスの果たした役割

建国百年 1876 年に ALA の設立と同年に開学するジョンズ・ホプキンスは、当初研究用参考図書を主にヨーロッパで 6000 冊強を買い付けて開館する。研究対象資料の不足を相互利用（ILL）で補完する体制は、準備段階から構想されている。

また大学の知的成果を公表する手段として、大学出版（University Press）や各種学会を学内にいち早く誕生させ、アメリカの科学研究における学術情報流通（Scholarly communication）という盤石を固めたのもジョンズ・ホプキンスである。アメリカ化学会（American Chemical Society : ACS）

や近代言語学会 (Modern Language Association : MLA) の基盤を設立し、のちに独立させている。ARL 創立の使命に含まれる学術情報流通はジョンズ・ホプキンスによって当初整備された。

研究大学設置ブームと ARL への道

研究大学設置ブームで 1900 年には 150 機関で大学院が開講、同年に学位を授与された 90 % が 14 機関に集中し、アメリカ大学協会 (Association of American Universities) を形成して、それらは ARL の中核となった。それらはカリフォルニア大学 (バークレー)、シカゴ、コロンビア、ハーヴィード、ジョンズ・ホプキンス、アメリカ・カトリック大学、クラーク、コーネル、ミシガン、ペンシルベニア、プリンストン、スタンフォード、ウィスコンシンとイエールである。これらの図書館長が中心に ARL 設立運動が始まる。

ALA 大学参考図書館部門 (College and Reference Section: CRS) の主要メンバーが同部門の活動に満足できず、5 年以上の打ち合わせを経て創設を準備した、とマックゴワンは指摘している。その創設は当時高騰を重ねたドイツの学術雑誌をアメリカで継続講読を可能にする体制を整え、学術情報資源の確保が目的で、最初の提案者は定かではないが、アーカイヴズによれば 1928 年 CRS 年報創刊の前年である。つまり世界恐慌直前に設立運動が起り、本格化するのは金融恐慌が回復した 3 年後に再開している。

創設のための事前調査のあと 1932 年 1 月 22 日の ALA 総会 (シカゴ) で 42 の図書館に設立趣意書が送付された。図書館の蔵書と館長個人の資格という条件であった。

創設に関わったメンバーは、ALA 活動委員会 (the Committee on ALA Activities) のナザン・ヴァン・パッテン (スタンフォード) の「分離した大学図書館組織が必要ではないか」(1931 年 ALA 総会で発表) という発言を容れて、ジェイムズ・T・ジェロルド (プリンストン大学) らが調査研究して、創設案をとりまとめた。

案の要点は次の 6 点である。

1 研究図書館協会と呼ぶべき組織の発足を勧

告する。機関主導でアメリカ大学協会に属し、一部は大規模公共参考図書館 (the larger public reference libraries) で構成され、他の機関は選出により加盟を認める

2 ARA とは一線を画した組織で、下記の性格をもつ組織とする。

完全な独立機関

全米法律図書館協会に比肩し、アメリカ図書館協会とも通じた組織

アメリカ図書館協会からは独立したセクション

大学およびレファレンス部会からは独立した部会

3 ALA 年次総会開催時の総会と他にも別の学術団体の年次総会開催時に合わせる

4 参加者資格 館長 副館長 部門長

5 定型プログラムは直接議論可能なものは対象外 但し議長が継続議論を認めたものは除外

6 年度単位で議長と監事を選出する

創設案の内容に関して、6 項目中 5 項目が 33 図書館から承諾された。事務局は持ち回りで、協会運営には諮問委員会があることになった。初代事務局長にはロチェスター大学のドナルド・ジルクリストが 5 年任期で就任。意思決定機関である諮問委員会には、クレラー図書館の J. クリストイアン・ペイが 2 年任期、プリンストン大学のジェイムズ T. ジェロルドが 3 年任期、カリフォルニア大学バークレーのハロルド L. ロイプが 4 年任期、さらにコロンビア大学のウィリアムソンが 5 年任期で就任した。

ARL の特徴は会員制で組織され、会員資格を得るには条件が定められていた。この会員制が ARL の最大の長所でもあり、短所でもあった、とマックゴワンは述べて、以前には「大変な俗物クラブと謗られプロとはいえない行動に満ちていた」というエピソードを紹介している。

加盟には会員資格審査が必要であり、それに CRS が刊行した College and Reference Library Yearbook (1929 年創刊 31 年廃刊) に掲載されている図書館統計によるランキング表によっていた。会員は公募されず、ランキング表から諮問委

員会がノミネートし、会員投票で承認あるいは不可を投票用紙に記入して、集計し可否を認定するというまるで秘密結社なみの決定であった。現在毎年公表されている ARL 統計表は、こうした歴史を経て 60-70 年代に様々な改革を行なわれた。2004 年に創設メンバーであるスタンフォードが脱退し、RLG (Research Library Group) は OCLC に委託された。ARL を中心に戦後アメリカの学術研究資源体制は整備され、歴史にも興味深いエピソードが多数あるが、これは別稿に譲りたい。

[注記] 本稿掲載以外の図書館の写真は、建築史家五十嵐太郎（東北大学准教授）氏主宰の「ト・アカイヴ」に掲載してあるので参照願いたい¹¹⁾。

- 1) Association of College and Research Libraries.
[<URL: http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/index.cfm>](http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/index.cfm)
- 2) Association of Research Libraries.
[<URL: http://www.arl.org/>](http://www.arl.org/)
- 3) <URL:<http://www.carnegiefoundation.org/classifications>>
- 4) The Independent Research Libraries Association.
[<URL: http://irla.lindahall.org/>](http://irla.lindahall.org/)
- 5) 菅谷、明子. 2003. 未来をつくる図書館：ニューヨークからの報告. 東京：岩波書店.
- 6) 松林、正己. 2007. 図書館はだれのものか：豊かなアメリカの図書館を訪ねて. 春日井市：中部大学（販売 風媒社）.
- 7) <URL:http://www.grandcentralpartnership.org/what_we_do/beautify_library_way.asp>
- 8) Stoppard, Tom. 1979. Night and day: a play. New York: Grove Press.
- 9) Ardizzone, H. (2007). An illuminated life: Belle da Costa Greene's journey from prejudice to privilege. New York: W.W. Norton & Co.
- 10) <URL:<http://www.library.yale.edu/beinecke/index.html>>
- 11) Photo Archives 54
[<URL: http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2005/04/08152632.html>](http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2005/04/08152632.html)
Photo Archives 90
[<URL: http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2008/03/31203857.html>](http://tenplusone.inax.co.jp/archives/2008/03/31203857.html)

どこから拓く？ 大学図書館の可能性 — 学習支援の視点から

同志社大学総合情報センター

井 上 真 琴

みなさん、こんにちは。同志社大学総合情報センター・情報サービス課の井上真琴です。本日は、お茶の水女子大学附属図書館の茂出木理子さんと協力しまして、「どこから拓く？ 大学図書館の可能性－学習支援の視点から」というタイトルでお話しすることになります。

茂出木さんとは、国立情報学研究所主催の大学図書館職員研修会で講師仲間でありまして、なかなか人使いが荒く、酷い方です。昨年東京大学会場で研修講師の仕事を終えたあと、お茶の水女子大学は東京大学から地下鉄でひとつ隣の駅だから、立ち寄って研修と同じ話をせよと命じられました。もちろんノーギャラです。女子大の雰囲気に魅かれてフラフラ訪ねていきましたら、何と図書館長や参与の方々が待機しておられるではありませんか。腰を抜かしそうになりましたが、これから図書館はどのように教育や学習の支援をすべきか、私の意見を陳べさせていただきました。本日はその時の話をベースにしております。

言葉は悪いのですが、おそらく私の話で図書館長を焚きつけ、井上の言っていることを実地検証したいと館長に調査旅費を工面させて、茂出木さん自身で海外の図書館を視察されました。この海外視察で根拠づけを行って、一氣にお茶の水女子大学附属図書館の改革を実行されています。私は“出汁”として呼ばれ、館長を洗脳する役回りを演じさせられたのでしょう。

館長先生に申し上げました。「本が買えないなら、ILLの料金を学生に対して無料にするだけでも、大きな学生支援ですよ。会計や支払いに関する事務処理と人件費が削減できます！」「場としての図書館を取り戻すために、欧米のラーニング・コモンズのような施設を検討してはどうでしょ

う」。これらのことは早速に手当てされました。私が訪問した翌年には、すでに文献複写の無料化を実施されましたし、ラーニング・コモンズの設置にも着手されました。茂出木さんの頼もしき剛腕。このくらいの意気込みで、学習支援を開拓していくかなければなりません。

I. 教育・学習環境の変化と図書館

では講演の本題に入らせていただきます。最初に学習支援が声高に呼ばれるようになった背景、バックグラウンドについて言及し、それから教育・学習支援を開拓するために、図書館はどのような視点と切り口からは入ればいいか皆さんとともに考えます。主として同志社大学での実践（予定のもの含む）を紹介するなかで、視軸を示したいと考えています。最後に実施・運営に移していく際のこころがまえや方法について言及します。

最初に私の勤務する同志社大学の概況説明をしておきましょう。学生数約2万5千人（うち約1割が大学院生）で、学位研究室も含んだ蔵書冊数を約220万冊、年間資料費は10億円強というレベルです。そのなかで、図書館の蔵書約80万冊が学生用資料として位置づけ、年間約2億円分を図書館員が教育・学習支援のために選書します。

学生に手厚いと感じられるかもしれません、どの程度の学生が図書館の常連さんなのか。入館チェックシステムを利用してリピーターを集計したことがあります。結果は、年間に50回以上図書館を利用する人は、全学生の15～16%にすぎません。

年間利用50回。馴染みの居酒屋で「常連っていったらどのくらい来店する人をさしますか？」とたずねたところ、「週1回くらいは来るひと」

という答えが返ってきましたので、50週で50回というのを指標にしてみました。実にいい加減な指標ですが、リピーターは少ないですね。

こうした状況を少しでも改善したいのですが、おりしも教育プログラムの再編成や授業方法の変化などがあり、こと図書館の教育・学習支援にとっては追い風が吹くと思われる動きがでてまいりました。特に同志社大学ではそうです。

理由は、真面目に教育改革を考えだしたからです。いま、文部科学省のGPがさかんに議論されますね。よい教育取り組みには補助金を出す。あきらかに政策誘導なのですが、特色GP・現代GPってことば、耳にされる方も多いはずです（2008年度からは両者を統合して、教育GP）。中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」に述べられる教育改革をみても、まさに図書館が存在感を示すまたとないチャンスが到来しているといえるでしょう。

「実践知」を学ぶ問題解決型の教育プログラム等が注目されるようになり、初年次教育、入学事前教育、アクティブ・ラーニングの手法やPBL（Project Based Learning, Problem Based Learning）の手法を用いた教育プログラムの設置が多くなってきました。大きな教育改革のうねりのなかにいるのは間違ひありません。

II. 教育・学習支援の諸相と図書館の視軸

II. -1 入学事前学習プログラム

ここからは例を挙げてみましょう。同志社大学商学部には、特色GPに採択されたプログラムに「学生と教員の幸せな出会いを目指す導入教育」というものがあります。このようなタイトルで補助金対象となるようですが、そんなに学生と教員の出会いは不幸に充ち満ちているのでしょうかね。苦笑してしまいます。推薦入学で秋に入学が決定してしまった学生は、本人の勉強がそこでストップしてしまう。このため、モチベーションが低い状態で春に入学てくる。これでは初年次教育がうまく軌道にのらないので、入学前に少し勉強の課題を出して、モチベーションを上げておけば、入学後の初年次教育における演習や実習が円

滑に進むというものです。



図1：レポート課題記事（同志社大学商学部・入学事前学習プログラムより）

経済・経営関係の新聞記事精選集を冊子にして、入学予定者（一般入試合格者も）の生徒にレポート課題を与えるため、「人民元2%切り上げ」「エネルギー中東依存減らすには」といった記事が並んでいます。それらの記事を読んで、自ら課題を設定しレポートを大学に郵送させ、添削・採点して返すわけです。その際、先の「人民元」の記事には、将来は学部設置科目の「外国為替論」で、「エネルギー中東依存」は科目「グリーンアカウンティング（環境会計）」で学ぶことがわかるよう、講義シラバスも併せて掲載し説明があります。

皆、かなり悩んでレポートを作成し提出してますが、レポートを採点するなかで、種類の多い推薦入学制度のカテゴリー別に、新入生らの能力の弱点を分析して、初年次教育に役立てたりするわけです。入学予定者のレポートの作成のために、

図書館に対して利用の許可や情報探索の指導など、春休みの2月・3月に実施してもらえないかとの依頼が来ていますが、まだ対応していません。でも図書館力を宣伝する絶好のチャンスだと思いませんか。

II. -2 実践型・体験型科目（プロジェクト科目など）

教養科目群にも新しい動きがあります。最近は学生の学力低下が叫ばれておりますが、実際はどうなのでしょう。私は学生を講義で教えておりますが、そうとも思えないのです。

先日興味深い文章に当たりました。「学力低下というけれども、（中略）道具を自由に駆使し友達と協力してもいいから答えを出すということに関しては、今の学生の方が能力が高い」（平野啓一郎・梅田望夫『ウェブ人間論』新潮社、2006）。たしかにそうかもしれないなと思う節はあります。

同志社大学では、課題を設定し、グループワークによって解決するプロジェクト遂行型の教養科目を設置することを数年前に始めました。文部科学省の現代GPに採択されていますが、グループ内で生じる葛藤を乗り越え、協力しあって何かを成し遂げる、プロセス重視の教育プログラムが実践されています。

本日パンフレットを皆さんに配付していますね。この科目的学生指導は、公募による嘱託講師の方にお願いしています。ぜひ皆さんも「図書館」を対象にしたプロジェクト科目を提案し応募していただければありがたいですね。昨年は89件の応募がありまして、29件のプロジェクト科目が採択されました。地域のNPOや福祉活動の方々がプロジェクト科目に応募してくださいり、地域の教育力を活かすかたちで学生を教育できます。

具体的に科目内容をみてみます。学生グループが京都の伝統工芸を調査して、小学生用の「京都を学ぶための教科書」を編集発行する科目「子どものための『京都職場図鑑』作成プロジェクト」。地域カフェをつくる「誰にもやさしい喫茶店をいっしょに作ろう」。また商品開発の手法を学ぶ

「次世代モバイルプレーヤーの商品企画および商品具現化」。これは、(株)ニコンから講師に来ていただいている。

プロジェクト型科目の実施状況をみていると、図書館に何ができるかはすぐに浮かびます。公共図書館で最近さかんに喧伝されるビジネス支援とも重なるところも多々あります。

プロジェクト型の教養科目は、哲学担当の教授が提案したものらしく、「哲学専攻には毎年50名くらいの学生が入学してくるが、みんな一生懸命哲学を勉強して、毎年50名も百名も哲学者が湧出したら、日本は潰れてしまう。大事なのは問題解決力と社会力をどう身につけさせるか。それを教養教育の新しい“かたち”にして実施したい」との想いがありました。「実践知」を大切にしたいのでしょう。

先の「子どものための『京都職場図鑑』作成プロジェクト」の場合、伝統工芸師にその半生や匠の技の聞き取り調査をするわけですが、図書館なら京都市内の伝統工芸師の名鑑を探すことなど朝飯前でしょう？ 京都の伝統工芸の手仕事のプロセスを調査した文化庁の報告書があるといったことはすぐ探せますよね。管轄は、おそらく京都府庁の文化財保護課。学生グループから図書館に相談があれば、プロジェクト遂行の援助はいくらでもできます。まさに問題状況に埋め込まれた学習支援力を發揮できるわけですね。でも、図書館が支援してくれることを学生は知らない。これが残念なところです。

次に、地域カフェをつくる「誰にもやさしい喫茶店をいっしょに作ろう」。喫茶店を開店経営するにはどのような基礎知識がいるのか。一席あたりの広さは何平米の面積をとればよいのか、コーヒー豆はどのルートで仕入れればいいのか、といった基本を調査する必要があります。採算がとれる喫茶店を想定してプロジェクトを進めないと、単なる「ごっこ」遊びですから。こんなとき皆さんよくご存じの『業種別審査事典』、ビジネス支援では必須のレファレンス・アイテムと呼ばれるものです。それらを最初に参照してもらい、事業の基礎部分を固めるようにする。いくらでも

図書館は絡んでいけるのです。

こうした動きがあっても、図書館から攻めのアプローチやアピールをしないかぎり、なかなか利用者や教員にはその有用性を認めてもらえません。

幸運にも同志社大学では、教育開発センターという学内機関があり、センター内に教育効果向上部会が置かれています。今年の議論の焦点は、「正課科目と図書館の連携形態の検討」でした。

部会代表の教員と懇意でありましたので、委員会には図書館のスタッフが出席し、具体的に何ができる何ができないか意見交換を行いました。委員会の場に出ることが可能なだけでも大きな収穫です。本学の図書館を見学に来られた関東の大規模私立大学さんからは、「意見を闘わせるテーブルに図書館員が呼んでもらえるなんて、本当に羨ましい」といわれましたが、少しでも教員との接点をみつけて、図書館の力を「見える化」する、尋ねられればいつでも奉仕メニューを披露できる態勢を準備することが重要なことです。

II. -3 SNS の活用（ICT 活用の事例）

いま同志社大学で進めているのは、この4月から導入する予定なのですが、大学独自開発の教育用 SNS（Social Networking Service）システムの導入です。プロジェクト科目担当の講師から希望があれば、このシステムを使って授業登録者コミュニティを形成し、プロジェクト遂行プロセスにおけるコミュニケーション流通を活発にさせようと



図2：同志社大学で開発した教育用SNS

いう意図です。

つまり、授業登録者が（ニックネームではなく）、コミュニティ登録を行い、プロジェクトの過程で連絡をとりあう、問題を相談しあう、そこから新しいヒントを得る。また本名で登録し、中傷や揶揄を書き込むのではなく、あくまで新しいものを創出するための議論や検討に活用することで、公共性とはなにか、パブリック意識とは何かをSNSというICT装置を利用しながら覚えてもらうことです。各コミュニティの管理人は、担当教員になる予定です。

学生たちのSNSの利用はもの凄いですね。日本でSNSの代名詞となっているmixiはご存じでしょうか。ネット上に学生さんがいかにコミュニティを形成して、活発に情報交換を行っているのが見て取れます。

同志社大学の学生も凄いです。スライドはmixiにあります2008年度同志社大学入学者のコミュニティです。よく見てください。この4月に入学予定の学生らで構成されています（この講演は2008年3月）。このコミュニティが形成され始めたのは、昨年の11月です。つまり、推薦入学が決まった段階でコミュニティが発生し、面識もないのにネット上で2008年度の同志社大学入学予定者がヴァーチャル空間で意見交換や質問の問い合わせをネット上のコミュニティ内で行っているのです。

「どこに住むのがいいのでしょうか（下宿の口コミ）」「大学生協が実施する4月初めの新入生歓迎パーティーにでるひといますか。先輩から過去のパーティーについて何か聞いていますか」「近隣のひとは、入学式前に集まってコンパしませんか。集合場所は京都三条大橋の上。大学の旗をもって立っていますので、目印にして集まってください」といった会話が踊っている。

私も若者の生態観察をしないといけませんので、実はこのコミュニティに登録させてもらっていますが、入学予定者の若者がどんな話をしているのかが見られて有益（?!）です。昨年の三井総研の調査では、若者の35%がSNSを何らかのかたちで利用しているようですね。

実際に大学に入学しますと、Dnavi という在学生用の SNS がありまして（これは大学が運営するものでは決してありません！）、「講義情報と連携機能を活かして試験をのりきろう」を謳い文句に、教員の声の大きさや講義の仕方など、先生たちの「品質評価」もグラフチャートにして投稿されています。いやはや困ったものですが、とても人気があり大学当局の悩みの種となっています。

こうした状況ですので、先の教育用・授業用 SNS にも期待がかかります。その中に図書館が登録者としてプロファイルを持ち、セグメント化された学生のコミュニティに情報を発信していくば、いろいろな展開が生じるはずです。また、コミュニティのニーズを分析することができるでしょう。

アメリカでは、コロラド州のデンバー図書館のヤングアダルトサービス部門が、SNS の MySpace にプロファイルを登録してサービスを広報した結果、前年比より 4 割増しになったとの記事がありました。図書館から打って出ること。これが大切なようです。利用者に検索して見に来てもらうというフル型から、積極的に情報発信する方向にもっていかねばなりません。

II. -4 ラーニング・コモンズ：場としての図書館

次はラーニング・コモンズについてです。これは後から茂出木さんから説明があるはずです。90 年代のアメリカで始まった「場所としての図書館」の復権が、日本に徐々に飛び火してきました。

同志社大学図書館でも、ラーニング・コモンズ設置の議論を続けてきました。聞き馴れない言葉で恐縮ですが、いったいどのようなものでしょう。

昨今、データベースやインターネットで電子情報が簡単に入手できるので、図書館は非来館型サービスに力を注ぐべきだと主張する人もいらっしゃいます。ですが、学習の観点からみればそれは違います。この反省から登場してきた考え方、ラーニング・コモンズといえます。

「学習の場」としての図書館、創造的空間としての図書館を取り戻そうとする動きの中から生れ

ており、文字どおり、学習するために皆が集う共通の場所 (=コモンズ) を図書館に開設して運営するものです。



図 3：コモンズでの学習風景（アリゾナ大学）
© University of Arizona Libraries Undergraduate Services

具体的に、アメリカの大学を見た事例を総合して説明しましょう。

図書館のメインフロアに広い学習空間があり、PC 設備・スキャナー等の周辺機器も用意されている。そこには机も個人机だけでなく、グループで議論できる円形のテーブルや、グループ学習室もあります。当然、討論に使う白板や画面を投影するスクリーン機器類も傍らにある。

コモンズのドアを開けて外へでると、そこは図書館の書架が並び資料がすぐ手にとれる。図書館に資料や情報を探しにいくというよりは、学習活動をしている周囲に資料や情報が配置されるイメージでしょうか。

最も注目すべきは、そこに人的支援がある点です。同じフロアには、資料調査で行き詰ったときのために、利用相談やレファレンス・カウンターが設置されます。また、機器類の扱い方を指導してくれる技術支援スタッフも常駐します。凄いのは、入手した情報や資料をうまくレポートに纏める援助をしてくれるライティング・センターまで同じフロアにあることです。図書館員や大学院生らが待機し、テーマ設定や文章構成の相談に応じてくれるものです。

PC や図書をハイブリッドに利用しながら資料探し、授業でのプレゼンテーション準備、レポー

ト作成の学習活動がワン・ストップで可能になっている。これでは利用者が集まるはずで、常に満員、利用満足度も高いといわれています。「実践的な知」を体得するには有効なスペースの在り方ですね。

一方的に講義を聴く座学のみの教育方法から脱皮し、グループ討議などコミュニケーション能力を重視して、問題を解決していく学習方法が注目を浴びている昨今、先行するアメリカのラーニング・コモンズに興味が寄せられるのは当然のことでしょう。「学びの身体技法」を知り、充実した学習体験を得られる場、ラーニング・コモンズ。これを図書館が提供していこうというものです。

では、具体的な学習効果はどのようなものでしょうか。先日、ワシントン大学を修了し帰国したTさんという女性と知り合いになりました。彼女に具体的な体験談を聞かせてもらいました。学生時代に受講した歴史科目「現代韓国史」を例に、ラーニング・コモンズの使い方を語ってくれたのを紹介しましょう。

「毎回クラスで討論があり、先生から事前にテーマが課されます。ある回は一八九五年に日本が起こした『閔妃虐殺事件』でした。先生の指定した教科書では、日本側が仕組んだ謀略事件との記述。でも、物事は複眼的に観なければなりません。そこでコモンズのレファレンスサービスに行き、関連資料を多方面から洗い出したいと相談したのです」。具体的でいい話でしょう？

さて質問を受けた担当者は、当時の一次資料とこれまでの研究成果を、各国（日本・韓国・第三国＝英米など）に分けて調査するよう指導したらしいです。クラスメートと手分けして、当時の新聞や研究論文を探査したようです。その際、コモンズのテクニカルサポートの人たちが、データベースの検索方法や関連データのダウンロードなど技術的な援助をしてくれたそうです。

集めた資料をコモンズのグループ学習室に持ち寄り、皆で検討したところ、「教科書の記述とは異なる見解が見つかったんです。討論の突破口になる！」と直感したと言います。その記述とは、朝鮮側にも排日派と親日派の内訌があり、虐殺を

手引きした勢力がいたことを紹介するものでした。まさに複眼的にものをみるための、必須の作業をサポートしてくれたのですね。さらにコモンズには、討論用レジュメのレイアウトやデザインについても、相談に乗ってくれる人が配されているとのことで、そのアドバイスを受けて作成したそうです。クラス当日は皆熱心に発言し、充実した討論になったといいます。

さてTさんは期末になって、このテーマで個人レポートを書くことになりました。その際も「コモンズにあるライティング・センターで相談すればいいんです。予約制ですが、文章構成・章立て、文法チェックもしてくれます。『先生からの批判をかわすのに、A説だけでなく、B説も入れるべき』とアドバイスをくれるんですよ」。

Need help with that paper?

The Odegaard Writing & Research Center
is here for you

depts.washington.edu/owrc

206.543.2060 ext. 273



図4：ライティング・センターでの指導
© University of Washington

凄いですね。これだけのことを指導してくれる。大学院の博士課程の学生が、相談に乗ることが多いようです。

さて寮でレポート執筆中、不明点が出てきてコモンズに連絡すると、電話かチャットメールで答

えてくれるらしいです。データベース検索がうまくできない時は、大学から寮の彼女のPCにリモート操作で入って、検索方法をディスプレイ上で見せてくれらしいです。羨ましかかぎります。

原稿が完成するとコモンズ内のコピーセンターで出力・製本し提出するそうですが、「コモンズに毎日のように通って、学びや研究のプロセスが理解できました」といっておりました。

私が心配なのは、サポート側の意見がバラバラで混乱はなかったかということです。しかし彼女がいうには、「学ぶというのは、いろいろな意見を聞き、物事の多様性を知ることですから、全然問題とは思わなかった」ということです。Tさんもよくできた人ですね。

日本でも、同様のことを試行している図書館があります。私の感想を申しますと、場所だけつくるのであれば、誰にでもできる話です。どれだけ人的支援ができるか。つまり人の運用がポイントであろうと思います。人については図書館独自でやれる場合もあるでしょうし、院生が簡単な相談窓口になって、上手に図書館員につなぐ手もあるでしょうし、まったく委託で済ますこともできるでしょう。どのような差配をするかは判断が難しいところです。同志社大学の場合は、自力で管理することは考えずに計画を議論していますが。

同志社大学は、現在2キャンパスに別れて、1・2年生が京田辺キャンパス（京田辺市）、3・4年生が今出川キャンパス（京都市）で勉強しております。2013年に文科系学部は今出川キャンパス1つに統合する予定ですので、そこに照準を併せて、現在どのようなラーニング・コモンズにするべきか、議論をしている最中にあります。

Ⅱ. -5 図書館の利用講習会

次は、図書館力をアピールするための「スローガン」とも揶揄される情報リテラシー講習会の話であります。私どもも本当に苦労しております。他大学の実践状況も参考にしていますが、日本図書館協会のガイドラインを含め、いまひとつしつくりこないので。

同志社大学の現状を申しますと、数をこなして

いるだけで、リテラシー講習会のプログラムの「質」はあまり議論されていない段階にあります。質や効果の検証といつても、評価は難しいでしょうね。しかし達成目標が明確でないまま、使い方や操作法の解説を惰性的に実施しても進歩はありません。

2007年度はガイダンス「役立つ図書館活用術」（説明+実習+館内ツアー）を4月・5月で100回やりました。これにより約5千名の新入生のうち、3,300名の学生が参加しています。60%以上の学生が、ガイダンスを受けている計算になります。課外で実施しておりますプログラムを初年次教育のコースに教員からの依頼で1コマ入れている場合が多いです。

これだけの数をこなすのは、1キャンパスの図書館に専任職員が4名（それも事務職員）では無理ですので、当然100回のうち77回は外注講師にお願いしています。しかし、プログラムの仕様は同志社大学側でかなり細かく指定して実施しています。内容はさほど高度なものではなく、どの大学もやっておられるものと変わりはありません。ですが「数は力なり」で、図書館が頑張ってやっているとの印象は教員側も持ってくれているようです。さきほど紹介しました教育開発センターの教育効果向上部会という教員の委員会からもお呼びがかかるようになり、ようやく教員と「対話」できるところまで漕ぎつけているわけです。

同志社大学図書館の利用者を想定したときに、ガイダンスや基本的な情報探索技術の講習会の運用は既に軌道に乗っているのではないかと判断しています。しかし、日暮れて道遡し。実際の効果、教員からみた利用教育のアウトカムをたずねても、あまり芳しい返事はありません。新入生のときのガイダンスは、その時だけの効果しかない。後の継続的な学習に役立っていないと。2年生、3年生とあがっていくにつれての利用の深まりがない。

昨年見直しの議論を担当者で行いました。激論の末、3年生以降の学生用の情報リテラシー講習会には、2つのポイントをいれました。1) 情報探索や文献検索を焦点とする視軸から、むしろ

レポートや卒業論文の“テーマを探索する”内容のプログラムを追加する。2) 図書館とは異なる専門領域の情報探索技術をプログラムに含めていく。

1) はレファレンス業務を担当されている方ならすぐに気づいていただけるでしょう。情報を探索するにも、その前段階で何を探したいのか焦点が定まらない場合が、実はほとんどです。情報を検索する技術を磨く以前に、図書館利用スキルをもとに自らブレインストーミングを行い、何が自分の知りたいことなのかを明らかにしていく手法。これを覚える内容の講習会を入れています。

2) は、図書館の視点からのみの講習会では一面的過ぎるとし、(社) 政府資料等普及調査会や(株)日本能率協会総合研究所(以下、MDB)、またウェブ利用の専門家らに依頼した情報リテラシー講習会のプログラムを実施しています。こうした専門領域には、私たちの覚えたスキルと発想だけでは十分に対応できない場合があるのです。

図書館にいかなくても Google や Yahoo! といった検索エンジンで十分と考えている学生もいます。しかし、下手な検索エンジンの使い方を覚える前に、図書館としてこうありたいという理想的な検索方法を教える講習会がいるのではないかとの意見は当然でできます。また、ビジネススクールや政策系学部の利用者たちは、また従来の図書館の情報探索技法とは少し違った視点の方法も覚えたようがよいのではないかとの意見もあります。総合的に情報を扱えるには、図書館だけの情

報世界の歩き方を紹介するのみでは不十分です。

このため、従来図書館の情報リテラシープログラムに加えて、「プロが教える」シリーズというものを設定しました。具体的には、検索エンジンの仕組みや、発信方法をよくご存じの識者に講義してもらう「ウェブ情報の効果的利用法」、また会員制の有料でレファレンス実施されている民間シンクタンク・専門調査機関に講師を依頼した「政策・統計・経営情報の集め方」「政府資料の調べ方」を追加して、その道の方々のスキルを上級生を対象に解説してもらうよう手配はじめました。

MDB の講習会の内容を紹介しましょうか。例えば、「土用の丑の日に、どれだけウナギが売れているかを調査したい。よい指標は?」との質問に対して、『日本養殖新聞』や養殖協会の情報を調べ、出荷量などで示したいと短絡的に発想しがちですね。専門機関に相談すると、総務省『家計調査』も調べ、生産者側からだけでなく消費者側の数値を調査する視点を紹介してくれます。確かに例年、土用の丑の日には平日よりも十倍以上の金額がウナギに支出されている事実が分かる。多分野のプロフェッショナルが持っているスキルと、図書館で培ってきたスキルを融合させながら、情報リテラシー向上を目指すわけです。

II. -6 学習用図書の選書

最後は学習用図書の選書について言及します。大学図書館の自己点検・自己評価報告書をみていくと、蔵書の項、学生アンケートの項に「学生用図書予算が不安定、確固たる予算基盤を」「図書館の専門書が古い」「本の種類が少ない」といった記述をよく見かけます。

同志社大学図書館の場合は、「専門書は十分なので軽い読みものを…」との投書がある程度で、幸いにも蔵書への苦情は少ないので。こうした、学生対象の蔵書を充実させるには、ふたつの政策の鍵があると私は考えています。

ひとつは、学習用図書費と研究用図書費を分離した予算運用をすることです。同志社大学の場合は、学生用図書費約 2 億円(図書館所管)、研究用図書費約 8 億円(学部・研究所所管・2005 年度

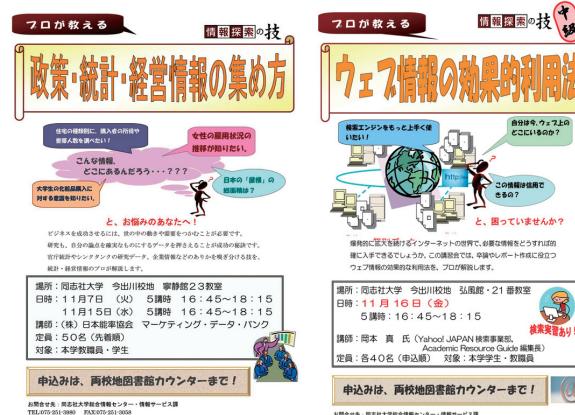


図 5:「プロが教える」講習会チラシ(同志社大学)

実績)を個別に運用し、学生用図書費が研究用図書費に流用されない安定した予算基盤を確保します。

これには、実績主義をとる財務サイドに対して、予算の運用状況をじょうずに説明することが重要です。学生用図書費で購入した資料がいかに無駄なく執行され、有効活用されているか。これを積極的に発信することが肝心です。

もうひとつの鍵は、学習用図書の選書を図書館員が担当することです。但し、職員の選書に対して教員の不信感を招かないためには、選択基準と選書方法の開示と報告が焦点となります。選択基準や選書方法をわかりやすく整理し、教員への説明に心を砕く。選択基準づくりと選書方法を模索するプロセスは、図書館員の選書能力の涵養に繋がります。

私たちの図書館では、「カリキュラムに沿った学習用資料の購入」に目的を特化し、研究用には購入しない旨、図書館の「資料収集方針」で宣言しています。また100頁に亘る「選択基準」(分類別に、設置科目や編集形態への関連記述あり)を作成のうえ、学内委員会で教員に回覧し、異議があれば議論して改訂していきます。

選書の実作業は、館内職員7~8名の担当者で構成する「資料収集作業部会」を隔週に開き、全点見計いによる新刊選択作業と蔵書構築上の案件の議論を行う場所です。作業部会には教員も参加できますが、過去に参加事例はありません。選書結果等は部会記録を教員に送付・開示しています。

選択基準の事例(抜粋)

分類別基準

[143, 145, 146]
発達心理学、異常心理学、臨床心理学、精神分析学

○比較的の資料は揃っている。(異常心理学関係以外)
○専攻だけでなく一般的利用も多い分野なので積極的に収集する。
○心理学に関する、精神病理学関連の資料で臨床医学的用途のは収集していない。
○社会的に関心を抱いている老年心理(147.3)、災害被災者と心的ケア(146.8)に関する資料に留意する。
▲発達心理学、児童心理学、臨床心理学、精神病理学

科目名

[147, 148]超心理学、心霊研究、相法、易占
○趣味的な資料は収集していないが、歴史的、学術的な資料は収集する場合がある。
「同志社大学図書館資料中古本買取目録」(147.146.8)を参照のこと。

図6: 学生用選書の「選択基準」(同志社大学)

具体的に、選書の実態と選書能力のつけ方を紹

介します。事務職としての係員採用で他部署への異動も頻繁な本学では、選書の眼を養うために見計い選書を続けています。経験則からみて、これは実に効果的な方法です。学習支援を目的とする資料購入が第一義なので、カリキュラム理解とシラバスの読み込みは必須となってきます。3300科目のシラバス記述を読解するには骨が折れますぐ、これがなければ選書は始まりません。

選択時は、ページ数などの形態や著者略歴、「はじめに」などからその図書の執筆意図や編集方式をみる。註や索引の有無も確認しつつ、参考文献の内容や初出一覧を見て専門性や該当分野での位置づけを把握する。これらの情報を読み解く練習を重ねることで、着任間もない職員でも徐々に選書に対する自信を積みあげられるから不思議です。

例をあげましょうか。特定分野を学ぶうえでの重要文献を精選・抜粋収録した“リーディングス”と呼ばれるタイプの刊行物(日本図書センター刊行『リーディングス日本の教育と社会』など)がありますよね。これを手にすれば、データベース検索結果のフラットな論文表示からは容易に判断できない文献評価の世界がすぐにわかります。

なぜこのタイプの書が編まれるのか、どの局面で使えば学習に有効なのか。作業を経験すれば、資料の「編まれ方」の種類や編集プロセスへの知識を深められ、自然と選書能力もついてきます。

雑誌の選択も同様です。新たな購読希望を受け付けると、編集方針、内容、執筆陣、発行部数に加え、レビュー誌や論壇誌での評価、関連する科目名、科目登録者数を書き入れた評価表を作成します。教員推薦の雑誌が不採択の場合でも、表を示して先生に説明すると、多くは納得してくれる。「僕らも学部研究予算で購読する際、これくらい検討しないかんな」となります。

データベースも職員が選択導入しますので、データ内容だけでなく、検索時の入力条件項目、演算子の種類、インデクシングタイプ、シソーラスの有無など、学生の利用時の機能も整理して評価表をまとめています。

さて、こうした選書体制を維持するためには、

買いっぱなしではなく、有効に活用されている利用実態を説明することも必要です。購入した資料の利用実態報告と予算要求について、データベースを例に話しましょう。

データベースの場合、導入すればそれでお仕舞いではありませんね。財務サイドは、毎年固定費として負担になる資料の予算執行には慎重です。このため、学内委員会や予算折衝では、いかに有効利用し、無駄を整理しているかをアピールして信頼を得なければなりません。その際、費用対効果や評価表の開示が効いてきます。

本学では、提供するデータベースについては可能な限りログ統計を取得します。そして特にサーチ数に注目し、契約金額をサーチ数で割って1サーチに要した費用をはじき出します。この1サーチに要した金額が200円を切るようであれば、そのデータベースの費用対効果は良好である判断しています。これは、ある欧州系ベンダーが顧客の利用評価にあたり1サーチ2ドルを基準としていたこと、OCLC FirstSearchのクーポンが1サーチ210円程度であることを指標としたものです。

導入初年度は費用対効果が多少芳しくなくとも、年を追うごとに数値が好転していれば、契約維持や新規導入の際も財務サイドに積極的な働きかけができますし、納得もしてくれます。

そして、教員が導入した研究用データベースの費用対効果がいかに酷い数値であるかも報告し、図書館の印象を財務部門に対してよくするのです。

難しい数値や統計はさして必要ではありません。財務サイドが聞いて理解しやすい、また納得しやすい客観的な根拠を示しさえすれば充分です。学生用図書費の健全な予算運用を印象づけて信頼を得られれば、毎年の予算増額要求は認められます。

さて、カリキュラム密着型の蔵書構築を謳う以上は、学習活動に役立つように利用促進を図らねばなりません。これには、教務部の学修支援システムと図書館システムを連携させる工夫をすいぶん前から実施しています。

1996年以来、本学の教務部ではウェブベースの

学修支援システムの構築に取り組み、学習活動の情報化を積極的に推し進めてきました。学生はシラバスデータを検索し、講義内容や「GPA得点分布公表（前年度登録者の学業成績分布）」を知りますし、ウェブ上から履修科目登録を行い、講義開始後は休講情報も得られます。学習生活での参照が1日たりとも欠かせないこのシステムに、図書館所蔵資料へのナビゲート機能を織り込んでいくわけです。

具体的には、シラバス記載参考文献の各書誌情報の横にアイコン「書誌検索へ」を設定し、クリックするとOPACに飛んで書誌・所蔵情報をすぐに確認できる仕組みです。毎年シラバスをもとにテキスト・参考文献を購入していますが、学修支援システムと図書館システムの連携により、講義関連資料を見つけ出しやすい環境を準備しています。

これにより、4・5月期の貸出冊数は、シラバス検索、GPA得点分布公表等の各機能が統合された2003年を皮切りに増加はじめ、2005年には5万7千冊を数えました（2001年度比37%増）。またベストリーディング図書の約70%がシラバス・OPAC連携で探されたタイトルです。これは、文部科学省・特色GPに採択されましたが、このような総合的なアピールも安定した予算獲得の礎となります。

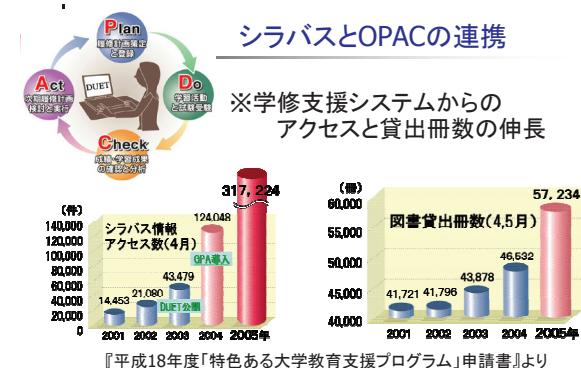


図7：シラバス・OPAC連携による貸出増加

III. 学習支援を切り開くための心がまえ

以上、総括的に話を展開してまいりました。前座としては、できるだけ背景や事例を語り、あと

の茂出木さんにつなぐのが良法と考えました。

学習支援を意識した時につくづく感じるのは、図書館員の方々にどれだけ教育支援・学習支援に興味を持って立ち向かってもらえるかです。

国立大学の司書の方のなかには、「図書館が好きで図書館員になった。大学内の他の部署に移つて図書館の仕事ができないならば、公共図書館へいくほうがよい」といわれる方もおられますね。私の場合はまったく逆で、「高等教育機関で働きたいのですが第一で、高等教育の推進を図書館の視点からどう支援できるかが焦点である」と思っている人間です。なので、大学の授業やカリキュラム内容にはすごく執着心を持っています。大学の構成員が一丸となって高等教育の質を高めることができミッションのひとつですから、大学図書館サービスはその文脈のなかで語られなければなりません。

同志社大学の場合、人事部門からは「図書館は他の部門と比較して、外部研修が多すぎて研修予算を喰う。しかし効果のほどがわからない」との批判が根強くあります。これに対し、図書館の専門性を訴え、図書館特殊論の論陣を張る方もおら

れます。しかし、どんな仕事にも専門性あります。システムエンジニアリング部門にはそれ特有の、財務部門には会計特有の専門性が必要です。

図書館業務の研修会は、図書館独自のスキルを磨くばかりで、そこで得た技術やスキルを、大学の中心である教育や学習に結びつけ努力が足らないのです。私たちはそうした点を反省しなければならない時期に来ているのではないかでしょうか。

そうした視点に立てば、予算獲得に向けた財務との折衝方法、教員への説明能力、経営企画能力やマネジメント能力を、どの業務の局面でも持つていなければなりません。

日常的に学習支援のための提案材料になりそうな数字や事項を分析・蓄積し、財務部門や教員を納得させる。そのためには、言葉は悪いですが、確信犯的なこじつけ力を磨くことも大切だといえましょう。

その実例といっては叱られますが、次の茂出木さんにケーススタディを語っていただくことになりますのでバトンタッチしたいと思います。
ご静聴、ありがとうございました。

ここから拓いた！　お茶大図書館活性化のための5つの作戦

お茶の水女子大学図書・情報チームリーダー
茂出木 理子

はじめに

お茶の水女子大学の茂出木です。本日は「ここから拓いた！お茶大図書館活性化のための5つの作戦」と題して、お話をさせていただきます。

本題に入る前に、先ほどの井上さんのお話を伺って、私が面白いなと感じたことをお話しさせていただきます。様々な魅力的なキーワードが出てきましたが、私が、特に、興味を持ったキーワードは2つです。ひとつは「図書館サービスにとって人が行うサポート（人的支援）は要である。」ということ。もうひとつは「いい人だけじゃ仕事にならない。仕事は確信犯的にやらなければいけない。」ということ、つまり、「人的支援」と「確信犯」、この2つが魅力を感じたキーワードです。

井上さんはご講演の中で、お茶大の紹介として、昨年度東京に他の用事で出張していたら、拉致されるようにお茶大図書館に連れて行かれ、館長や職員を前に講演させられたというようなことをお話ししていました。確かにそれは事実です。でも、井上さんのおっしゃるような「人的支援」「確信犯」を実行したまでで、ちっとも悪いことをしたとは思っていません。

まず、「人的支援」というキーワードですが、私は、人に上手く頼むスキルがないと、人をサポートすることはできないのではないかとも考えます。図書館職員というのは、非常にヒューマニティ精神に富む方が多く、「なにか学生の役に立ちたい」「何かもっとできることはないかしら？」と常に考えているのですが、なぜか空回りしてしまうことがあります。これは、人に頼ることがあまり上手でない、言い換えれば一人で頑張ってしまうことが敗因のひとつではないかと思われるか

らです。

つまり「人的支援」のスキルを高めるとは、人を頼るスキルを身につけることでもあり、それは、井上さんのおっしゃる「確信犯」的な能力を身につけることでもあるとも言えるのではないでしょう。

改めまして、ここで自分自身のことを紹介させていただきます。私は、現在、お茶の水女子大学の図書・情報チームリーダーという職にあります。大学卒業と同時に東京大学に採用されたのですが、最初は、職員が一人しかいない理学部の教室図書室からスタートしました。東京大学の総合図書館を経て、学術情報センター（NACSIS）に異動しました。NACSISでは、目録情報システム、そして研修企画関係の仕事をしました。その後、東京大学情報基盤センターに再び異動し、そこでは利用者サポート、学術情報リテラシー関係の仕事をしました。その後、再び、国立情報学研究所に異動し、目録システム、ILLシステム、データベースシステム（GeNii）等の仕事をし、平成18年4月に現在のお茶の水女子大学に着任しました。このように、決して長い経験ではありませんが、大規模な大学図書館の中央館、一人職場の教室図書室での図書館現場の経験とNACSISやNIIという図書館の現場以外での経験、さらに、小規模な大学図書館でのチームリーダーとしての経験があります。そういう経験の中で得たことをお話しすることで、本日お集まりのみなさまのご参考になることがお伝えできればと思っています。

統計数字で語る

さて、現在、所属しているお茶の水女子大学附

属図書館を「小規模な大学図書館」と申しました。主催者の方から、今回の研修会の共演は同志社大学の井上さんだとお伺いし、講演をお受けするにあたって、私が「同志社大学のような大きな大学さんのお話だけだと、参加された方々が『同志社大学だからできるのだ。うちのような小さな大学では無理』で終わってしまうといけないから、お茶大のような小さな図書館での事例も何かのお役に立つかもしれませんね。」というように申しました。すると、「お茶大さんに小さいと言われては、東海地区は『うちなんか小小小小小小規模です。』というところばかりです。」と返されました。「本当だろうか?」というのがまず頭に浮かび、そこで、いろいろな統計数値をグラフ化し、東海地区大学図書館協議会の参加館の中にお茶大が入った場合どれくらいの位置になるのかということを確認してみました。

東海地区大学図書館協議会ランキング(日本の図書館 統計と名簿2006による)

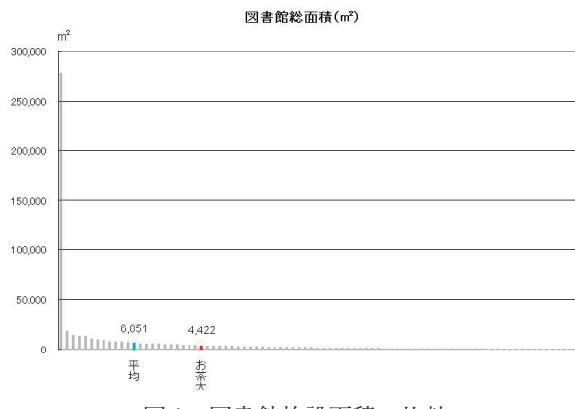


図1 図書館施設面積の比較

お茶大の規模は、本日ここにお集まりの多くの大学さんの規模と似たりよったりで、むしろ、図書館の規模でいうと、施設面積、図書館予算などは少ない部類であることがご理解いただけるかと思います。

	東海地区大学協議会加盟館平均	お茶の水女子大学
学生数	3,215人	3,250人
蔵書冊数	303千冊	600千冊
図書館		

経 費	87,912 千円	40,462 千円
図 書 館 資 料 費	67,865 千円	28,246 千円
図 書 館 総 面 積	6,851 m ²	4,422 m ²

(日本の図書館 統計と名簿 2006による)

このように、統計の数値をしっかりと把握することは、大学の経営陣に図書館活性化の戦略をご説明する際にも説得力を持ちます。従って、何かスタートさせようとしたときに、まず、自分の図書館の立ち位置を客観的に理解すること、そして、担当者が認識を共有することが大事なことだと考えています。

さらに、お茶の水女子大学の組織の特徴は、平成19年度から事務局というのをなくしまして、非常にフラットな組織となったことです。図書・情報チームリーダーである私の上司は、副学長、学術・情報機構長でもある附属図書館長で、その上はいきなり学長です。図書・情報チームには、図書館を運営する職員のほか、情報系、つまり、事務情報システムや全学情報基盤システムやITセンターとのリエゾン的な仕事を担当する係が含まれています。さらに、明治8年の開学からの大学の歴史資料も図書・情報チームの管轄です。

「職場の見えない段ボール」を切り崩せ!

本日は、「ここから拓いた! お茶大図書館活性化のための5つの作戦」という演題でお話しさせていただいているわけですが、結論を最初に申し上げます。図書館の活性化をめざすにあたり、図書館もひとつの職場ですから、まず、職場としての活性化を考えなければいけないわけです。職場を動かすのは職員です。私は、「職場の見えない段ボール」が図書館の活性化、職場の活性化を阻害しているというように感じています。この段ボールを崩すために、お茶大ではいくつもの作戦を開発したのですが、本日は5つにまとめてお話しします。①全員会議、②楽をする発想、③多方面展開、④アピール、広報、⑤ライバルの5つです。

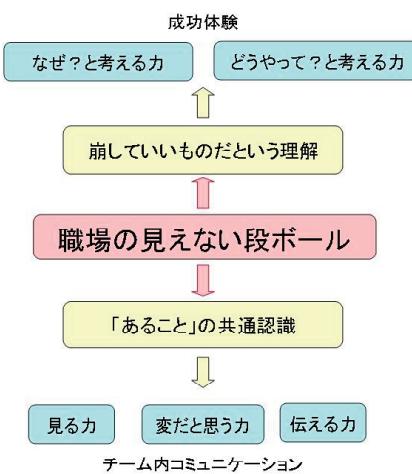


図2 職場の見えない段ボール

まず、「職場の見えない段ボール」とは何か?ということですが、最近出版された「不機嫌な職場、あなたの職場がギスギスしている本当の理由」¹⁾という新書があります。この中では、職場がIT化され、便利になり、かつ仕事も高度化し、でも、その過程の中でもっとも大事なことが欠けてしまった、それは、「人と人とのコミュニケーションによりうまく隙間を埋めていた部分」であり、そしてそのせいで、職場で鬱になってしまう人も増え、「これは私の仕事ではない」の一言で取りこぼされる仕事がでてしまっている、というようなことが指摘されています。私の考える「職場の見えない段ボール」もこれに非常に似たことです。職場でのコミュニケーションの欠如で引き起こされる様々な障害の全てが「職場の見えない段ボール」です。

職場での見える段ボールはまだいいと思うのです。先ほど自己紹介しましたとおり、私はいろいろと職場を異動していますので、新しいところに行くとまずこういう不思議な段ボールが部屋の隅とか廊下の角に置かれているのが目につきます。ところが、長くその職場にいる方には、そこにあらぬに見えない、見ないで済ませることができてしまっているようなのです。そこで、「この段ボールはなんですか? 邪魔じゃないですか?」と聞くと「それは、○○さんが残した段ボールです。」とか返されますが、その○○さんは10年も前に

退職された方だったりします。このように、それぞれの職場には、見て見ぬふりをしている段ボールが積まれていることがよくあります。

これと同等のものが「見えない段ボール」として職場に積まれていることを実感します。見えないだけにさらにやっかいです。「なぜ、こんなに面倒なことを二重三重にしているのか」とか「どうして、それぞれの係で別々に同じようなデータリストを作って、それそれでしか使わないのか」とか、なんとなく変だと思っていても口に出してはいけない職場の不文律、そういうものを全て含めて「見えない段ボール」だと考えます。これもそのままにしておけばよいと言ってしまえばそれまでです。しかし、これを崩さないかぎり、先には進めないし、職場の活性化、図書館の活性化も起りえません。

図書館は学生のために何ができるか

なぜかというと、大学図書館の使命を考えたときに、もちろん、多くの使命がありますが、「学生のために何ができるか」に尽きると思います。私は、学生のために図書館は何ができるかを考えるときに、どうしてもやらなくてはいけないことが3つあると考えています。ひとつは、大学の中で図書館が存在感を示し、根付くということです。2つめは、教員にとって図書館は頼れる存在であると思ってもらうということです。そして、3つめとしてなにより大事なことは、職員の意識です。これは、ひとり、ふたり、非常に意識の高いやる気のある職員がいるというだけではダメです。職員の個性にばらつきがあったとしても、職員全員が総意として、学生のために我々は頑張ろうという意識が必要です。その点から考えると、私が先ほどから申し上げている「職場の見えない段ボール」というのは、3つめの職員が働く意識を阻害する何かです。

「あること」の共通認識と「崩していいものだ」という理解

これを崩していくには、まず、職員全員で「それがあること」を共通認識することが必要です。

見える段ボールの例だと、「○○さんの残した段ボールは結局10年間誰も開けてこなかったけど、特に困ったことはなかったですよね。一度開けて中身を確認してみましょうよ。」と、そういうことを言い出すことです。見える段ボールだと崩すということは、「捨てましょうか?」というのがキーワードですが、見えない段ボールの場合は、「変えていいよね」「止めていいよね」が適切なキーワードになります。そのためには、前例、つまり、なぜこういうやり方をしているのかを掘り下げて、真剣に考えないといけません。これは、現場の人が考えてくれないとどうしようもありません。

こういうことを考えるのに、適切な指摘として、「地頭力を鍛える 問題解決に活かす「フェルミ推定」」²⁾という本が評判になっています。この本の中では、物事、特に社会や職場で起こる問題には答えが決まっていないものが大半で、だから、これから職員に求められるのは、知識、人とのコミュニケーションという軸だけではなく、「なぜ」とか「どうやって」ということを自分のアイディアとして考えられる能力が必要だと主張されています。見えない段ボールがあることを認識するには、「問題を見る力」「変だと思う感性」も必要ですが、いちばん困難なのが、変だと思うことを「他人に伝える力」です。スタッフ会議のような場でもこういうことを発言するのは大変勇気がいることです。しかも下手に言うと「余計なことを言って」とかえって、負のスパイラルに陥ってしまうこともあるからです。

チーム内コミュニケーションと成功体験

このように「見えない段ボール」を崩すことを、「あることの共通認識」と「崩していいものだという理解」2つのポイントから考えますと、職場としてやらなければいけないことが見えてきます。ひとつは、チーム内コミュニケーションを取る方法を考えなければいけません。もちろん、個人個人のコミュニケーション能力を伸ばすことも必要なのですが、職場としては、コミュニケーションをうまくとるためのシステム、環境を

作らないといけません。もうひとつは、成功体験というか、自分自身で何かをやったという自信が大事です。研修会などでいろいろと話を聞いて、知識が増えたような感覚を持ったとしても、自分自身で動かないとそれは自分の経験にはなりません。これは何も、大げさな体験、例えば新館建築だとかそういうレベルの成功体験でなくてもいいのです。小さなことでいいので、自分で考え、実行し、成し遂げたという成功体験をいかに多く、自分の職場に巻き起こせるか、それこそがリーダー的な役割の人に課せられた任務だと思います。成功体験を非常勤職員も含めて全てのスタッフに持たせようと思ったら、お茶大図書館の場合では、最低でも16のプロジェクトを起こさないといけないことになります。

非常に土台の土台のことばかり申し上げているようですが、そういう職場としての体力づくりをせずに、図書館の活性化、図書館の改革というようなことはできません。

お茶の水女子大学附属図書館の事例から

ここから少し、具体的なお話しをします。

お茶大図書館では、図書館の改革は理念からスタートしました。図書館のホームページに「附属図書館の理念と活動」のページを作り、日々の活動を記録しています³⁾。理念というものは、遠くあって眺めているものではなく、それに向かって私たちは毎日何をしていくか、そういう到達目標だと考えています。日々の活動というのは一つずつ取り上げると小さなものばかりです。わざわざホームページに記録するほどのことはあるのか?というご意見もあるでしょう。しかし、こういうことを記録していくことは、先ほど申し上げた「成功体験」、「変えていいんだという認識」「やろうとしていること、やったことをどう伝えていくかの訓練」、そういうものの全てにつながっていきます。

最初に申し上げたように、お茶大図書館の状況はけっして恵まれたものではありません。建物は狭い、予算も少ない、言い出したらきりはありません。まずこの厳しい現実を直視しました。もつ

とも、私がお茶大に着任してびっくりしたことは、職員の中で、年間の図書館予算を知らない職員がほとんどだったということです。あり得ないと思いました。年間いくらで自分たちの図書館を運営しているかを知らないで「予算がないからできません」の言い訳はないだろうと憤りさえ感じました。こういうことも「職場の見えない段ボール」のひとつです。でも、年間予算を知らなかったこと、あるいは、知らされなかつたシステムが変だということを認識さえすれば、ことは簡単で、知ればいいだけの話です。

弱点を利点に転化

ベンチャー企業や中小企業の成功談の本を読みますと、共通項として、欠点だ、弱点だと思われていたことを逆手にとって事業を起こしたことが書かれています。これを参考にお茶大図書館でも、規模が小さいという弱点を利点に転化することを考え、それには、「大学と協働する図書館」というキーワードを考えました。つまり、大学の動きにすばやくひついていく、学内で孤立しない作戦をとることです。協働するといえば、きれいに聞こえますが、もう少しドロドロした言い方をすれば、大学と心中する覚悟ということです。このキーワードから具体的なフロアープランを考え、出たキーワードが「リベラルアーツ支援図書館」でした。ちょうど同時期に大学全体で教育改革が検討され、リベラルアーツというキーワードが出されていましたので、それにタイミングよく乗じたものもあります。

施設面の改善

施設面の改善ですが、まず目につきやすいことから改革をスタートさせました。

お配りした資料にもあるとおり、お茶大図書館は、大変不思議な状態にありました。つまり、図書館1階のメイン部分を学内の研究センターに貸していて、利用者スペースと図書館の事務室が分断されているという状況にありました。これもひとつの「見えない段ボール」だと思います。初め

てみたら変だと思うことが、数年いると不思議だとも変だとも思わなくなり、誰もそのことを口にしなくなります。幸いと申しますか、平成18年の夏に、この研究センターが別の建物に移ることになり、跡地がぽっかりと空きました。ではその跡地をどうしたいのか?ということが図書館に課せられた課題だったのですが、ここで「リベラルアーツ支援図書館」というキーワードが活躍しました。研究センターが使っていたため、非常にこまかく間仕切りされていた部屋の壁を全てできるだけとり壊し、そこにラーニング・コモンズという名称で学生スペースを新たに創りました。そして、1年かけて、できるところから少しづつ変え、整備をしてきました。まだまだ発展途上だともいえます。

From 2006年4月 to 2008年3月 施設改修

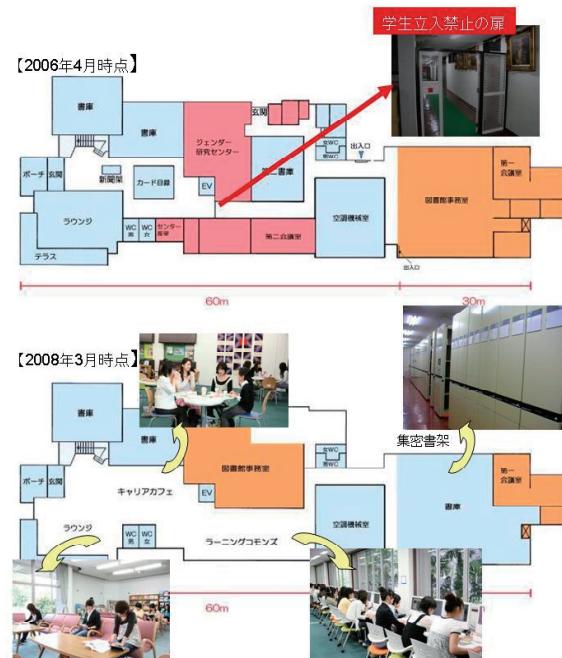


図3 施設面での改善

もちろん、井上さんのお話しにあったように、学内で新しい施設を作るという計画があったときに、図書館がその計画にうまく入りこんで、インフォメーション・コモンズやラーニング・コモンズのような新しいスペースを確保するというのは

すばらしいことです。しかし、そうそうおいしい話が多くの大学に起こるとは思えません。そういうときに、うちは弱小だから無理だとあきらめずに、現在の条件の中で、知恵をしぼりできる限りのことをやるというのは決して無駄なことではないと思います。

5つの作戦

次に5つの作戦のことをお話します。

「学生のために図書館は何ができるか」という大きな目標に向かっていくには、まず、職員力というものを鍛え直す必要があります。これは、職員個々の能力がいくら優れても、あるいは個々の専門性が高いがゆえに、職場としてはうまくまわらないことがあるからです。

①全員会議

現在、お茶大図書館では、隔週で館長以下、カウンターに出る2名の職員を除いた職員全員（もちろんこの中には図書系以外の職員や非常勤職員や派遣職員も含まれます）で会議を行っています。朝の30分を使って行っていますが、特筆すべきは、立って行っているということでしょうか。普通に会議室などで座ってやりますと、弊害として、まず誰がどこに座るかということを非常に気にします。つまり館長が真ん中でその隣はチームリーダーで、そうすると私はこの辺かしら・・・みたいなことを探りあい、結果、いちばん参加してほしい若手職員が端っこの方でおとなしくしているというような事態になります。また、どこに誰が座るのかで悩むので、最初の5分間ぐらいが無駄になります。この5分がもったいないです。この会議の目的は、単なる報告会ではありません。単なる報告はチームの一斉メール等で知らせればすむことです。この会議で大事なことは、これからやろうとしていること、気にかかっていることなど、そういうプロセスの共有です。また、毎回議事メモは必ず作成します。議事メモは若手職員の輪番で作成しています。これも訓練の一環です。チーム内の会議ですから、時間をかけてきっちりとしたものを作るわけではありません。ただ、議

事メモはそこで話されたことをきちんと理解していないと書けないわけですから、ほんやりと会議に出ていることが許されません。また、全員会議と言ってもカウンターにいる2名の職員だけはぜったいに出席できないわけで、この2名が疎外感を持たないために、分りやすい議事メモを作る責任があります。

この会議のもうひとつの目的は、人に何かを説明する、分らないことを質問する訓練の場でもあります。とはいっても、いきなり自由に発言しろと言つても無理があります。このために、次にお話しします「多方面展開」ということがからんできます。つまり、いろいろなプロジェクトを同時並行で行っていますので、その担当者は、係員でも非常勤職員でも、何かしら報告説明する必要が出てきます。しかも、全体の時間は30分と決めていますので、要領よくかつ分りやすく説明することが求められます。

こういう会議は、少人数の職場だからできることで、中小規模大学の利点だともいえます。職員が多い職場だと、係長会議とか主任会議のような形になり、係長の力量によって、下への伝え方に温度差が出るというようなことが私の経験でもあります。この全員会議も、「見えない段ボール」切り崩し作戦の一環ですから、会議中に「予算がない」とか「前例がない」というのはNGワードです。

②楽をする発想

一方、日々働く意識では「楽をしましょう」ということを掲げています。そもそも、図書館の仕事の基本にはルーティンワークがあり、これをきちんとこなしてこそ図書館の業務はなりたつわけです。ここを大学に理解してもらうというのが大事なことなのですが、それが難しいのもまた現実です。一方、職員としては、ルーティンワークだけでヘトヘトになっていてはもったいないと思います。なので、少しでもルーティンワークから解放されることを考えることは悪いことではないということを、まず理解しなければいけません。これはさぼれとか自分の嫌いな仕事を人に押し付け

るということではなく、同じ結果を出すなら労力は少ないほうがいいということです。そして、ルーティンワークから解放された時間と労力を使って、面白いことを考えたら？ということです。

「楽をしましよう」の発想のもう一つは、一人で頑張らないということです。一人というのは個人という意味と、図書館単独でという意味があります。学内の他の部署で、資金や人手やアイディアを出してくれるところを探して、積極的に手を組むということです。お茶大図書館ではこの手法で、大学院 GP の教育と手を組み、学生の ILL 料金無料化を実現させました。学生の手を借りるという意味では、LiSA (Library Student Assistant) プログラムをスタートさせています。LiSA も大学全体で力を入れている「キャリア教育」「女性リーダー育成」の一環という位置づけでスタートしました。決して図書館の都合で学生を便利に使おうという試みではないのです。もちろん、学生に図書館の仕事を手伝ってもらうというのは、大変な側面もあります。つまり、相手が誰であれ、自分がやっている仕事を人に説明し、やってもらうというのは意外と難しいことだからです。LiSA プログラムは、図書館の職員にとっては、人に説明する訓練にもなっています。

「楽をしましよう」の発想では、チーム研修会ということも実施しています。これも大げさなことではなく、1回 30 分ぐらいの研修会で、今年度は 15 回ほど実施しました。講師はそれぞれの職員が順番に担当します。例えば、一時的に急いで大量にタトルテープをいれなくてはならない作業が発生し、担当の係だけではとても間に合わないということが起こりました。このときは「タトルテープの入れ方講習会」というのが実施されました。教える側、講師をやる職員にとっては、自分の仕事が楽になり、教わる側の職員にとっては、自分の担当以外の仕事を身につけるチャンスになります。

「楽をしましよう」の発想というのは、自分の仕事を自分一人で抱え込むことが結局自分を苦しめることだということを知ることと同時に、職場全体としては、一人だけしか知らない仕事がある

ことが職場の活性化を妨げていることを知ることです。

③多方面展開

職員が成長するには仕事を通じた刺激が必要です。したがって、特に 20 代、30 代の若手職員が毎日毎日、当たり障りなく自分の仕事をすることだけを考えている職場というのは、非常に危機的な状況ではないかと思います。

先に申し上げたように、成功経験を有している職員が多くいる職場には力があります。だから、職員に成功経験を積ませるために、いろいろ多方面にやらなくてはいけないという側面もあるのですが、大学の経営陣に図書館をアピールするには、一箇所だけではなかなかアピールできないという側面もあります。たとえば、見えやすいところ、ラーニング・コモンズを創って入館者数 40% アップなどという動きは大変わかりやすい動きです。しかし、図書館職員であれば、それだけじゃダメだと、地道な仕事を積み重ねないと意味がないということも分っているはずです。けれども、その地道な仕事だけじゃ、経営陣などにはアピールしないということもまた事実です。したがって、改修工事のような見えやすい改革と遡及入力のような見えにくい改革をペアで取り組むべきだと考えました。そうでないと、建物の改修のような箱物だけに注力していると、図書館の底力というものが失われていくことになります。

また、さきほども申しましたとおり、職場で起こっている課題には答えがわかっていないものが大半です。だから、まず何か動くことで次に打つべき手が見えてくることがあります。将来を見通せとか 5 年後の計画を立てるとか言われますが、頭の中でグルグル考えるだけで、一歩も踏み出せないでいるなら何一つうまく行かないだろうと思います。

お茶大図書館では、多少粗いなと思うことでも、動くということを進めてきました。これも小規模図書館だからできることです。うまくいかないとなれば、さっさと撤退すればいいだけのことで、始動も軽ければ、引くのも早いということができま

す。これが大きな組織、あるいはNIIのような全国組織だとすばやい撤退は、まずできないことです。

多方面展開を進めるには、「楽をする発想」で完璧主義から少し手を抜くことを覚えるとともに、セクション主義、つまり「これは○○係の担当で私には関係ない。」というようなことから脱却しなければいけません。これも、大きな組織ではなかなか難しいことで、セクションをはっきりさせなければ動かない職場というのもあります。なので、セクションを越えて多方面展開をするというのは、中小規模組織に与えられた特権ともいえます。また、多方面展開するには、即断即決ともいすべき、すばやい決断が求められます。即断即決するためには、関係者が情報を同じく共有していなければできません。ここで、全体会議でやるプロセスの共有というのが活きてきます。

④アピール・広報

企画をたてる際には、たてる最初の段階で、これができる際には「どう広報するか」「どうアピールするか」というゴールをまず考えています。ゴールのイメージが明確であればあるほど、それに向かうエネルギーが出やすいからです。広報の話は話し出すと長くなるのですが、先日、別の研修会で広報のことをお話しさせていただくことがありました。その時、勉強したことですが、広告と広報は似ているけど違うものです。広告がその商品やサービスを買ってくれという「Buy Me」のアピールであることに比べ、広報というのは、「Love Me」のアピールで、商品やサービスを愛して欲しいというよりはもっと広く、会社であれば会社の姿勢とかイメージとかブランドと呼ばれるものを愛して欲しいという活動です。「Love Me」のポイントはいくつもあると思いますが、一言でいって、愛されたいと思っている私、図書館や図書館職員自身がハッピーな状態であることだと思います。いろいろ頑張って何か成し遂げたときに、「私たち今いい状態だよね」という嬉しい気分を共有していないと広報なんて絶対にできません。新館ができたというような嬉しいニュースのこと

でも、その新館建築に対して、職員の誰一人嬉しい気持ちでなければ、どうやって広報ができるでしょうか。小さいところでも小さいなりに、お金がなくてもないなりに、頑張ってやったことでまず自分たちが幸せであることを認識し、広報をし、そのアピールがまた幸せを呼ぶという上向きなスパイラルに持ち込むことが上策です。

そういう意味で広報は、外に向かってアピールしているつもりが、じつは職場の内部に向けても重要な位置づけになります。つまり、どれだけ多方面展開し、一つずつの成果は小さいものであつたとしても、広報をすることで、自分がやったことは大変役にたっている、大学の中で評価してもらっている、図書館の活動の中に組み込んでもらっている、ということが意識できるわけで、それがまた次の活動の活力になるということが、間違いない起こっています。

⑤ライバル、あるいは仮想敵国

最後にライバルを具体的に持つということを挙げます。いろいろな図書館の活動を見るたびに「センスがいい」と思うことは多々あります。正直悔しくなるほどです。そういう、大学の規模や国公私立の違いを超えて、同業者として負けたくない!と思うようなライバルを具体的に持っています。もちろん、全部はとても真似できませんが、「センスがいい」と思ったアイディアを盗むというのは悪いことではないと考えています。お茶大図書館では、昨年、ラウンジのソファーを新しくしたいと考え、その参考にしようと、近郊のいくつかの私立大学図書館の見学に行かせていただきました。明確な目的があつての見学でしたので、先方に失礼なことを聞いたかもというぐらいの真剣なものでした。本日もこの研修会の後で見学会が予定されているようですので、見学に行かれるかたは、漠然と見るだけではなく、何かこれは盗んでやろうというぐらいの明確なターゲットを決めてご覧になることをお勧めします。

また、ライバルは大学図書館だけではなく、ホテルとか書店とかインターネット業界とかいろいろアイディアが取れそうなところを常に目配りし

ているというのも楽しいことだと思い、実行しています。

図書館活性化の必殺ボタンはあるか？

最後に、よく図書館活性化のコツは何か？と聞かれるのですが、活性化の必殺ボタンがあるわけではないと思います。敢えて、3つ挙げるとしたら、①共通目標を持つこと、②職員の間に発言、参加の壁を作らないこと、③一人で仕事を抱え込ませないことだと考えます。共通目標というのは、こういう広報がしたいというような目標でも構わないと思います。とにかく、共通目標を職員全員が納得していることが大事です。納得するためのプロセスとして職員の間に発言、参加の壁を作らないことが重要な要素です。ヒトゴトだと思っている職員がいないということです。それはどんな発言でも真面目に聞くということであり、同時に言った側は言ったことに責任を持つということです。そういうことを進めて行き、ある仕事はある一人の人しか判らないという状況をなくすことが最終的には必要です。これは最初に申し上げた「職場の見えない段ボール」のもっとも大きな原因にもなっていますが、自分しか知らないことで優位に立っていると思っていることが、そもそもバカらしいことだと悟ることまで行かなければな

りません。

個人として何をするべきか

最初に、図書館活性化のための職場の組織として目指すべきこととして、「成功体験」と「チーム力を高めること」をお話ししました。組織としては、そうだだと思いますが、個人としては、それだけに甘えてはいけないとも考えます。すなわち、個人としては、過去の自分の成功体験に固執しないという勇気を持たないといけません。また、雰囲気のいいチーム、力のあるチームに属していると自分の実力も付くのですが、チームの力に自分が甘えないという覚悟も必要です。職場の活性化のためのシステムとは別に、職員個人として、この二つが大事だと考えています。

以上で、私からのお話を終わらせていただきます。

- 1) 高橋克徳〔ほか〕著. 不機嫌な職場：なぜ社員同士で協力できないのか. 講談社. 2008
- 2) 細谷功著. 地頭力を鍛える：問題解決に活かす「フェルミ推定」. 東洋経済新報社. 2007
- 3) お茶の水女子大学附属図書館ホームページ
(<http://www.lib.ocha.ac.jp/rinen.html>)

岩瀬文庫と〈本の町〉

名古屋大学文学研究科教授・日本文学

塩村 耕

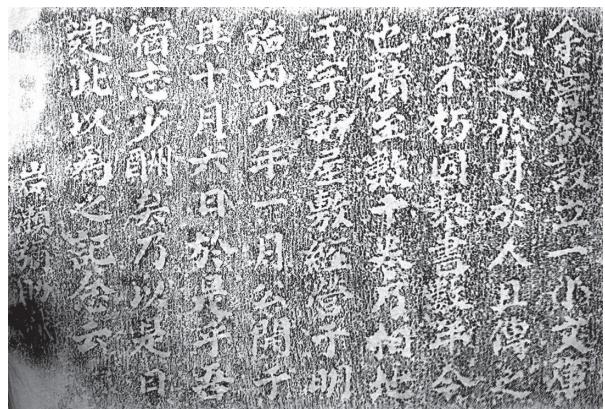
そもそもこの東海地方というのは、東西の文化が行き交うという地の利がありました。海の水と川の水が交じり合ったり、黒潮と親潮がぶつかったりするところに、豊かな漁場が出来るように、文化的に複雑な様相を見せた面白い土地です。人間も複雑な性格を帶びてきますから、信長・秀吉・家康をはじめ、諸大名の元祖となった多くの傑出した人たちもこの地から輩出しました。

書物の点から見ても、東西の典籍がよく集まりました。個人的な体験を申しますと、名古屋からだと、京都・大阪はもとより、東京でも楽に日帰りができますから、東西の主な古書展に朝一番で駆けつけることが出来ます。そのお蔭で、いくつか珍しい本を集めることができます。さらに、全国から本が集まる、よい古本屋さんも名古屋辺にはある。江戸時代や明治時代にも似たような状況があり、東西に目配りがきくと同時に、この土地をさまざまな書物が通過した。そういうわけで図書館的な活動をするのに、よい地方だったと言えます。本日、お話ししようと思う岩瀬文庫は西三河の城下町西尾にある文庫です。三河には刈谷の村上文庫や豊橋の羽田文庫など上質な文庫がありますが、それは偶然ではないと思います。

岩瀬文庫は明治41年に、地元の実業家岩瀬弥助によって設立された私立図書館に由来します。つまり当初より市民に公開するために、莫大な私財を投じて作られた文庫でした。私は江戸時代に強い憧れを抱く、ウルトラ旧弊な人間ですから、明治日本の近代化を賛美することには抵抗を覚えますが、それでもこの時代の地方にあった啓蒙精神、今風に言うと地域文化の向上に対するボランティア精神は、我利我利亡者の金持ばかりが目

に付く昨今から見て、羨ましい限りです。

ところが、通常の図書館を作るのならば、当時既に普通の書物であった洋装本を集めればよいのに、どういうわけだか、この岩瀬弥助さんは和本古典籍を専ら集めました。そこにはどういう意図があったのでしょうか。弥助さん自身は寡黙な人で、何も語っていません。唯一、文庫設立を記念して、文庫近くの伊文神社に奉獻した石灯籠の脇石に、次の銘文がひっそりと残されています【図版①】。



図版①

このように銘文は漢文で書かれています。漢文というのは古代の中国語に由来するのですが、使われてきた歴史が古いために、時による言語の劣化（古び）が生じにくい。だから昔の人は金石文にして遠い未来にメッセージを伝えようとすると、漢文で書くことが多いのです。

余嘗て、一小文庫を設立し、之を身にも人にも施し、且つ之を不朽に伝へんと欲す。因て書を聚むこと数年、今や積みて数千卷に至る。乃ち地を字新屋敷に相し、明治四十年一月に經營し、其の十月六日に公開す。是に於てか、吾が宿志、少しく酬はれたり。乃ち是の日を以て此

を建て、以て之が記念と為すと云ふ。岩瀬弥助識（文中の「経営」は建物建築の縛張りをする意。なお実際の開館は半年遅れの明治41年5月6日）つまり、書物を公共の用に供すること、そのことを通じて書物を未来永劫に伝えること、この二つのコンセプトが実に明解に述べられています。この理念は、いつの世にあっても忘れてはならない、図書館が果たすべき社会的ないし文明史的な役割そのものではないでしょうか。

ここからは私の想像ですが、優秀な実業家であった弥助さんは、財を蓄積すればするほど、その財を保存することがいかに難しいか、痛感していたはずです。初代が非常なる才覚と努力でもって莫大な富を築き上げる。それを二代目や三代目が散在してしまう、というのは世間によくある話です。（赤貧の私がこんなことを言うと、ごまめの歯ぎしりと笑われそうですが）オカネの難しさというのは、それをあの世に持って行けないこと、それから、それを遺された子孫の幸福に直ちに繋がらないことがある。そこで、富を擲ってありとあらゆる書物に替え、それを独り占めしないで社会に広く公開することによって、未来への保存を図ったのだろうと思います。

実際、弥助さんは昭和5年に64歳で亡くなりますが、遺言によって文庫は私物化されず、財団法人となります。その後、戦中戦後という未曾有の困難な時期がやってきますが、結局市民によって文庫は大切にまもり伝えられ、平成15年には堅固な書庫と新文庫館が完成し【図版②】、今年



図版 ②

の5月6日にめでたく満百周年を迎えることができました。

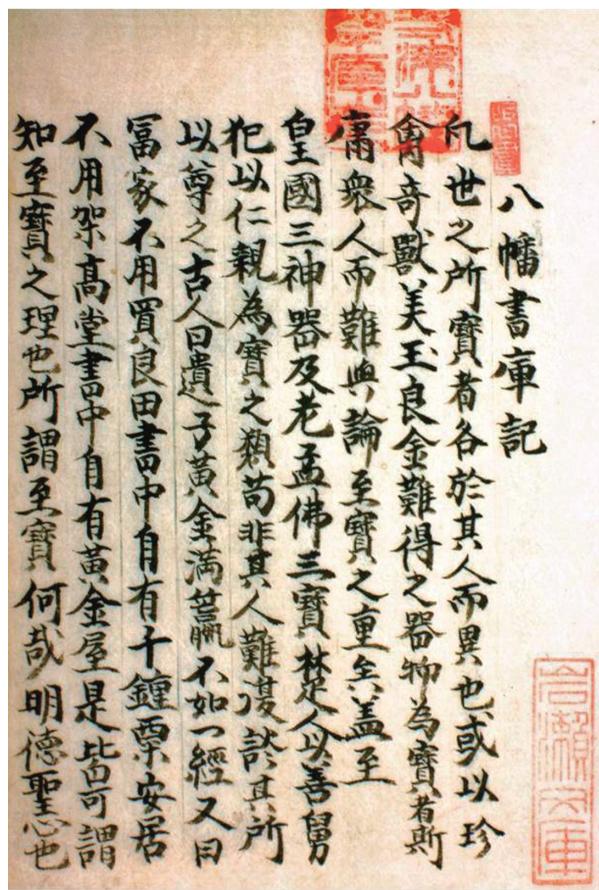
実は、この弥助さんの偉業に大きな影響を与えた地元の先人がいました。西尾の郊外にある寺津村（現・西尾市寺津町）寺津八幡神社の神主渡辺政香という人です。地元の地誌『三河志』を編むなど学問好きの神主さんで、この人が文政6年（1823）春、神社に文庫を付設公開しました。現在、その蔵書は岩瀬文庫に収められています。その中に『八幡書庫記』という本に、文庫開設の志が漢文で記されています【図版③】。三河辺の中學・高校の教科書には是非載せていただきたい、たいへんな名文です。長いのでかいつまんで、大意を示しながら紹介しましょう。

凡そ世の宝とする所のものは各の其の人に於いて異なり。或いは珍禽奇獸・美玉良金、得難きの器物を以て宝と為す者は、斯れ庸衆の人にして、とも与に至宝の重きを論じ難し。…古人の曰く、「子に黄金満籠を遺さんよりは、一經〔を教ゆるに〕に如かず」（※『蒙求』「韋賢満籠」）、又曰く「家を富ますに良田を買ふを用ひざれ、書中自ら千鐘の粟有り。安居するに高堂を架するを用ひざれ、書中自ら黄金の屋有り」（※『古文真宝』「真宗皇帝勸学」）と。是皆至宝の理を知ると謂ひつべし。

所謂至宝とは何ぞや。明徳聖心なり。其の聖徳に入る階梯は書に非ずして何ぞや。唯天縱生知の者のみ、階梯無しと雖も自ら其の室に入り、其の宝を得ん。其の餘は階梯無くんば則ち其の室に入り、其の宝を得ること能はず。故に世に無くんばあるべからざるものは書卷、人に無くんばあるべからざるものは明徳聖心なり。

人間にとての至宝とは「明徳聖心」（道徳的に高い境地）であり、そこに至る階梯として、書物が不可欠のものであることをまず強調します。

予、少壯より神庫を建て図書を藏するの志有り。然れども、僻境薄祿、顧れば経済の才無く、徒らに素貧の累有り。…未だ曾て人に一阿堵物を乞はず。況んや其の餘をや。身を潔くして世に激するに非ず。貪らざるを以て宝と為せばなり。今、齡知命に逼り其の志果たさず、遺憾、年と



図版 ③

与に積もりて丘陵を成す。

自分は神社に文庫を設ける志があったが、その資力がなく、また人に金銭の寄付を乞うこともできず、いたずらに年月を過ごしてきた。

文政癸未の春、茶讌の暇、友人との語次、此に及ぶ。友人の曰く、「子の志は甚だ善し。子の乞はざるは甚だ偏なり。…夙に其の志有りながら、^{なんす}奚為れぞ之を同志に告げ、少を積みて大を作すの漸を謀らざりしか。…書庫を建て書卷を乞ふは實に風教の一助有り。況んや一人の所有に非ざるをや。其れ誰か之を醜と謂はん。且つ、乞ふ所の巻帙は、悉く其の姓名を記し書庫印記を以て押し、深く庫中に蔵せば盜竊も之を奪ふこと能はず、四壁は密に土石を以て封ぜば祝融も之に災ひすること能はず。是れ衆人の志をして不朽に託し長く明神の保護を祈らしむる所なり。吾徒、孤陋にして裨益する所無しと雖も、庶はくは力を襄め以て子の志を成さん。如何」と。

文政6年の春、茶飲み話にそんなことを友人に語ったところ、友人のいうには、「その志はよいが、人に助けを乞わるのは片意地だ。どうして同志に志を告げて、書物を少しづつ集めようとしたのか。そもそも文庫を建てて書物を集めるのは風教の一助だ。独り占めをするわけではないのだから、ましてのこと。しかも書物を大切に文庫の保管すれば、盗まれたり火災に遭うこともなく、その書物を著した人々の志を不朽に託そうとするものだ。力及ばずといえども力を貸そうではないか」。

予、曰く、「始めより物を人に乞ふの志無きは、是向に所謂處世偏固にして時俗に忤ふるの拙なり。然りと雖も今友人の慾湧に因りて書庫の経始を得、以て後來嚮学の士に貽すは亦一大の榮幸ならずや。伏して請ふ、同志の群賢、和漢竺諸史百家を論せず、自ら著す所の一書一帙及詩歌は納めて以て之を藏せしめんことを。特に神光を祠宇に増すのみに非ず、吾徒の頼ひに以て至宝を得るの階梯なり。凡そ物は衆と与に楽しむに如かず、藉し人の神庫の図書を閲せんことを請ふもの有らば、輒ち其の謂ふ所に隨ひて少しも拒まざらん。乃ち之と俱に窺ひ日新の聖域に躋らん

このように友人に励まして、ついに同志に書物を乞い、文庫におさめて後世に残すとともに公開することになったというのです。末尾の「凡そ物は衆と与に楽しむに如かず…」というのは、良い文章ですね。すべての文庫や図書館関係者の皆さんに熟読玩味していただきたい言葉です。

ところで、右の漢文を読んで、文学研究者として気になることは、文庫開設の志について、ことさらに友人の忠告の言葉を通して表現してある点です。そのようなことが実際にあったのでしょうか、しかし、自分の言葉としても十分に書ける内容です。私はこれについて、政香は友人や地域の支援があつてはじめて文庫が出来たのだということを、強調したかったのだろうと思います。そして、そのことが文章の品格を高めています。細かい話ですが、このようなことさらにかかれた細部にこだわることは、特に古人の文章を読む際に肝

要です。

弥助さんはきっとこの文章を読んだに違いない。そう確信します——小さな傍証を付け加えておきますと、右の文も弥助の銘文も、未来のことについて「不朽」という語を使っています——。そして人々の支援があって文庫が出来たことを知り、「よし、自分も」という気になったのではないか。『八幡書庫記』は、後人にそういう気持ちを起こさせるような、力を備えた文章です。

それから、これは最近、やはり岩瀬文庫の中にあった張込帖の中から見つかった、政香の自筆短冊です【図版④】。読んでみましょう。

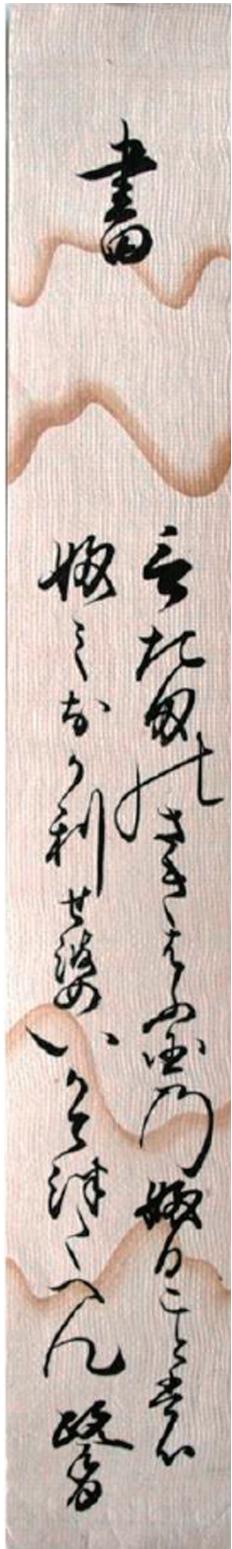
書／言だまのさきはふ国のふることもふみなかりせばいかでつたへん 政香

題の「書」は「ふみ」と読ませるでしょう。書物のことです。日本は古来言霊のさきわう国、つまり言葉に特別な靈力が備わっていると信じられ、言葉が大切に取り扱われてきた国です。そんな特別な国でも、書物というものがなかったなら

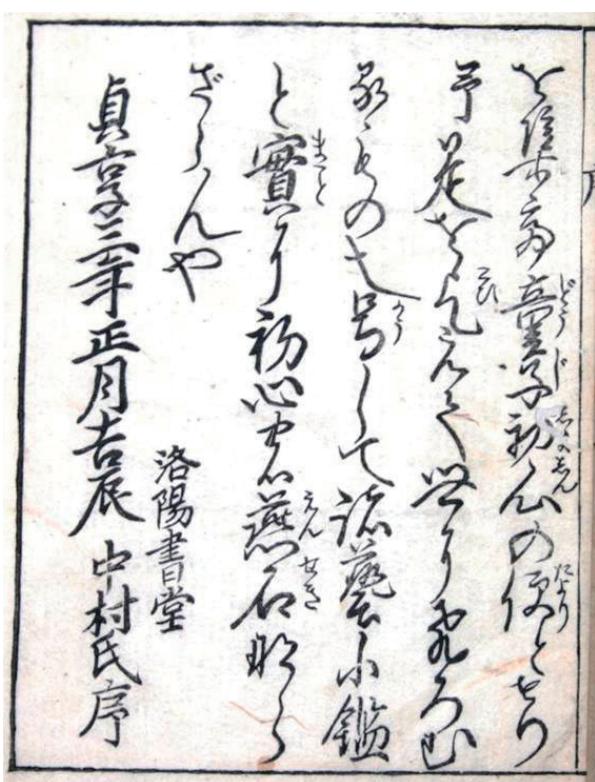
ば、古言、古い言い伝えや昔の話などをどうやって伝えることが出来ようか、といった意味で、書物の本質的な意義を端的に歌い上げた歌です。どうです、いい歌でしょう。こんなすばらしい短冊が岩瀬文庫にあることも、私には偶然とは思われません。

ここで少し話題を変えて、最近岩瀬文庫で体験した、嬉しい発見の話をしましょう。貞享3年(1686)刊行の『諸芸小鏡』という本があります【図版⑤】。礼法だの俳諧だの音楽だの料理だと、当時的人が心得ておくべき芸事について簡便にまとめられたハウツーものです。我々が見ても便利な本ですから、よく参照されます。著者は弾松軒という未知の人物です。岩瀬でこれが出てきて本を開いたところ、あっと驚きました。板下の筆蹟に見覚えがあったからです。

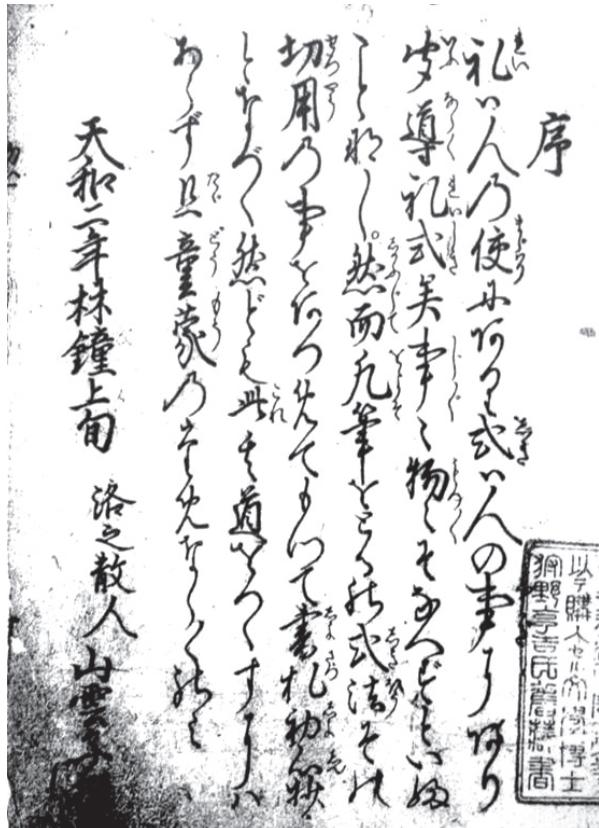
元禄時代前後に啓蒙書を中心にさまざまな書物を著した山雲子という人がいます。西鶴と同時代の重要な著述家です。この人の伝記は従来不明だったのですが、やはり岩瀬で見たある禪僧の詩



図版 ④



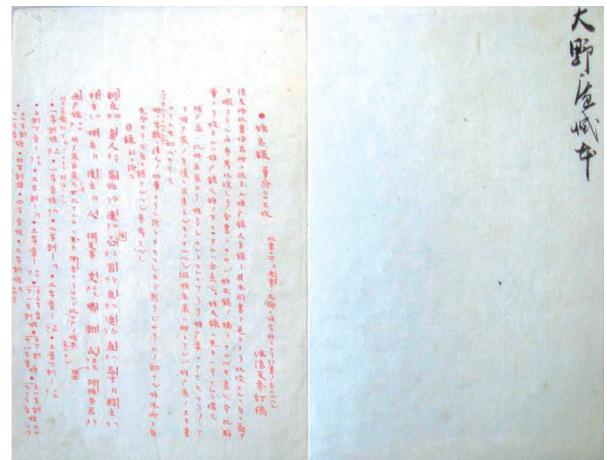
図版 ⑤



図版⑥

文集の中から墓誌銘が出てきまして、いっぺんに判明したことがあります。『諸芸小鏡』がこの山雲子の筆蹟だと気付いたのです。比較のために山雲子の著述である『書札初心抄』の書影をお見せします【図版⑥】。こういう場合、よく使う文字で、しかも書き手によって特徴の出やすい文字を比較すると一目瞭然なのですが、たとえば「年」などそっくりでしょう。つまり『諸芸小鏡』の著者弾松軒は、従来知られなかった山雲子の別号とわかります。なお、そこから弾松軒の別の著述もさらに判明しました。このように著書の筆蹟から著者が判明するというのは滅多にないことで、しみじみ喜びを感じたことでした。我々の幸せはささやかなものです。

何が言いたいかというと、資料は単独では中々語ってくれないだけれども、関連する別の資料が判明すると、俄然多くを語り出すということです。つまり、資料と資料とを孤立させていてはダメで、何とか資料同士の連関を少しでも多く結びつけることが必要なのです。



図版⑦

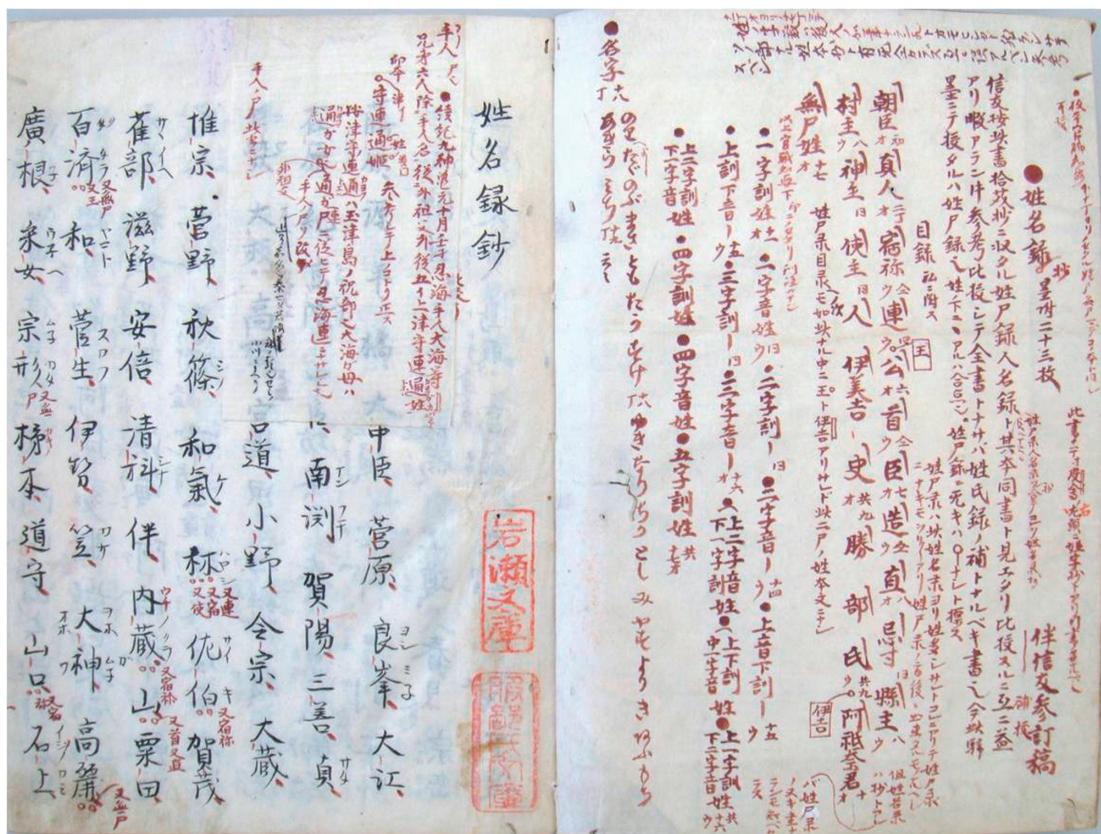
これもつい2、3日前に岩瀬文庫で経験した事例です。【図版⑦】は『姓名録抄』という写本です。日本の古来の姓と、名前に使用される文字を一覧にした内容で、識語によれば江戸時代後期の伴信友による校訂本を写したということで、びっしりと朱による校合書入が入っています。この本を写したのは大野廣城という人です。幕府小十人組に属した御家人で、故実に詳しかった国学者です。幕臣が心得ておくべき知識を収めた『青標紙』という本を刊行したところ、発禁処分となり、間もなく病死してしまった氣の毒な人物です。

この本を見ていて、何だか前に見た気がして、データを繰ると、なんと大野が底本にした伴信友自筆本そのものがありました【図版⑧】。こうやって百数十年前の底本と写本とが仲良く同じ文庫に収まっているのも奇遇ですね。岩瀬ではこういった不思議な出会いをすることが妙に多いのです。

以上は、私の記憶によって別々の資料同士が結びついた例ですが、個人の記憶に頼っていたのでは限界があります。一種の偶然に過ぎません。これを何とか必然にまで拡大しようというのが、我々が作成している記述的書誌データベースです。

岩瀬文庫の書誌データベースはまだ公開ていません（近日中に試験公開の予定です）ので、既に公開している名古屋大学附属図書館の「古典籍データベース」を紹介しましょう【図版⑨】。

名古屋大学では、まず神宮皇学館文庫等につい



図版 (8)

図版 (9)

て記述的書誌データベースを公開しています。この文庫は戦前官立大学だった伊勢の神宮皇学館大学の旧蔵書です。同大学は戦後、GHQの指令で廃校となり、当時近隣の官立大学だった名古屋大学に図書が引き継がれたものです。つまり本来は

名古屋大学とは無縁の文庫でした。そのような文庫をお預かりしている以上、内容をきちんと調査し、公開して、市民の利用に供するというのが社会的責務だと考えました。この文庫は、もともと伊勢の御師だった来田家の旧蔵書を核としています。御師というのは江戸時代までの日本人の伊勢信仰を媒介した神官で、文化的にも重要な働きをしているのですが、明治初年に廃されたため、その実態がよくわかつていません。御師のまとまつた旧蔵書として、貴重な資料群です。

たとえば、江戸時代中期の来田家の当主の名前「有親」を入力して検索をかけます。すると、このようにばらばらっとデータが出てきます【図版⑩】。来田有親（親岑とも）がせっせと書物を書き収集した活動の実態が瞬く間に一望できます。その中から、たとえば『風早家御教訓』という本をクリックすると、詳細な書誌データが示されます【図版⑪】。日本の古典籍というのは、書名から内容を把握するのが難しい本が多い。したがつ

て、こういうデータがどうしても必要だらうと思います。さらに、この資料の場合、画像のリンクをクリックすると、全部の画像をいながらにして見ることが出来ます【図版⑫】。

画像データは最近多くの図書館で充実し始めており、正確な情報を知る上で便利です。また資金さえ潤沢にあれば、業者さんにお任せしてどんどん充実させることができます。しかしながら、いろいろな情報について検索をかけることは出来ません。ですから、真に古典籍の活用を図るためにあくまでもテキスト情報を備えたデータが重要なのです。しかしながら欠点は、作るのに手間がかかることです。一定の見識を備えたディレクターによる目通しも必要です。つまり簡単に人海戦術で、というわけにはゆかない。岩瀬文庫の調査では学生さんたちに助けてもらい、丸8年間かかって、1万4千点（タイトル）の調査入力を済ませました。校務に費やす以外のほとんどすべての時間を投入しているのですが、それでもこの程度です。全部で1万8千点といわれているので、あと数年かかりそうです。

このように作業効率の上で大きな問題はあるのですが、やはりこういったデータベースは全国の

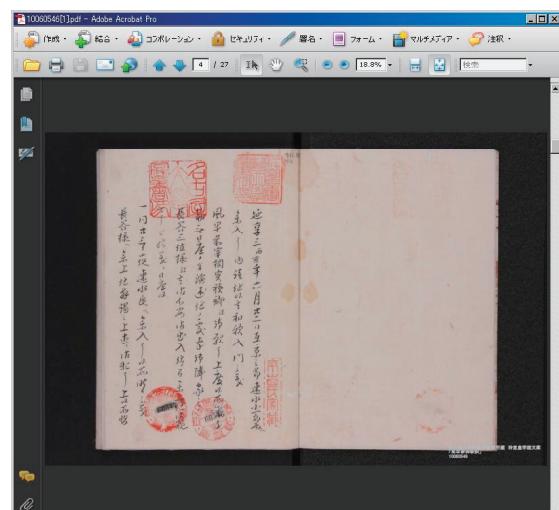
No.	書名	内訳	操作
1	神皇 勢州宮崎文庫書目1 [029.8-Se]	詳細 移動	
2	神皇 豊岡市文庫書目録1 [029.8-To]	詳細 移動	
3	神皇 和漢書始法書1 [031.4-W]	詳細 移動	
4	神皇 話雄書堂1 [049.1-Sy]	詳細 移動	
5	神皇 五教大意詮釋1 [150-Mn]	詳細 移動	
6	神皇 等撰紙1 [171.9-Ta]	詳細 移動	
7	神皇 御代々御朱印写 外1 [175.8-G]	詳細 移動	
8	神皇 宮川日記(A)1 [175.8-Ta]	詳細 移動	
9	神皇 宮川日記(B)1 [175.8-Ta]	詳細 移動	
10	神皇 紀談拾遺1 [175.8-W]	詳細 移動	
11	神皇 慶安正道宮記1 [175.8-W]	詳細 移動	
12	神皇 五十音記2 [175.8-Y]	詳細 移動	

図版 ⑩

文庫図書館で作っていただきたいと切望します。そうすると日本に豊富に残された古典籍の全貌を初めて俯瞰することができます。そして別々に置かれた資料同士の連関が判明し、古人のかつて知ることのなかった種類の、大きな喜びを我々は味わうことが出来ることでしょう。そういう状況こそが学問の進歩、社会の進歩ということだと信

項目名	内容
文庫名	神皇
請求記号	911.15-Ka
旧書名	風早家御教訓
部数	1
単位	冊
書名	風早家御教訓
書名ヨミ	カザハヤケゴキヲウゲン
版次	写
書型	半
原装・改裝	原装
丁数	23
寸法	24.5/17.2
編著者	来田親岑
編著者ヨミ	キタチカミネ
成立	老木の項目「一風早家御教訓弟執達入(宝曆三年五月書道仕候)/山口十世祐里 山本近江守(追跡)」
成立推定	近世中期写
刷り書きの態様	自筆稿本。
内容	老木の項目「一風早家御教訓弟執達入(宝曆三年五月書道仕候)/山口十世祐里 山本近江守(追跡)」
旧蔵印・譜語	印記「来田氏家蔵」「書外」有親之印。
備考	沖摺削毛目表紙、紙縫綴本。風早家使用の短冊の型紙(底36.5厘・横6.2厘)を添付。墨書き「追憶寺天神社御奉納/歌被御印候時御短冊頂戴仕候故寸方寫之/風早家御端用御方寸」。
電子化資料	http://info.nut.nagoya-u.ac.jp:8780/wakan/wakoyyo/911/10060546.pdf [at_download_file]

図版 ⑪



図版 ⑫

じます。また書物を現代に伝えてくれた古人に対する報恩だろうと思います。是非皆さまの所属される図書館でも取り組んで下さい。その場合には手弁当で駆けつけてお手伝いをさせていただくことをお約束します。ただし、岩瀬文庫を全部終わらせてからですが。

さて、平成15年に開館した岩瀬文庫新文庫館は、従来の文庫ないし図書館的な機能の外に、「日本初の古書ミュージアム」として新たな出発をしました。日本の書物の構造や歴史を中学生くらいの子たちが見てわかるように展示が工夫されています【図版⑬】。古典籍の精巧なレプリカが置いてあって、自由に手にすることが出来ます【図版⑭】。こうやって西尾の子だちは巻子本を自由自在に扱えるようになるわけです。館内の至る所に所蔵資料の書影が隠れています【図版⑮】。このようにして市民が学ぶ社会教育の拠点として、書物文化の発信地として、興味深い施設となっています。

このように、ただ研究者のための文庫としてあるだけでなく、地域文化のアイデンティティの拠り所として発展することが期待されます。そのことがとりもなおさず、文庫の生命力を意味するからです。

その機能をさらに補強するために、2年前から岩瀬文庫を主会場として、「にしお本まつり」という市民手作りの文化祭が開催されています。今年は第3回目で、10月11・12日です。そこでは何が行われるのかというと、西尾で初めての本格

的な古書展、書物をテーマとした文化講演会、旧書庫内の見学会、和装本を作ったり古文書を読んだりする体験コーナー、岩瀬文庫所蔵古書にあるレシピを再現した料理教室、などなど。市民のボランティアの皆さんのが、文庫や隣接する市立図書館の職員の方々と手を携えて、生き生きと運営をして下さっています。地方自治体で催す祭といえば、人集めしか眼中にないようなイベントが目立つ中で、私はこれは出色の催しではないかな、と思います。

文化講演会は、第1回目は出久根達郎さん、2回目は嵐山光三郎さん、今年は藤本義一さんです。これこれこういう趣旨のお祭をやっているのでは非、とお願いの手紙を書いたところ、二つ返事で引き受け下さいました。意気に感じて下さったのだろうと思います。



図版 ⑭



図版 ⑬



図版 ⑮

このような催しを継続することを通して、西尾が「本の町」として市の内外に声価が定まるならば、どんなにすばらしいことだろうと思うのです。そんな幸せな町がこの世に出現したら、日本全体により影響を与えるに違いありません。最近、知事の座を捨てて国会議員になろうとした人がいましたが、話は逆で、日本をよくするためには地方をよくすること以外に道はないのです。

なぜ「本の町」というコンセプトが秀逸なのかというと、それは政香の言うとおり、書物こそが人類のうみ出した最重要の宝だからです。なぜ宝であるかというと、人類は書物によって、初めて

人の死を乗り越えて、知識や智恵や思いを伝達するすべを知ったからです。同時代のことしか視野にない人間を、教養のない人といいます。そういう人たちで満ちあふれた町は、どんなに豊かだろうと、景色がよからうと、すばらしい古建築があると、精神の荒廃した、不幸な町です。そういう人を一人でも少なくすることが図書館の重要な役割だろうと思います。

と、激するあまり、話が大きくなりすぎました。本日の夢話が、皆さんの図書館の運営にとって、何らかの参考となるならば、嬉しい限りです。

貸本屋史上の大忽 — 公共図書館の原点 —

前佛教大学教授
長友千代治

江戸時代に出版業が起り、出版本屋と関連する各種の商売も起る中で、貸本屋はどのように発生し、どう展開したのかを略述した上で、名古屋の貸本屋大忽の略述をして、図書館発展の基本的な要素を探ってみたいと思う。

I 商業本屋の開始

商業本屋がいつ起ったのかを明らかにすることは極めて興味深く重要なことではあるが、しかしこのようなことが決定されるはずではなく、状況判断するしかない。その商業本屋発展に変革を起したのは、大量に印刷できる整版印刷を書物印刷へ導入したことであった。整版印刷は摺経^{すり}や経典類等の印刷を中心に、長い歴史を持っているが、近世初期になって秀抜な機能が見直されている。1559年（慶長4）『当代記』には次のようにある。

此の冬、此の五三個年、摺本（すりほん）と云ふ事を仕出し、何の書物をも、京都において、これを摺る。当時（現在）、是れを判と云ふ。末代の重宝なり。

一般に書物の製作は、写本では10部位、活字版では100部位、整版本では1,000部位の能力と考えられており、これは読者数に対応した数とみなされている。

初期整板本の普及をよく伝えているのは、1643年（寛永20）『祇園物語』の記事である。

近比、烏丸を通りしに、所用の物本^{ものほん}もやあると、物本屋に立寄り候折節、家の主は留守なれば、立帰らんとせしに、奥より十一二なる姫の出て、「何の物本の御用候や、何々本こそ候へとて、巻の数、作者の名まで、細かに申しける。

また、同書には、

清水物語と申物を携へ来たり、是を板にせられ候はば、利徳あらんと申され候により、即ち調へ候へば、京や田舎の人々に、二三千通りも売り申せし也。

写本の『清水物語』を整版印刷にして、2、3千部も売ったことが記されている。これにより、次のことが推測できよう。読者の需要を満たすべく本の商品性が高まり、整版によって大量に印刷され、関連する各種の営業も発生することになる。それは、板木屋、紙屋、表紙屋、製本屋、取次本屋、貸本屋等である。

出版は、読者意識を反映した啓蒙書、実用書、娯楽書等に漸次変化する。前期の四民上層階級の読者層は、後期になると若い婦女子にまで広がる。文学関係で言えば、前・中期の仮名草子、浮世草子、読本、淨瑠璃本等の普及は、後期になると洒落本（遊里小説）、黄表紙（劇画）、合巻、人情本（市中男女の恋愛小説）等の誕生になり、それは内容・構成・表現・文字遣のみならず書型・製本にまで、変化するのである。

本屋の発展には都市の繁栄と識字人口の増加が必須になるが、江戸時代265年間は庶民自らが充足する方向で発展している。

話を元に戻して、商業本屋はいつ頃から始まったのか。三都や地方について瞥見して見よう。

京都では、1603年3月慶長癸卯（8）春、富春堂の『大平記』四十巻（日本古典文学 大系の底本）等の刊行を、かねてから商業本屋の初めと推定しているが、同意の意見もある。富春堂には慶長壬寅（7）冬日南至『脉語』の活字版があり、また『吾妻鏡』の伏見版、『吾妻鏡』の仮名活字版もある。本屋と署名する始めは、1609年10月「慶長十四己酉年陽月下旬 室町通近衛町本屋新七刊」の『古文真宝後

集』10巻2冊とされている（和田万吉氏『日本書誌学概説』有光社 昭和19年）。

大坂では、1626～40年頃（寛永3～17年頃）、『大坂市街・淀川堤図』（八曲一隻）に謡曲『忠信』を売る店が描かれている（脇坂淳氏「大坂を描く諸屏風の脈絡」「大阪市立美術館紀要」第6号）。現在、大阪最初の開版物として確認されるのは、1670年1月「寛文十^庚年正月吉日 於大坂開板」の『寛文重宝記』で、利息計算表も載せる実用書である。

江戸では、1624年頃、寛永初め頃から、他の商売と同じく、京都の有力な本屋が江戸出見世を出して、京都の店名に江戸出見世の住所を入木したりした出版物が多い。松会（まつ）版の発行も江戸版を特色づけるもので、京都等上方の出版本を江戸で改版している。現在知られるものでは、1647年（正保四）『光明真言初心要抄』（松会市郎兵衛）が古い（柏崎順子氏編『松会版書目』書誌学月報別冊10）。

名古屋では、1684～88年頃、貞享年間に書林風月堂が開店している。京都書林風月堂に奉公後「古本売買」を始めたと伝わる。1802年（享和二）の『騎旅漫録』には「書肆は風月堂永楽屋 貸本は湖月堂」とある。

地方の本屋では、井上隆明氏著『改訂増補近世書林板元総覧』（日本書誌学大系76 青裳堂 平成10）があり、その調査から集計して上位の本屋を列挙すると次のようになる。

仙台17軒。水戸10軒。横浜・美濃各6軒。

新潟・山形・松阪・堺各5軒。和歌山50軒以上。長崎20軒。

江戸時代には、都市の発達とともに、全国で出版本屋等が誕生し、盛んに営業していた。

II 行商の本屋

出版によって各種の本商売が起る中、貸本屋の淵源となるのは本を持って歩く行商本屋であるが、それにも色々な形態があった。

中世終り頃から本賣がいて、堂上貴族の館を巡回していることは日記や記録に確認されるが、近世初期の記録にも出てくる。例えば、『鹿苑日録』

1615年（元和元）3月18日には「書物を鬻^{ひぐ}者来る。大小十二部買ふ」とあり、『土御門泰重卿記』1617年（元和三）3月8日には「本屋、太平記、拾芥集（抄）、持来候。買置候。銀子四拾目也」とある。一方では、上層町人階級、あるいは農村の名主等の間を巡回する者も現れる。1624年頃（寛永初年頃）成立の笑話本『昨日は今日の物語』には、次の記事があって珍しい。

田舎へ物の本売りに下りて色々の物売りける。又ある人、枕草子^{まくらし}を買ふとて、「もし文字の違ひたる事があらば、返さうぞ。此の程の買うた中にも、悪しきことがある」と申されければ、「これは、要法寺の上人、世雄坊^{せいわう}の校合なされたほどに、少しも違ひは御座あるまい」と申した。

「枕草子^{まくらし}」は春本であり、「世雄坊^{せいわう}」は日蓮宗の権威ある学問僧で古活字要法寺版の出版者であるから春本の校合等する筈はなく、それを売る者も買う者も知りもせず、知ったかぶりの発言に笑いを取っているのである。

都市部にあっては、市中で本を売り巡る者が現われている。1675年（延宝3）『山茶やぶれ笠』（図1）、同年『吉原恋の道引』、延宝6年『大和侍農絵づくり』には、本賣喜之助が吉原遊郭内で本を売り歩いている姿が描かれており、共に菱川師宣の絵で、昼は暇な遊女たちの暇つぶしに本を売っているのである。1688年頃（元禄初頃）の『武道継続の梅』（石川流宣）（図2）には、新吉原町に本賣庄介が描かれている。

巡回して営業する小間物売が、本と一緒に持ち歩いているのも1690年頃（万治頃）から確認され（『徳川時代警察沿革史』）、これは普通のことであったと推測されるが、1705年（宝永2）『傾城武道桜・四・三』（図3）には小間物賣伝介（浪人）が次のように登場する。

私は新米の小間物賣、何によらずおまけ申す。此のお館^{だいか}へお入りを願ひます。伽羅^{きや}の油、櫛、笄^{かう}、元結^{もと}、丈長^{たけなが}、煙草入、鼻紙袋、香包、袱紗^{ふくさ}、香箱、畳紙^{たたみ}、白粉^{おしろい}、眉掃^{まゆはき}、紅屋針^{べにや}、好色本、上るり本、御望次第召しませ、と声を張り上げ売りける

を、佐助呼び入れ、こりや苦しからぬに是へ参れ。

と、お館の下人の佐助が呼び入れていう。

久々の御逗留に残らずの遊興。又近日京へ御上りなされ共色にはだしをうたれ、立つもたれず、居るもいられず、明かし兼ねたる夜の長さ、徒然草も古ければ、新しい色草紙いろぞはなきか。

との言うのに、伝介が承わり、

されば、新板どしどし板行するといへ共、いづれか思ひ付同じことにて、皆板がへし（同じ事を繰り返す陳腐な表現の譬え）の如し。さる程に、作者の知恵も変わらぬもの。中にも気の替りたるは、茶屋諸分車と申して、茶屋一通りの大金、代物は二枚、お買ひなされませいと、本を出せば、吉高奥より其の本求めよ、畏まり、佐助サア二枚の商い、旦那。是から何がうりやうも知れぬ。扱そちに尋ねたい事有。もし此の辺に兵法の指南して世渡る者はないか。

とある。引用が長くなつたのは、小間物売の実情を伝えたかったからである。小間物売が方々に出入りしていて生活の情報提供者にもなっていることは、後の貸本屋でも同じで明治迄続いている。もう一つは、これまで伝本不明であった『茶屋諸分車』を、下巻のみではあるが、最近入手したことである。古本販売目録に出た価格は、二枚（現在約5千円位カ）どころか、10万円。『西沢一風全集』全6巻（汲古書院）が2005年に完結してからの西沢一風の新出本として、大東急記念文庫「かがみ」第39号に紹介することになっている。一風は自分の本で宣伝しているが、内容は茶屋遊びの指南書で、読者迎合も甚だしいものである。

絵草紙壳も同類で、これも貸本屋誕生の要因になっている。1681～84年頃（天和頃）江戸堺町正本屋十右衛門の店頭図が柳亭種彦の『用捨箱』（図4）に掲載され、次のことが記されている。

前に写し、六方詞の板元 十右衛門が見世棚の図なり。童わらは即すな絵草紙売なり。

江戸当世男 蝶々子撰 延宝四年印本

うるや曆竹に挟みし四方の春 浅山

曆又絵草紙の類を、此の如く竹に挟みて、売



図1 延宝3年『山茶やぶれ笠』所載の本壳喜之介



図2 元禄初期頃『武道継穂の梅』所載の本壳庄介

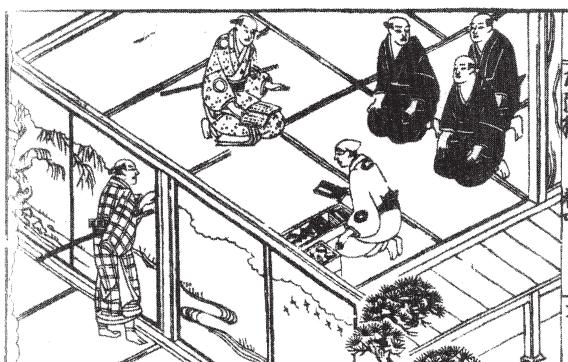


図3 宝永2年『傾城武道桜』所載。小間物売伝介が『茶屋諸分車』を勧める所

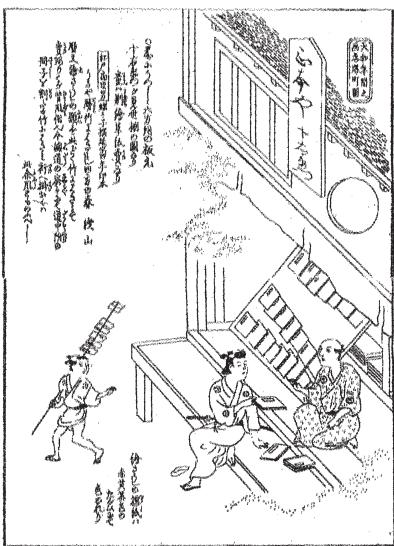


図4 天保 12 年『用捨箱』所載の延宝・天和頃の正本屋十右衛門店と絵草紙壳

り歩くが昔風俗むかしり也。今海道の宿々にて、道中付の冊子を割りたる竹に挟み、軒へ掛け置くは此の余風とも言ふべし。絵草紙の標紙は赤・黄・茶色の類にて色どれり

道中付売のことは、1868年（慶応4）再刻『懐中重宝記』（新刻は1851年〈嘉永3〉）に、

（この『懐中重宝記』を）売弘め度き御方は、四十冊を売弘め候へば、御名前彫り入れ申すべく候。尤も、手賃ニ相成り候ニ付、四十冊に満たざる分は、御名前相除き申すべく候とある。この『懐中重宝記』に掲載の旅宿は383軒あり、削除の墨格もある。単純計算では、14,920冊以上が街道の旅宿で売られていることになる。このように必要な実用書等は買い取られるが、反対に娯楽読み物等は貸し歩かれ、貸本で読まれるのである。

一方、一般的な貸物屋の営業も認められ、それが特定商品、この場合は本だけを取り扱う貸本屋の成立に繋がることも推測される。1709年（宝永6）『本朝藤陰比事・六・一』「○好色は世界の貸物屋」には次のようにある。

万づ借物屋、白無垢、浅黄上下、毎日無常野に送らぬ絶え間なく、此の二色の貸し賃取つて五人口、…中より下の諸商売人、皆借り物にて埒のあく世は広きことぞかし、…肩入侍

に、貸し刀、揃い羽織、踊り浴衣、花見幕、貸毛氈、弁当被衣、一夜貸の夜着蒲団、蚊帳、括り枕、寝覚めの煙草迄…

また、1712年頃（正徳2頃）『お高梅田心中・上』には、同じく次のようにある。

思へば我は貸物屋、小夜着、小蒲団、蚊帳、屏風、弁当、野風呂、寝覚めても賃さへ出せば、何時でも持つて蹲くふ見世の先

貸本屋は本商売の一種であるが、当初は巡回する行商本屋や小間物売が本を持ち歩き、あるいは絵草紙売も出現していて、物品の貸物をする貸物屋もいて、これらの商形態が貸本屋の成立に深く関わっていたと想像される。

III 貸本屋

貸本屋は、その淵源は行商や貸物屋で、個人を巡回する者が多い。最初は小間物等と一緒に本が持ち歩かれ、文房具等も含めた雑多な商品とともに、お客様の需めによって臨機応変に売ったり貸したり交換したりしていたが、後には貸本だけをする専業者になった。

「貸本屋」という語は、歌舞伎評判記、1713年（正徳4）『役者座振舞・坂』（荻野八重桐評）に出る次の「借か本屋」の語が初出ではないかと思われる。

成程さふじや。当春、系図娘に、借か本屋おまつと成、万菊殿の屋敷へ来り、恋の目づかひ、どふもどふも。万菊殿寝入られし所へ出、寝所へはいらんとせらるる思ひ入れ（中略）、何事でも切りかはつた芸。

江戸時代には「貸」「借」を使いわけず、共用している。同じく歌舞伎評判記、1741年（元文6）『役者懐中暦・京』（坂田市太郎評）（図5）にも次の記事がある。

当頃見世神代卷に、有馬での貸本屋、おつやと成つての出は、貸本の言い立て、口跡こうせきさつぱりと、愛敬があつて。

『役者懐中暦・京』の挿絵を見ると、説明文には「本うりつや／坂田市太郎」とあり、貸本屋と本売とは同じものとして扱われている。貸本屋を歌舞伎に登場させるのは、人目を引く職業で流行であったと思われる。切り変わった芸とか、口跡

さっぱりととか、愛敬があるとか評されていて、知性の匂いが漂う。出入りする所が『役者座振舞・坂』ではお屋敷の寝所、『役者懐中暦・京』では有馬温泉で、女貸本屋が入り込むしぐさには、風俗的な猥雑さがある。温泉の貸本屋は、城崎や熱海温泉等各地に認められ、女貸本屋は1854年（嘉永7）『明鶴雪笠松・二・下』（図6）にも登場する。

歌舞伎台本が貸本に作られて、それが夜講（寄席の夜間の講）にも使われている記事が、1787年（天明7）『書初機嫌海・下・一』に出ている。



図5 元文6年『役者懐中暦・京』所載の女本壳



図6 『明鶴雪笠松・二・下』所載の女貸本屋

立役、敵役、女形、何でもする役者あり。かぶき芝居のせりふ書の借本有り。それを読み切りの夜講有り。

ここで、貸本屋の隆盛を端的に伝える資料（図7）を2つだけ紹介してみることにする。



図7 天保14年『冠附梅の花笠』2編所載の貸本屋

1は、1802年（享和2）覆刻版『小栗忠孝記』の秋里籬島の序文で、これは営業活動である。

徒然を慰むる物は、大和・唐の書み、昔・今の物語の類なり。これを小書肆の輩がら、背に汗し、足を空にして、豊横に走り、町小路までも、日数ひかを限りて貸し歩く。見る者、僅つかの見料をもつて慰む事、当世のならはしとなりぬ。

2は、1813年（文化10）山東京伝の『双蝶記』の序文で、よく知られたものであるが、こちらは接客勧誘である。

絵は即ち顔形かほかなり。作は即ち意氣こころなり。板木彫は紅白粉なり。摺仕立は嫁入衣装なり。板元は親里なり。読んで下さる御方様は婿君なり。貸本屋様はお媒人なかなり。（作が愚かで婿君の御気に入らぬ所の多いのを）お媒人口にて、かやうかやうの娘がござる。顔形は言ひ分なし、心ばへ少し愚かなれど、其の変りには（と、持ち上げ）拙きを覆ひ、悪しきを善きに取りなして、進め込んで下さらば、

縁遠きこの娘も善き婿君にありつくべし…是れ即ち力と頼み奉るお媒人の、貸本屋様の言ひなしによる所なり。

ともに、貸本屋の実態が具体的に想像できるが、明治末から大正頃になると、今度は活版印刷に変革して、整版印刷によって誕生した江戸型の貸本屋は衰退する。1917年（大正6年8月）『風俗』2巻6号では次のように伝えている。

今は絶へたるが、貸本屋は、紺の大風呂敷へ、丈たけ高く貸本を積み上げ、中結なかの細引、挟板にきりりとめしめ、風呂敷の上よりは、太佐奈田などにて結び、絵入読本、実録、写本、隨筆、軍談、人情本、或は、好みによりては、異本枕の草紙（春本）を貸したる者なり。

江戸時代の貸本屋の有様をよく伝えている。

貸本屋を営むには、本を貸本として装備する必要がある。それは現在の図書館の整理と本質としては同じである。ここでは項目だけを掲げておくこととする。

◇貸本の仕入 新刊本購入のほか次のような専門店があった。

「貸本類仕入所并古本売買仕候」（図8）

「万絵草紙／おろし所」

「流行人情続本仕入問屋」

「和漢御書籍売買所并かし本類品々」

このほか写本製作を業とする者がおり、或いは専属の作者を抱え自家製作の貸本もあった。

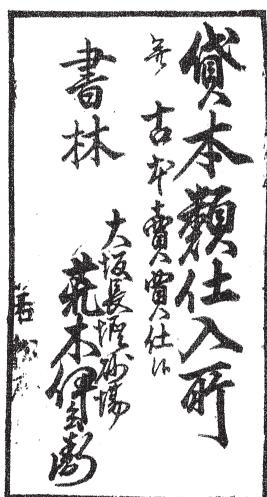


図8 荒木伊兵衛の引札

◇貸本の装備 仕入れた本を貸本に仕立てる。

蔵書印（多くは墨印）を押し、分類や取扱注意等の付箋を貼り付け、見料を決める。

◇蔵書構成を考え紛失や破損等の対策をする。

V 名古屋の本屋と貸本屋大物

太田正弘氏の『尾張出版文化史』（六甲出版平成7年）には詳しい調査があり、江戸時代、名古屋には116軒、尾張では127軒の本屋営業を確認され、貸本屋は1809年（文化5）に62軒あったという記録の紹介もある。私は、愛知県下で85軒の貸本屋の印記を確認している。

『尾張出版文化史』に解説する貸本屋兼業の本屋は10軒であるが4軒を引用する。

風月堂孫助（貞享～明治）

出版・古本・貸本・製墨

松屋善兵衛（昭華堂 安永～明治）

出版・古本・貸本・双六の刊行・文房雅玩・舶来諸品・薬

美濃屋清七（文華堂 文化～明治）

出版・古本・貸本・薬

万屋東平（慶雲堂 文化～明治40年）

出版・古本・貸本

引用からも分るように、江戸時代の本屋は出版のみならず古本、貸本、さらには文房具、薬、明治になると舶来諸品等、多角形経営で派手であるが、それは現在の中小の本屋も同じである。問題は、貸本営業が確認されても、貸本が纏まとった蔵書として残っていないことである。貸本営業が記録や貸本印記から確認されても、蔵書の全容は貸本付帳のようなものが見付けられない限り、不明なのである。当時、貸本屋の蔵書は、顧客を一巡すると次の貸本屋へ売却されるものであり、その流通経路もできていたと推測されている。これらの貸本屋と違って、営業本を転売せずに蓄蔵したのが大野屋惣八である（図9）。貸本の蔵書数22,600余冊が明治の売り立て目録に計算され、実際にその多くが国立国会図書館、東京大学、京都大学、数は少ないけれども筑波大学、東洋文庫、他にも僅かずつながら方々で確認されている。

大野屋惣八については、未紹介の資料『貸本書

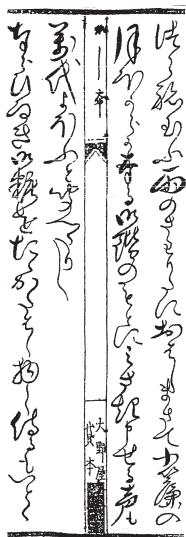


図9 『修学院御幸記・安元御賀記・北山行幸記（御幸三記）』の板摺用紙

肆大惣江口家内年鑑名古屋胡月堂 家内用』（小田原市立図書館蔵）があつて、これは名古屋市の「郷土文化」に翻刻紹介する約束をしながら遅延しているが、主としてこの資料から概説してみることにする。

大野屋惣八の略称は大惣で、屋号は胡（湖）月堂、聚文舎等、姓は江口氏という。

大惣の初めは、1723年（享保13）に知多郡大野村から名古屋舟入町に住居し、酒屋を営む。1753年（宝暦4）樽屋町で売薬願済み。1776年（明和4）11月沃花連の能書を配る。この年頃が貸本屋の開始である。1802年（享和2）6月27日今に伝わる店張り出しの文章（伏稟）を牧野村神谷剛甫きのめくでんがくの媒酌により、京坂旅行中の曲亭馬琴に書いて貰った。謝礼は銀壱両であった。（1811年〈文化8〉11月初代没）

1813年（文化10）8月本屋仲間、安永講に加入、五日が本せり。同年12月2日道具屋株を門前町彦兵衛より、札代壱両弐分銀八匁で買う。1815年11月8日質商願い出、当日済み。1818年（文政元）11月19日福寿講加入、毎月20日の本せり。同2年2月4日古道具株を壱両弐分で買う。1819年2月本屋行事を仰せつかる。1825年4月8日鉄砲町に出見世、本屋仲間に振舞う。1830年（天保元）5月15日質屋株になる。1831年10月5日十

夜講に始めて加入、当番。同年11月2日大黒講、川市にて初会。1832年2日水滸伝の願いを出す。同年10月4日琉球人行列図の願いを出す。1835年閏7月25日書林行事を仰せつかる。1844年（弘化2）3月朔日見料帳に願い改めとあり、見料を錢に改める。1846年5月18日袋町に、楊弓・投扇店願い済み。（1847年〈弘化4〉7月二代目没）

1847年10月19日書林行事を仰せつかる。1851年（嘉永4）5月6日『感興漫筆』に次の記事がある。

五月六日より貸書肆胡月堂大野屋 惣八の請ふに因て、彼家の蔵書を分類して書目を改定す。胡月堂、今の三代前より貸書肆を開く。蔵書甚だ多し。書庫二箇と、肆に積む所と、巻数未だ幾許あるを知らず。改定書目の峻功、亦何れの日に成るを期する事能はず

とあるが、翌年五月に「胡月堂蔵書目録叙」の記述があり、完成したことが分る。

1855年（安政2）9月諸色値下げに付き、貸本値下げ。1858年9月、惣八・本利・本膳・本清四人、仲間で智（知）多へ本買いに行く。1859年3月15日孔子講、本屋仲間。1868年（慶應4）7月、風月・永東・みの伊・本觀四軒、連名で金両、書林仲間調達金。（1873年〈明治6〉6月、三代目没）

1897年（明治30）四代目没。1899年（明治32）貸本屋を廃業する。

『貸本書肆大惣江口家内年鑑名古屋胡月堂 家内用』は、後述する七代目江口元三氏が、有名になつた貸本屋史として編纂されたものと推測するが、見る所貸本は実際は余業のように判断され（逍遙は「道楽」と「少年時に観た歌舞伎の追憶」（『逍遙選集』第12巻所収）に記している）、主力の仕事は売薬、歴代の酒屋、道具屋、古道具屋、質屋、また新規の楊弓・投扇の経営であったと思われる。従つて、資金に裏打ちされて本は集められ、他の貸本屋のように転売の必要はなく、おのずと蓄蔵が多くなつた思われる。

次には、大惣の貸本制作作者や利用者について略述してみよう。制作者についてはかって「貸本屋大惣の文壇」として纏めている（拙著『近世の読書』青裳堂書店 昭和62）ので、そこから要約してみる。大惣には以下に記すように、十数人の戯作者

たちが集っていた。

椒芽田楽には『新儀意鈔』等8作品がある。満寿井豹恵（別名は御存カ）には『郭の池好』等8作品がある。料理蝶斎には『女楽卷』がある。爰于おきなさいには『囲多好囃』がある。旭亭主人（別名は川東主人）には『天岩戸』がある。模釈舎には『駅客娼穿』等3作品がある。悟鳳舎潤嶺には『浮雀遊戯嶋』がある。彼等は作品を、柱記に「かし本 大野屋/貸本」等とある大惣の用箋を使って書いているのが特色である。

特記すべきは、何よりも当の大野屋惣八には戯作名「南瓜の蔓人」があり、『通妓洒見穿つぎしや』（西の年新作〈享和元年辛酉か文化10年癸酉〉）等の戯作のあることである。また『軽世界四十八手』（1800年〈寛政12〉序）の編集もしていて、それは江戸で評判の高い山東京伝作『傾城買四十八手』（1790年〈寛政2〉）を模倣したもので、田楽らが挿画を描き、惣八は序文を書いている。有賀亭光は「切れる手」「端手な手」を、満寿井豹恵は「見抜かれた手」を、由賀翁斎は「不味な手」「真の手」を、於仁茂十七は「忍の手」を、川東京伝は「易い手」を、木下山人は「捻つた手」を書いている。巻末の予告には「珍しき新作追々出来仕候間御覽可被下候」とあり、奥付も江戸の蔦屋重三郎を模して「書肆蔦舎梓」としている。

高力猿猴庵の『猿猴庵日記』は名古屋市中内外の市井記事で、各種現存本の中で、貸本用の大惣本が最も見やすいとされ、この類は名古屋市博物館資料叢書3『猿猴庵の本』等でも紹介され、詳しい解説がある。

小寺玉晁（こくちよう）は家が貧しく、大惣の貸本の筆耕をして暮しを立てていた。著述は150種余、『尾張芝居雀』『見世物雑誌』『尾張祭礼年中行事』等が代表作である。

小田切春江（歌月庵喜笑）の『名陽見聞団会』（図10）も「大野屋惣八」の用箋を用いていて、奥付には「天保四年癸巳正月出来 名古屋書林 大野屋惣八貸本」とある。

二世平出順益（尾張藩医）は、江戸時代の大惣貸本利用者で、1833、4年（天保4、5）の日記が残っており、そこには次のような記事がある。1833年

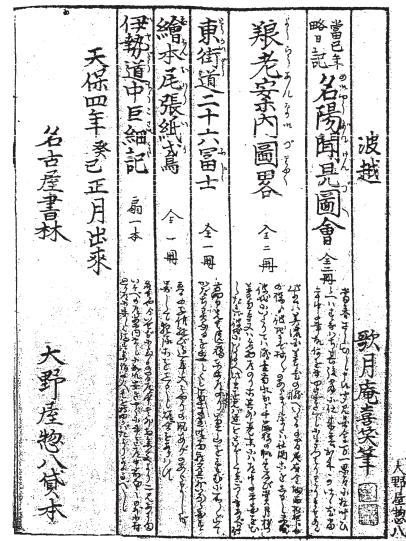


図10 『名陽見聞団会』 奥付

正月元旦「殺生石後日怪談五編馬琴を大惣にて借読す」。2日「蓑笠雨談馬琴作を大惣にて借る」。4日「大惣にて骨董集初篇、飛鳥川当流男を借りる」。7日「西鶴織留を借る」。19日「大惣に至る。笠亭仙果に逢ひて、申時伴ひて帰宅。清談、刻を移す中、笹の屋新七来る…」。21、27日にも大惣に行く。

V 近代の大惣本研究

近代の大惣貸本利用者については、坪内逍遙（1859年〈安政6〉～1935年〈昭和10〉）が有名である。逍遙は東京専門学校（現早大）教授、小説家、劇作家として活躍、近代日本の開化に貢献していることは、今さら言うまでもない。逍遙の大惣貸本利用についてはよく知られた「少年時に観た歌舞伎の追憶」（『逍遙選集』第12巻所収）から引用する。

大惣は、先方は無意識であり、不言不説であつたのだが、私に取つては、多少お師匠様格の働きをしてゐたといつてよい。とにかく、私の甚だ粗末な文学的素養は、あの店の雑著から得たのであつて、誰れに教はつたのでもなく、指導されたのでもないのだから、大惣は私の藝術的心作用の唯一の本地即ち「心の故郷」であった…顧客の主なものは学者、文人で、代々の主人中には、その当時の名家と別懇に交際したものもあつたらしい。大名屋

敷なぞも其主な顧客であつた。中には、店の一室へ半日以上も坐り込んで、又格別の交際ある者は其土蔵内に入ることをも得て、恰も今の図書館代りに、此店を利用したものもあつたと云ふ。

逍遙は、後に、「忘れじ君が家こそは我が心の故郷／元の大物主人江口君のために 逍遙遊人」(名古屋市博物館蔵)とも揮毫している。

水谷不倒（1858年〈安政5〉～1943年〈昭和18〉）は東京専門学校卒で、逍遙と交遊があり、江戸文学研究の草分けであるが、大物本の処分に立会っている。『古書の研究』(駿南社 昭和9年)に次の記事がある。

私の家は僅か二丁半余を去る所にあり、父が読書子であつたから、毎日本を借りに行く、四五歳の時から其使に付いて行き、後には毎日私が使にやられる事になり、其代り何でも好きな物を借りて来て読む。そんな関係で大物とは深い親しみを有つてゐた。

金森徳次郎（1886年〈明治19〉～1959年〈昭和34〉）は名古屋の皆戸町生れである。新憲法の起草者、初代の国会図書館長として知られる。次は『私の履歴書文化人15』(日本経済新聞社昭和59年)からの引用である。

青びょうたんめいたこの小さな悪童は反抗意識をいだいて雑書を読み雑学にふけった。当時、名古屋に大物という古い貸本屋があつて徳川時代の文学書を一通りそろえていた。この店は坪内逍遙先生が長くヒイキされた店で、現在ではその当時の在庫本は東京の大学や上野の図書館などに保存されており、そこ蔵書印のあるものは古本屋でも値が高いそうだが、そんな店へ出入りして雑書を借りて読んだ。もちろん16、7才の子供のことだから江戸文学の高級品に親しんだわけではないが、手当たり次第に隨筆ものや軽い国文学の書(多くは和紙木版刷)をむさぼり読んだ。鳥の子紙に草仮名で美しく書いた筆写本もあつた。大部の隨筆「塩じり」の筆写本もあった。堅いもの柔らかいものさまざままで、今から思うと早熟であったと思わざるを得ない。

沼波瓊音（1877年〈明治10〉～1927年〈昭和2〉）は1889年（明治22）に愛知県尋常中学に入學し、大物より小説類を貸して讀んだ。東大を卒業、一高教授を勤めた俳人で、『俳諧音調論』の著がある。1947年（昭和22）1月「郷土文化」(第2卷1号)に、山村魏氏は「大物のこと」として次のように書いている。大物研究の重要性を指摘し、研究の端緒となつたと考えるので、ほぼ全文を引用しておく。

大正の初め頃まで桑名町にあつた貸本屋大物は文化文政頃から続いた店で、主人は代々大野屋惣八を襲名しなむ相当の文化人だつたから、その蒐集した書籍文献も多種多様で各方面の珍籍稀本が多かつた。終戦後巷間に簇出しつゝある安価な貸本屋とは、その質量に於て断然異つて、これはまさにその当時に於ける市民図書館たるの觀があつた。随つて名古屋出身の文学者にしてその恩恵を蒙らないものはなかつた。しかも伊原青々園の名著『日本演劇史』は大物に所蔵されてゐた演劇に関する資料を坪内逍遙博士が買ひとられ、それを伊原が借覧し整理して体系づけたものだと聞いてゐる。東京帝大の図書館に保存されてゐる酒竹文庫は、現在の俳諧に関する文献中有数のものであるが、これも多くは大物にあつたもので、大野酒竹が親友の沼波瓊音の処へ遊びに来るごとに大物に立寄つて、主人惣八が貸本だから売れないを無理にねだつて買ひあつめたものであつた。…兎に角大物の所蔵本は珍重で充実してゐたことは以上を以てしてもほゞ知れるところで、戦災によつて文化財を多く失つた今日、大物を偲ぶこと切なるものがあるのは、恐らく独り筆者のみではあるまい。

大物が文化文政頃から続いたとすることや『日本演劇史』の成立について不審は残る。大正13年9月3版『日本演劇史』(早稲田大学出版部)を見ると、逍遙は序文に推奨し、青々園は緒言に「十年來、此の著述につき幾多の獎励と訓示と及び便宜をさへ与へ給ひしは坪内雄蔵先生なりき」(明治37年3月記)とあるが、逍遙が大物から買得した演劇資料を整理したという記載はなく、材

料は関根只誠の遺筆から過半、安田善之助の蔵本悉皆、の謝辞がある。それはともかく、巻末の雜纂の最後のこの記事に触発されてのことと推測されるが、5年後 1952 年 10 月 7 日、名古屋市鶴舞中央図書館では郷土文化会主催の座談会「貸本屋『大惣』を語る」が開催されている。出席者は伊藤亮三・渥美かをる・市橋鐸・尾崎久弥・栗田元次・山田秋衛・安藤直太朗・江口元三（江口家七代目）氏ら 20 名弱であった。その座談会は翌年 4 月「郷土文化」（第 8 卷 1 号）に掲載されている。

続いて、同年 6・12 月、江口元三氏は「郷土文化」第 8 卷 2、4 号に「貸本屋『大惣』の今昔」、およびその（二）を執筆された。大惣研究はこの方のこの文章や、次の安藤直太朗氏への示教から進展してきているが、代々の伝聞や推測も入り混じり、現在では訂正すべき箇所もある。

その安藤直太朗氏には「貸本屋大惣の研究」（昭和 48 年、氏の『郷土文化論集』所収。抜刷別冊もある）がある。前記の鶴舞中央図書館の座談会に出席されてから、江口元三氏に直接話を聞かれ、また綿密なメモや資料の提供を受けて執筆された最初の本格的な大惣研究で、その後の研究の基礎となり、筆者も学恩を蒙り引用しているが（『近世貸本屋の研究』東京堂出版 昭和 57 年初版）、訂正すべき内容もまた同じく踏襲している。その 1 は、前掲太田正弘氏の『尾張出版文化史』の見料は取らなかったことへの訂正であるが、このことは略述してきた資料からも訂正される。2 は蔵書の貸本は絶対に売らなかったことへの訂正で、これも同じく資料に売却の事実がある。但し、大惣貸本の凄さは 2 万数千点もの現存する蔵書にあるから、売らないのを原則としながらも売られる本もあったということであろう。1、2 について、近年、石田泰弘氏にも新資料による指摘がある（平成 15 年 3 月「近世豪農の読書事情—尾張国海西郡荷之上村服部弥兵衛家の場合—」「愛知県史研究」第 7 号所収。平成 18 年 3 月『愛知県史・資料編 16・近世 2』に一部資料収録）。石田氏は服部家の「購書録」によって、1809 年（文化 6）から 1836 年（天保 7）間に、大惣から購入した件数は 160 件、先に紹介した美濃屋（本屋）

清七からは 44 件、風月堂からは 44 件、松屋善兵衛からは 2 件、万屋東平からは 12 件と紹介されている。

大田・石田氏の指摘の他に、大惣本が入った図書館は帝国図書館（現在の国会図書館）、東京大学、京都大学、早稲田大学とあるのも、早稲田大学には入っていないことが確認されており（後掲の広庭基介・柴田光彦両氏の論文他）、京都大学に入った本は東京大学に良い本が入った残りの本ということも訂正されている（広庭氏論文）。これら三箇所に入った数には比べられないが、他にも東洋文庫に入り（柴田氏論文等）、筑波大学（元東京高等師範）にも入っている（広庭氏論文）。

現在に確認される実情と齟齬するのは、江口元三氏の代々の伝聞、戦災で消失した記録の記憶、あるいは折々のメモ等によって資料が提供され、執筆されたからであろう。

以下は大惣の旧蔵本を使った大きな研究である。簡単に紹介しておくことにする。

・『未刊名古屋本小説集』全 3 冊（名古屋市文化財双書第 33・40・44 号、昭和 38・41・43 年）は尾崎久弥氏（1891 年〈明治 24〉～1972 年〈昭和 47〉）の編著。「IV 名古屋の本屋と貸本屋大惣」で紹介した大惣の貸本製作作者らの戯作を編集、翻字したものである。

・『洒落本大成』全 30 冊（中央公論社 昭和 53～63 年）は洒落本大成編集委員会編。大惣本も多く収録している。

・「京大『大惣本』購入事情の考察」（1984 年 5 月「大学図書館研究」第 24 号 学術文献普及会）は広庭基介氏の論文で、京大のみに限らず、東大、東京高師、帝国図書館が購入、早大は購入していない等、広い考察がある。

・「貸本文化」1982 年 10 月増刊号「特集・貸本屋大惣」は、貸本文化研究会会誌（代表大竹正春氏）。内容は、名古屋の「大惣」資料（長友千代治）／我が家の歴史（江口元三記・服部仁輔編）／大惣年代表（江口元三記・長友千代治翻字・解説）／大惣本を求めて—『大野屋惣兵衛蔵書目録』刊行のために—（柴田光彦）／京都大学「大惣本」購入事情（広庭基介）／東京大学の「大惣本」に

について（延廣真治）／外国の図書館における大惣およびその他の貸本屋旧蔵本（ピーター・コーニッキー）／「貸本屋大惣」見学会記。

・『大惣蔵書目録』本文篇・索引篇 2 冊（青裳堂書店 昭和 58 年 3・8 月）は柴田光彦氏編著。早稲田大学に所蔵する原本の蔵書目録は全 15 冊である。

・『近世人をめぐって』は昭和 68 年 4 月 11 日～20 日、京都大学付属図書館展示ホールで開催された約百点の展示カタログ。同図書館に所蔵の大惣本約 3,700 点の目録、第 1 分冊の刊行記念。

・『京都大蔵大惣本稀書集成』全 17 冊 別巻 1 冊（臨川書店 平成 9 年終結）は京都大学文学部国語国文学研究室編。内容は次の通り。浮世草子／談義本・滑稽本／読本 I・II／軍記／実録／雑話 I・II／歌舞伎台帳／歌書／連歌／絵本／写本小説／名古屋戯作／仏書／教訓書／語学／大惣本目録。全大惣旧蔵本で構成されると一層よかったですとの評あり。

VI 終わりに

最後に貸本屋大惣から、学び取られることを纏めてみたい。

1 は、収書に資力のことである。前述のように薬屋、酒屋、質屋、道具屋、古道具屋、楊弓・投扇店、新刊発行等、各種の利潤の上る本業があり、貸本屋経営の裏付になった想像され、他の貸本屋のように、転売して新しい貸本を仕入れる資金の必要はなかったと思われる。

2 は、貸本屋としての成長期に、取り巻きに本

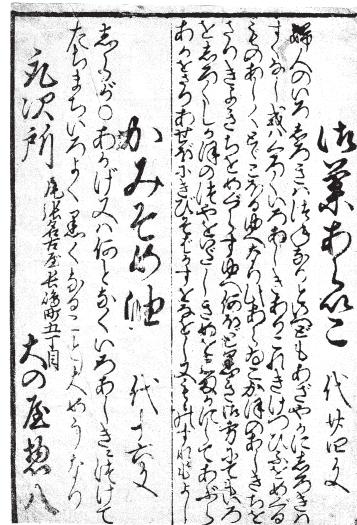


図 11 大惣の薬の広告チラシ「御菊あらいこ 代廿四文」「かみそめ油 代十六文」

の愛好者や利用者がいて、相互に親密な交流があったことである。特に二代目は仲間と戯作もして、サロンのようなものを形成していた。

3 は、利用者に役立つ蔵書が、読物から堅い専門書まで、広く収集されていたことである。前述のように、坪内逍遙や金森徳次郎等、明治期に各方面で指導者となる人達の人格を形成する蔵書があった。

4 は、その蔵書は引き継がれて後代重要な研究資料になるほど各種大量の蔵書であった。

改めて要約すれば、理解のある管理運営者と読者がいて、潤沢な予算があり、収集を怠らぬことが発展の要因であったと言えよう。

事例報告

愛知県立大学学術情報センターにおける ICT リテラシー促進の試み —「ICT よろず相談所」の開設とその運用—

愛知県立大学学術情報課

米 井 勝一郎

はじめに

本稿では、愛知県立大学学術情報センターが、平成 19 年度愛知県公立大学法人理事長特別研究費の助成により実施した愛知県立大学構成員のための ICT (Information and Communication Technology) リテラシー促進事業「ICT よろず相談所」の開設とその運用について報告する。

1. 愛知県立大学学術情報センターの発足とその課題としての ICT リテラシー促進

平成 19 年 4 月、愛知県公立大学法人が発足し、愛知県立大学及び愛知県立芸術大学並びに愛知県立看護大学が、その管理運営下に属することとなった。この公立大学法人化に伴い、愛知県立大学（以下「本学」という。）の学内組織の再編成がなされ、「教育研究に対する支援強化を図るために」¹⁾ 設置された学術情報センターの下に、附属図書館と旧教務課に属していた情報基礎教育施設である情報処理教育センター、そして旧会計課が掌理していた学内情報ネットワークの管理運営業務が統合され、その実務を担う事務組織として事務局学術情報課が設置された。

本学学術情報センターが新たな組織として発足した時に直面した課題には、例えば、従前からの課題であった図書館資料の電子化への対応促進や、利用促進のための効果的な情報発信を図ることなど多くのものがあったが、以前からの、また今回の法人化を機に新たに本学学術情報センターの運営に加わった関係教職員の間で何らかの対応策の必要が痛感されていたのが、本学構成員の ICT (Information and Communication Technology) リテラシー²⁾ 促進である。

以前から大学の情報基礎教育課程においては、

在学中の学習・研究活動に資すること、また卒業後の社会活動で求められるコンピュータや情報検索能力の取得を目標として、学生に ICT (IT) リテラシー教育が施されてきた³⁾。本学においても、1998（平成 10）年の名古屋市内から長久手町への移転拡充を機に「大学教育の情報化に対応すべく新設された」⁴⁾ 情報処理教育センターが、情報技術の教授を中心こうした課題を担ってきた。また図書館においても、伝統的な冊子体資料の利用法に加え、最近では OPAC や電子化された書誌・索引などネットワーク系の電子メディアを中心に、利用者のリテラシー教育=利用者教育を実施してきたところである⁵⁾。

しかし、情報処理教育センターでの情報基礎教育の教授にしろ、また図書館での利用者教育にしても、学生を始めとする学内構成員個々人が日常の学習や研究・業務などを遂行する中で抱える ICT 的課題にきめ細かく対応するには、集合教育=座学の限界をここで改めて指摘するまでもなく、些か不充分な面があることは本学のみならず大学における情報リテラシーの教授などに関わるものが均しく感じているところであろう。

従来の教授や利用者教育とは別の方法でこの課題に挑み、本学構成員個々の ICT リテラシーを向上・促進させようと当センターが試みた方策が「ICT よろず相談所」である。

2. 「ICT よろず相談所」が目指すもの

「ICT よろず相談所」（以下「よろず相談所」という。）は、情報科学部にて「コンピューターリテラシー」を担当し、法人化後には学術情報センター長補佐として学術情報センターの運営に関わることになった奥田隆史情報科学部准教授（当時）

により、情報処理教育センターでの教授や利用指導、また図書館が実施する利用者教育・講習会などとは異なるものとして構想されたものである。

情報リテラシーの向上・促進のために採用されている手段は、いわゆる座学という形態を多く採っている。座学においても、双方向的な学習支援への指向は無論存在するし、例えばe-ラーニングなどではそれがすでに実現されているが、一人あるいは少数の教授者・学習支援者（教員である場合もあるであろうし、図書館職員を始めとする事務職員である場合もある）の説明や解説に聴講者が耳を傾ける（目を向ける）というのが基本的なスタイルであろう。

これに対してよろず相談所では、ICTに関する疑問を抱える相談者と被相談者が、お互いに問題点を考え、解決への過程を通して、相互にICTリテラシーを向上・促進しあうということを狙ったものである。具体的には次のような相談者と被相談者の会話を想定するとよいだろう。Aが当初の相談者、Bが被相談者である。

A：「ワープロソフトを利用してこういうことをやってみたいのですが……」

B：「う～ん、難しそうですね。こうやって、ああやって、こうすれば何とかなるかも……。ああ、何とか出来ましたね」

A：「ありがとうございます。でも、今横から見ていてふと思いついたのですが、こうやったところから、別の方法でこうした方がより短いステップで同じことが出来ますね」

B：「えっ、本当ですね。これはいい方法ですね。これから私も活用してみようかな」

相談の過程で、当初の相談者が被相談者に、被相談者が相談者の立場へと変化し、当初の相談者と被相談者が相互に啓発しあっているさまが窺われよう。この過程は「知らないことを学びあう学生」等を創出することであると言い換えてもよい。実は、よろず相談所の目標は、単なるICTリテラシーの相談窓口＝ヘルプデスクを設置することで

ではなく、本学に「知らないことを学びあう／改善しあう文化／空気」を創出することにある。

ちなみに、よろず相談所の「よろず」は「万屋（よろずや）」から借用している。種々雑多な商品を扱うかつての「万屋」が、単に商取引や物の売買に止まらない広い意味での情報の交換＝交歓の場であり、一種のコーディネイター的役割を有していたところに、私たちが目標とするものを見出したからに他ならない。

3. よろず相談所の開設

3-1. 準備

目標とそのために実施すべきことを設定したら、その実現を図るために資金（予算）が確保されなければならない。予算確保の手法は、平成19年度に本学が公立大学法人化して大きく変化した。研究費・事業費の予算確保の手法に、愛知県公立大学法人所管の大学全体を対象とした大規模な提案型＝競争的資金配分方式（「理事長特別研究費」及び「理事長特別事業費」制度）が導入されたのである。また、財務会計制度が根本的に変更され（官庁会計から地方独立行政法人会計へ）、予算執行上、それまで存在した備品費・需要費・役務費といった節の区分が無くなつたことで、より柔軟な予算執行が可能となつたことも併せてここで指摘しておきたい。

さて、導入された理事長特別研究費・事業費枠に、当センターからは、よろず相談所と図書館十年來の懸案事項であった「図書館所蔵中国語図書データ作成・入力事業」を提出した。最終的にはよろず相談所が理事長特別研究費枠に残り、一方の「図書館所蔵中国語図書データ作成・入力事業」の方は選外となつたが、理事長を始めとする法人幹部と関係職員を前にしてのプレゼンテーションでその必要性を訴えた結果、今回の理事長特別研究費・事業費枠とは別途予算措置がなされ、図書館所蔵中国語図書のOPACによる検索が実現した。従前の硬直化した官庁会計では考えられないことである。法人化のメリットが十二分に享受出来た事例であろう。

よろず相談所事業について予算措置がなされた

後、学術情報センターの教職員で打合せを行い、基本方針を確認するとともに、相談で使用する機器や消耗品等の準備作業と並行して相談員の募集に着手した。本学構成員の主となるのが学生であり、まずは彼等の間での「学びあう／改善しあう空気／文化」の創出が優先されるべきであるので、募集の対象は学生である。募集の結果、情報科学部の4年生4名と大学院情報科学研究科の院生2名を学生相談員に採用することとなった。情報系の学生以外の応募を少なからず期待し、また実際文系学生からの問い合わせもあったが、結果的には相談員全員が情報系学生になってしまった。「ICTリテラシー」という言葉に文系学生の応募の手が竦んだことと思われる。ICTのエキスパートを擁することができたという点では心強いものがあったが、多様な（文化的背景を負った）人材の確保という面では今後に多少の課題を遺した結果ではある。

3-2. 開設

よろず相談所は、11月から翌年2月までの4ヶ月の間、週1回火曜日と木曜日を交互に実施した。都合16回の開設である。開設時間は午後2時から午後5時までの3時間。6人の学生相談員を3人ずつの2班に分け、1回あたり3名の相談員が図書館2階のグループ研究室で相談者＝クライアントに対応する。準備段階の打合せでは、相談業務一本だとなかなかクライアントも足を運びづらいだろうから、友人知人などを誘つて気軽に来所してもらえるよう、プレゼンテーションソフトやインターネット利用法などの簡易講習会を、よろず相談＝相談業務と交互に実施することとし、初日は



集客を考え簡易講習会でスタートすること決めた。

平成20年11月6日（火）午後2時、学術情報センター図書館2階のグループ研究室を借りて、よろず相談所を開設した。開設にあたり関係教職員による事前のPR活動には意を尽くしたつもりであったが、開設初日の反響は関係者の予想を下回るものであった（来所したのは関係者を除くとごく僅かであった）。実は、こうした初日の事態は、事後に振り返ってみれば、当然予想されるべきものであったのである。

初日の不況に前途が思いやられたが、11月15日、予定通りよろず相談＝相談業務を看板に掲げて第2回目のよろず相談所を開設した。結果は、初日の不況とは対照的に、9名の面談者が来所し、会場であるグループ研究室の人口密度を、開所時間中高めてくれたのであった⁶⁾。よろず相談の需要は確かに存在したのである。

初日と2日目に生じた事態は、我々に次ぎのことを教えてくれた。まず、学内に確實にICT上の問題を抱えている人々がいること。そして、それら個々人が抱えている問題は（相談を受ける側からみればある程度グレーピングが可能であるが）、相談者にとっては極めてユニークなものであると認識されているらしいこと。結果、個別質問に対応できる相談業務が歓迎される一方、どうやら簡易講習会は、興味はあるが敢えて時間を割いてまで参加することもないと判断されたらしいことである。

よろず相談は「従来の教授や利用者教育とは別 の方法」、すなわち集合教育＝座学とは別の方法で「本学構成員個々のICTリテラシーを向上・促進させよう」とする試みであった筈であった。参加する人数が少人数とはいえ、簡易講習会も従来の教授スタイルを踏襲しているものである。従来のスタイルを超えようとしたよろず相談所も、知らず知らずのうちに従来のスタイルに囚われていたといえる。

以後、よろず相談所は相談業務一本で実施されることになった。

4. よろず相談所の結果と課題、そして到達点

4-1. 結果

よろず相談所は4ヵ月の間16回（1ヶ月あたり4回）開設したが、その来所者数は、11月22人・12月13人・翌年1月9人、そして2月が14人の計58人であった。この数を少ないと見るか多いと見るかは議論の分かれるところと思われるが、クライアントからの相談に学生相談員が懇切丁寧に対応し、相談が長時間に及ぶこともあったことを考えれば、決して少ないと見るべきではないだろうし、そもそも一般的に相談業務の評価は、数量の多寡に還元できがたいものであることをここでは述べておきたい（このことは、図書館でのレンタルカウンターを始めとする窓口相談業務や、学生からの進路や学習の進め方に関する相談、顧客からのクレーム対応などを担当したことのあるものなら容易に理解できるであろう）。なお、よろず相談所の内容＝質に関する評価については以下の行論の中で触れる。

さて、よろず相談所では、来所された方にアンケートの回答をお願いした。42通の回収で、回収したアンケートの中には、1つの質問に複数の回答があるものや、またある質問には未回答のものもあったりし、集計に際して問題はあるが、よろず相談所来所者の大体の傾向を知ることはできるので、以下簡単に紹介したい。

クライアントのうち男性が3割弱、女性が7割強である。これは事前に予想されたところではある。このうち、学生（院生含む）が3割、教員が2割強、残り即ち全体の約半分が大学職員や法人職員等の職員であった。年齢階層別で見ても30代以上が8割弱を占め、特に40代以上が全体の6割（64%）を超えていた。実務の中心を担う職員の間で抱え込んでいる実務上のICTに問題の大きなものがあることが推察できる。

相談内容について述べると、「パソコンの操作・設定法（パソコンOSの操作・設定法を含む）」に関するものが全体の4割（41%）。「ワープロや表計算ソフトウェアの設定法」が2割の半ば（24%）で、「インターネットの設定・情報検索法」に関するものはごく僅かであった（6%）。上記のいず

れにも分類されない、いわゆる「その他」に属するものが残りの3割弱を占めており、これには「PDFファイルの結合と編集」「FileMakerについて」「無線LANの可否（パームトップ、VAIO）」「電子申請等を簡単にする方法」「Emacsの使い方の基本」などがあった。相談内容から見えることは、本学の場合では、ICTに関わる基礎的なことよりも、むしろICTを利用する際に生じる具体的な問題（「ワープロや表計算ソフトウェアの設定法」や「その他」で列挙された内容）の解決方法を求めていることが分かる。

アンケートにおいて、このよろず相談所の評価（「たいへんよい」「よい」「ふつう」「おもしろくない」「その他」の5つのレベル）を問うたが、



相談風景

その結果は全体の8割強が「たいへんよい」と回答、「よい」と答えたものと合わせるとなんと100%になり、来所者全員がよろず相談所に満足

しているという結果を得た。多少とも「ふつう」なり、また「おもしろくない」という回答のあることを覚悟していた我々にとってこれは嬉しい誤算であった。以下、寄せられたコメントの一部を掲げる⁷⁾。

「一発解決でした、すごい!!」

「一つ一つ丁寧に分かり易く教えて下さったのでよく理解できた。卒論作成を進める上で分からぬことが出来たら訪れます。どうぞよろしくお願いします」

「4回目位になります。前回質問して分からなかったことも、ちゃんと調べて、覚えていて下さって、教えていただきました。一対一で、『今困っていること、分かりたいこと』に答えてもらえ、とても助かります。たいへんよい企画だと思います」

「相談所のおかげで、色々な操作ができるよ

うになりたいという気持ちも強まり、アイデアが（多少）浮かぶようになりました。感謝しています」

「大変親切に教えて頂いて有難く存じます。時々、全く無知な低水準のことをお聞きして迷惑をお掛けしますが、その時は容赦なく切り捨てて下さい。本来自分で学ぶのが原則ですから」

「来期・来年も是非続けて下さい。非常に助かっています。高水準の知識も重要ですが、低水準の技能・知識に関する情報をこの企画で教えて下さると大いに有難く存じます」

アンケートに記された相談業務の内容は、学内に多様なICT上の課題があることを明らかにしたとともに、相談業務は統計的な多寡で単純に評価されるものではない、という思いを一層強くするものであった。

4-2. 課題、そして到達点

好評のうちにその事業を終えたよろず相談所であったが、もちろん、課題が全く無かったわけではない。まず学生の来所者が思いの外少なかったこと、他方職員の来所が多かったことが指摘できる。ただ、職員の利用が多かったこと自体は決してその評価を下げるものではないし、これはこれで、本学の職員が抱え込むICT上の課題の大きさを浮き彫りにしたわけであり、今後なんらかの解決策、例えばICTに関するヘルプデスクの全学的な設置などの措置が採られることが望ましいことを明らかにしたという点では、今後に繋がる一つの問題提起ではある。

だが、こうしたことよりもなによりも問われなければならないのは、よろず相談所が当初掲げたミッションを実現できたか否かであろう。よろず相談所のミッションは、学内における「学びあう／改善しあう空気／文化」の創出であった。実施状況を顧みれば、一面よろず相談所がヘルプデスク的に便利使いされたことも否めない。しかし、よろず相談所は、確実にそうした「空気／文化」の一端を創出することに成功したと筆者は確信し

ている。あるアンケートに記された次のような短いコメントがその証左である。

「共有したいです」

コメンターは具体的なファイルやフォルダの共有方法の回答をアンケートで求めているわけではないだろう。その程度のことであれば、その場=よろず相談所で学生相談員に相談すれば回答を得ることは簡単なのであるから。コメンターは、よろず相談所という場で実施している相談しあう関係性やそこから得られる知識などを「共有したい」と表現したのであろう。

「共有」という言葉は、「学びあう／改善しあう空気／文化」というミッションの中の「(し)あう」という表現に極めて近似である。「学びあう／改善しあう空気／文化」の創出とは、実は全学的に「共有フォルダ」を作り上げることと言い換えることができるのではないだろうか。とすれば「共有したい」という意志は、いずれ共有するファイルやフォルダを全学的に作り上げるのではないだろうか。それこそがよろず相談所の目指したところなのである。

5. おわりに

よろず相談所の開所と運営にあたっては、学術情報センター関係教職員を始め法人幹部及び同職員並びに本学の教職員には大変お世話になった。だが、何よりも感謝したいのは、学生相談員となった6名の学部学生・院生である。彼等／彼女達の親切丁寧な対応がなければ、よろず相談所がこれほどの好結果を得ることはできなかつたであろう。この場を借りて感謝したい。

注：

- 1) 愛知県公立大学法人「愛知県公立大学法人中期計画」p12
http://www.puc.aichi-pu.ac.jp/osirase_files/gyoumu/chukikeikaku.pdf. [引用日：2008-08-04]
- 2) 「情報社会において活動するために、情報課題を的確に解決する目的でデジタル技術、コミュ

- ニケーションツール、ネットワークを適正に活用する能力」(「E585-大学生は情報を使いこなせているのか?」『カレントアウェアネス-E』No.97、2006.12
<<http://current.ndl.go.jp/e585>>。[引用日: 2008-08-04])
- 3) 今日に至る情報リテラシー教育の簡単な経緯と一大学における事例を纏めたものに、下田尊久「大学における情報リテラシー教育: 藤女子大学文学部における情報基礎教育」『藤女子大学紀要』44、2007、p115-127がある。
- 4) 「情報処理教育センター設置に関する経緯」
<<http://www.aichi-pu.ac.jp/shisetsu/joho.html>>。[引用日: 2008-08-04]
- 5) 図書館が係わる情報リテラシー教育については、「特集 情報リテラシーの育成と図書館サービス」『現代の図書館』45 (4)、2008、p183-233 の諸論考を参照。
- 6) この来所者数は当日の記録(メモ)によるが、実際にはこの日の来所者はより多く、10名を超えていたらしい。この日もそうだが、以後の相談日においても、相談業務が繁多になった際などには、なかなか上手く来所者数が把握できなかつたのが実情である。この後、行論の中でよろず相談所の統計を掲げるが、来所した人数については、実際よりも下方に表現されていると考えて頂きたい。
- 7) 読みやすいように若干表記を変えたものがある。

行 事

第 62 回（2008 年度）東海地区大学図書館協議会 総会・研究集会

【総会の部】

日 時：平成 20 年 8 月 8 日（水）10:30～11:50

会 場：愛知淑徳大学 8 号館 2 階 824 教室

総会当番館：愛知淑徳大学図書館

出 席 者：36 大学 51 名

図 書 館 名		職 名
□■ 岐阜県 ■□		
1	岐阜大学図書館	学術情報部情報サービス課長
		学術情報部情報サービス課 医学図書館係長
2	岐阜市立女子短期大学附属図書館	司書
3	岐阜聖徳学園大学図書館羽島キャンパス図書館	主査
4	岐阜保健短期大学図書館	図書館長
5	岐阜薬科大学附属図書館	司書
□■ 静岡県 ■□		
6	静岡県立大学附属図書館	主幹
7	浜松医科大学附属図書館	学術情報課長
□■ 愛知県 ■□		
8	愛知大学図書館	豊橋図書館事務課長
9	愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター	事務長
10	愛知教育大学附属図書館	附属図書館長
		情報図書課長
11	愛知県立大学学術情報センター	主査
12	愛知県立芸術大学附属図書館	主査
13	愛知工業大学附属図書館	図書課長
14	愛知東邦大学図書館	学務部部長
15	自然科学研究機構岡崎情報図書館	総務課長
		図書館係長
16	堀山女学園大学図書館	図書館課長
17	大同工業大学図書館	室長
18	中京大学図書館	副参事
19	中部大学附属三浦記念図書館	課長補佐
20	同朋学園大学部附属図書館	事務部長
		主事
21	東海学園大学図書館	主査

図書館名		職名
22	豊田工業高等専門学校図書館	図書館長
23	豊橋技術科学大学附属図書館	学務課副課長（図書グループ）
24	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館	課長
		専門員
25	名古屋学院大学学術情報センター	課長補佐
26	名古屋工業大学附属図書館	附属図書館長
		学術情報課長
27	名古屋女子大学学術情報センター	課長補佐
28	名古屋市立大学総合情報センター	学術情報室長
29	名古屋柳城短期大学図書館	図書館長
30	南山大学図書館	図書館事務課長
□■ 三重県 ■□		
31	鈴鹿医療科学大学附属図書館	館長
32	鈴鹿短期大学図書館	事務職員
33	三重大学附属図書館	学術情報部情報図書館チームリーダー
34	三重短期大学附属図書館	副主幹
□■ 会長校 ■□		
35	名古屋大学附属図書館	附属図書館長
		事務部長
		情報管理課長
		情報管理課長補佐
		情報サービス課閲覧掛長
		工学部・工学研究科総務課図書掛員
		工学部・工学研究科総務課図書掛員
□■ 当番校 ■□		
36	愛知淑徳大学図書館	図書館長
		事務室長
		事務室次長
		司書

総会議事要録

I 開会

II 挨拶

愛知淑徳大学副学長 都築 久義
愛知淑徳大学図書館長 久保 朝孝
東海地区大学図書館協議会長 伊藤 義人

III 議長選出

愛知淑徳大学図書館長 久保 朝孝

IV 報告事項

1 平成 19 年度事業報告

事務局から、平成 19 年度の事業について次のとおり報告があった。

- (1) 総会（平成 19 年 8 月 1 日、会場：愛知県立大学学術文化交流センター、総会当番館：愛知県立芸術大学附属図書館、43 大学 67 名参加）
- 1) 平成 18 年度事業報告及び平成 18 年度決算・同監査報告、平成 19 年度事業計画（案）及び予算（案）等について協議
- 2) 永年勤続者表彰（4 名）
- (2) 研究集会（平成 19 年 8 月 1 日）
テーマ「芸術とヨーロッパの図書館－過去と現在」
基調講演：
「ルネサンス期の図書館とパトロネージ」
　　愛知県立芸術大学附属図書館長 森田 義之
講演：
「新大英図書館：音楽書と稀覯本読書室」
　　愛知県立芸術大学音楽学部 中巻 寛子
ディスカッション：
　　講演者
　　助言者 協議会会长 伊藤 義人
- (3) 「図書館職員基礎研修」打合せ（平成 19 年 9 月 14 日、会場：名古屋大学）（平成 19 年 11 月 6 日、会場：名古屋大学）
研修企画小委員会（第 19-1 回、平成 19 年 11 月 6 日、会場：名古屋大学）
- (4) 研修会（第 1 回）「図書館職員基礎研修」
(平成 19 年 11 月 28 日、会場：名古屋大学)
42 大学・機関 60 名参加
講義
「大学図書館職員に求められているもの」
　　雨森 弘行

「資料の収集～目録・分類」 河谷 宗徳
「電子情報（電子ジャーナル、データベース等）」 栗野 容子

「図書館情報リテラシー教育」 紅露 剛
「ILL」 万波 涼子

「大学図書館の最近の動向・海外事情」 松林 正己
(5) 研修会（第 2 回）（平成 20. 3. 5、会場：中部大学）

47 大学・機関 77 名参加。内、公共図書館から 2 名参加
テーマ「魅力ある大学図書館をめざして」
講演

「どこから拓く？ 大学図書館の可能性－学習支援の視点から」 井上 真琴

「ここから拓いた－お茶大図書館活性化のための 5 つの作戦」 茂出木 理子

(6) 機関誌編集委員会（20-1 回、平成 20 年 7 月 2 日、会場：名古屋大学）

(7) 平成 20 年度監事会（平成 20 年 6 月 24 日、会場：名古屋大学）
監事館：愛知県立芸術大学、南山大学

(8) 平成 20 年度運営委員会（平成 20 年 7 月 8 日、会場：名古屋大学）

(9) 「東海地区大学図書館協議会誌」52 号発行（平成 19 年 12 月 20 日）

(10) 東海地区図書館協議会
理事会（第 5 回）（平成 20 年 7 月 9 日、会場：名古屋大学）
連携・協力検討部会（19-2 回、平成 20 年 3 月 19 日、会場：名古屋大学）、(20-1 回、平成 20 年 6 月 5 日、会場：名古屋大学）

2 平成 19 年度決算報告・同監査報告

事務局から、平成 19 年度の決算について報告があり、続いて、監事館を代表して南山大学から、平成 19 年度の監査をした結果、経理は正確に処理されていることを確認したとの報告があった。

平成 19 年度の決算報告について、報告のとおり承認された。

3 国公私立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について

国公私立の各協議会の理事校・幹事校（名古屋大学、名古屋市立大学、愛知淑徳大学）から報告があった。

V 協議事項

1 会長館・運営委員館について

事務局から、会長館、運営委員館、機関誌編集委員館、監事館の候補館の提案があり、提案どおり承認された。

2 平成 20 年度事業計画（案）及び予算（案）について

事務局から、平成 20 年度事業計画（案）及び予算（案）について説明があり、協議の結果、提案どおり承認された。

3 平成 21 年度総会当番館について

第 63 回（平成 21 年度）総会・研究集会の当番館として名古屋大学が選出され、同大学図書館長から挨拶があった。

4 東海地区図書館協議会の事業について

事務局から、東海地区図書館協議会の事業について説明があり、続いて、議長から、公共図書館との連携・協力事業にご賛同いただき、東海地区図書館協議会への加盟を各館でも検討いただきたい、との依頼があった。

VI 永年勤続者表彰

平成 20 年度の永年勤続者として 5 名が表彰された。

伊藤 康伸（中京大学図書館）

岩佐 多実子（名古屋市立大学総合情報センター）

政谷 浩子（名古屋市立大学総合情報センター）

川瀬 正幸（名古屋大学附属図書館）

畠山 輝敏（名古屋大学附属図書館）



VII 閉会

愛知淑徳大学図書館事務室長 武藤 真理子

【昼休み：施設見学】

日 時：平成 20 年 8 月 8 日（金）11:50～13:20

総会当番館である愛知淑徳大学図書館の見学が昼休みを利用して行われた。



【研究集会の部】

日 時：平成 20 年 8 月 8 日（金）13:20～16:00

会 場：愛知淑徳大学 8 号棟 2 階 824 教室

テーマ：「尾張図書館学の底力」

講演 1：

岩瀬文庫と「本の町」

名古屋大学大学院文学研究科教授

塩村 耕

講演 2：

貸本屋史上の大物－公共図書館の原点－

前佛教大学教授

長友 千代治

質疑・意見交換



平成 19 年度決算報告

(平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日)

科 目	予 算 額 a	決 算 額 b	過△不足額 b - a	備 考
収 入 の 部	円	円	円	
1. 前 年 度 繰 越 金	1,153,557	1,153,557	0	
2. 会 費	430,000	435,000	5,000	平成 19 年度分： @5,000 × 87 館 = 435,000 平成 19 年度総会で、新規加盟 2 館と退会 1 館を承認した
3. 会 誌 売 上 費	444,000	442,000	△ 2,000	52 号分：@2,000 × 221 部 = 442,000
4. 雜 収 入	200,000	345,500	145,500	協議会誌 52 号広告掲載料 315,000 @30,000 × 3 社 = 90,000 @25,000 × 1 社 = 25,000 @20,000 × 8 社 = 160,000 @10,000 × 4 社 = 40,000 「図書館職員基礎研修」昼食交流会参加費 30,500 @500 × 61 名 = 30,500
5. 預 金 利 息	500	1,651	1,151	
計	2,228,057	2,377,708	149,651	

*前年度繰越金を除く平成 19 年度の収入額 1,224,151 円

科 目	予 算 額 c	決 算 額 d	過△不足額 d - c	備 考
支 出 の 部	円	円	円	
1. 総 会 補 助 金	120,000	120,000	0	第 61 回総会（愛知県立芸術大学）
2. 研究集会補助金	20,000	20,000	0	講演謝金（1名）（愛知県立芸術大学）
3. 研 修 会 費	200,000	284,276	84,276	「図書館職員基礎研修」昼食交流会費補填 62,966 講師謝金等（8名）
4. 源 泉 所 得 税 納 付	20,000	26,664	6,664	平成 19 年度分
5. 会 誌 刊 行 費	600,000	611,520	11,520	52 号
6. 役 員 会 経 費	12,000	9,551	△ 2,449	運営委員会ほか役員会
7. 事 務 費	30,000	790	△ 29,210	まち付き封筒角形 2 号 10 枚
8. 通 信 費	52,000	68,570	16,570	会誌送付等郵便料金
9. 表 彰 記 念 費	20,000	19,810	△ 190	表彰記念品（ネーム印付きボールペン 4 本、表彰状丸筒、総会写真）
10. 予 備 費	1,154,057	0	△ 1,154,057	
11. 次 年 度 繰 越 金	0	1,216,527	1,216,527	
計	2,228,057	2,377,708	149,651	

*次年度繰越金を除く平成 19 年度の支出額 1,161,181 円

平成 20 年 3 月 31 日締め

預金残高 1,027,798 円

現金残高 188,729 円

資産総額 1,216,527 円

会計監査 平成 20 年 6 月 24 日

愛知県立芸術大学

南山大学

監査済み

平成 20 年度予算

(平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日)

科 目	前年度 決算額 a	本年度 予算額 b	前年度決算額 よりの増△減 b - a	備 考
収 入 の 部	円	円	円	
1. 前年度繰越金	1,153,557	1,216,527	62,970	
2. 会 費	435,000	435,000	0	平成 20 年度分： @5,000 × 87 館 = 435,000
3. 会 誌 売 上 費	442,000	454,000	12,000	52 号分：@2,000 × 3 部 = 6,000 53 号分：@2,000 × 224 部 = 448,000
4. 雜 収 入	345,500	300,000	△ 45,500	協議会誌広告掲載料 53 号分
5. 預 金 利 息	1,651	1,600	△ 51	
計	2,377,708	2,407,127	29,419	

*前年度繰越金を除く本年度の収入額 1,190,600 円

科 目	前年度 決算額 c	本年度 予算額 d	前年度決算額 よりの増△減 d - c	備 考
支 出 の 部	円	円	円	
1. 総 会 補 助 金	120,000	120,000	0	第 62 回総会（愛知淑徳大学）
2. 研究集会補助金	20,000	50,000	30,000	講師謝金（2 名）（加盟館職員、加盟館外講師）
3. 研 修 会 費	284,276	220,000	△ 64,276	当番館経費（名古屋大学、浜松医科大学）、 講師謝金等（2 回分）
4. 源泉所得税納付	26,664	25,000	△ 1,664	研究集会、研修会での講演料、原稿料に 対して
5. 会 誌 刊 行 費	611,520	620,000	8,480	53 号 310 部
6. 役 員 会 経 費	9,551	12,000	2,449	運営委員会ほか役員会等
7. 事 務 費	790	30,000	29,210	事務用品等
8. 通 信 費	68,570	70,000	1,430	会誌送付等郵便料金
9. 表 彰 記 念 費	19,810	21,000	1,190	記念品（ネーム印付きボールペン 5 本） 等
10. 予 備 費	0	1,239,127	1,239,127	
11. 次 年 度 繰 越 金	1,216,527	0	△ 1,216,527	
計	2,377,708	2,407,127	29,419	

*予備費を除く本年度の支出額 1,168,000 円

名古屋工業大学附属図書館

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町
<http://www.lib.nitech.ac.jp/index.html>

名古屋工業大学附属図書館では、昭和37年に大学創立50年記念事業として建設された部分を北館、昭和55年に増築した部分を南館と呼んでいます。平成18年度に北館を、平成19年度に南館を耐震改修しました。北館の耐震改修については、「東海地区大学図書館協議会誌 52巻 2007年」でご報告しました。

今回は、南館についてご報告します。

南館は、地下は、閉架式集密書庫、1~4Fは、開架閲覧室です。改修に際して、基本的な使い方は、改修前と同じですが、「狭隘の解消及びバリアフリーの対応」、「留学生・外国人研究者への対応」「安全・快適への対応」を考慮しました。

・狭隘の解消及びバリアフリーの対応

書架間が、非常に狭い個所があったため、全ての開架書架の書架間を、車椅子の通行が可能な900mm以上としました。このため、書架数が減りましたが、減少分は、地下の閉架書庫等の収藏能力を上げること、資料の配架場所の見直し等により対応しました。

・留学生・外国人研究者への対応

留学生・外国人研究者向けの図書や、国内の学生が海外事情を知るための図書などを配架する国際交流コーナーを設置しました。

・安全・快適への対応

各フロア男女別々のトレイや館内に長時間滞在する学生が休憩できるリフレッシュコーナーを設けるなど快適性及びゆとりを確保しました。

また、環境対策として、屋上緑化、太陽光発電の設備を設置しました。太陽光発電は、南館1~2F開架閲覧室の照明分の発電能力があります。

全館改修後の入館者数は、改修前の平成17年に比べ、20%増えています。7月は、改修後、初

めての試験期間でした。北館に設置したグループ学習用の「セミナー室」3室は、利用が非常に多く、予約で1日の利用が埋まってしまう日が何日がありました。南館2Fのリフレッシュコーナーには、オットマン（足置き）付きリクライニングチェアを設置しましたが、こちらも人気のコーナーとなりました。

今後は、資料の充実などソフト面でのサービス向上を行っていきたいと思います。

改修後の床面積と収蔵能力

	北館	南館	合計
床面積	2,627 m ²	2,880 m ²	5,507 m ²
収蔵能力	15万冊	35万冊	50万冊



2F リフレッシュコーナー



屋上緑化

会則等

東海地区大学図書館協議会会則

(名 称)

第1条 本会は、東海地区大学図書館協議会と称する。

(目 的)

第2条 本会は、東海地区大学図書館の発展を図ると共に、図書館員の教養と技術の向上及び相互の親睦をはかることを目的とする。

(会 員)

第3条 本会は、前条の目的に賛同する東海地区（静岡、愛知、岐阜、三重）の国立、公立、私立の大学図書館その他これに準ずる図書館を以て組織する。

(事 業)

第4条 本会は、第2条の目的を達するために、次の事業を行う。

- 一 会員相互間の連絡提携
- 二 図書及び図書館に関する研究会、講習会、展覧会等の開催並びに後援
- 三 図書館運営に関する相談、指導
- 四 機関誌の発行
- 五 その他必要と認める事業

(会 長)

第5条 本会に会長を置く。
2 総会において会長館を選出し、その会長館の図書館長が会長となる。
3 会長の任期は、2年とする。但し、重任を妨げない。

(委員会)

第6条 本会に運営委員会及び機関誌編集委員会を置く。

2 委員会に関する事項は、別に定める。

(総 会)

第7条 会長は、毎年一回総会を招集する。
2 会場は、加盟館の輪番とする。

第8条 会長館は、協議事項（議題及び承合事項）をとりまとめ、審議運行の手続きを計る。

第9条 総会の票決権は、一館一票とし議決は出席館の過半数の賛成を要する。

(会 計)

第10条 本会の経費は、会費その他の収入をもって当てる。

2 会員の会費は、年額5,000円とする。

第11条 本会の会計事務を監査するため、監事を置く。

2 総会において監事館を選出し、その監事館の図書館長が監事となる。

3 監事の任期は2年とする。但し、重任を妨げない。

第12条 本会の予算は、毎年総会の議決を経て決定し、決算は監査を受けたのち、次の総会において承認を得るものとする。

第13条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

(事務局)

第14条 会長館に、本会の事務局を置く。
2 事務局に、事務局長及び職員を置く。
3 会長館の事務部長、又はこれに準ずる者が事務局長となる。

(会則の変更)

第15条 この会則の変更は、総会の承認を得なければならない。

(附 則)

本会則は、昭和25年5月1日から施行する。

(附 則)

この改正は、昭和50年7月23日より施行する。

東海地区大学図書館協議会

運営委員会規程

第1条 運営委員会は、本会の運営に関する事項を審議する。

第2条 運営委員会の構成は、国立大3、公立大3、私立大4、(短大1を含む)とする。

第3条 運営委員は、総会において選出する。

2 運営委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項の任期が満了しても、後任者が就任するまでは、なお、その任にあるものとする。

第4条 運営委員会に、委員長をおく。

2 運営委員長は、会長がこれに当たる。

3 運営委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

第5条 運営委員会に、必要に応じて小委員会を置くことができる。

第6条 運営委員会の事務は、事務局内において行う。

附 則

この改正は平成12年7月19日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

機関誌編集委員会規程

1 機関誌の発行について、編集委員会を設ける。

2 編集委員は、会長の指名による。

3 編集委員会に、委員長を置く。

4 編集委員長は、会長がこれにあたる。

5 編集委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

6 編集委員会の事務は、事務局内において行う。

東海地区大学図書館協議会

研修企画小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)の研修に関し、必要な

事項を審議するため、運営委員会の下に研修企画小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

- 一 協議会が行う研修の企画に関すること
- 二 その他研修に関し、必要な事項

(小委員会の構成)

第3 小委員会は、次に掲げる委員館をもって構成する。

一 協議会会长館

二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館

三 研修会会場館

2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。

(小委員会の庶務)

第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

ホームページ小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)のホームページ(以下「ホームページ」という。)に関し、必要な事項を審議するため、運営委員会の下にホームページ小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項等)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

- 一 ホームページの運用・管理に関すること。
- 二 ホームページの企画・編集に関すること。
- 三 その他ホームページに関し、必要な事項。

(小委員会の構成)

第3 小委員会は次に掲げる委員館をもって構成する。

- 一 協議会会長館
 - 二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館
 - 2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。
(小委員会の庶務)
- 第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会ホームページによる情報発信に関する申し合わせ

平成12年10月6日
運営委員会

1 情報発信の範囲

ホームページを通じて発信する情報は、次の各号に該当するものとする。

- ①協議会事業に関する情報
- ②協議会加盟館に関する情報
- ③その他ホームページ小委員会（以下「小委員会」という。）が必要と認めた情報

2 情報発信できる者の範囲

ホームページを通じて情報発信できる者は協議会加盟館とする。

3 情報発信の手続き

- ①ホームページを通じて情報発信しようとする者は、協議会事務局宛にHTML形式の文書をメールで送付するものとする。
- ②加盟館から送付された文書の内容は原則として変更しない。
- ③ホームページに掲載する文書の登録及び削除の決定は、小委員会が行う。但し、疑義があるときは、小委員会は運営委員会委員長と協議する。
- ④ホームページを通じて情報公開している者で、公開する情報の変更又は停止等の事由が生じた時は、速やかに協議会事務局に連絡する。
- ⑤小委員会は公開されたホームページの情報が不適当と判断した場合は、そのファイルを削除し、リンクを切断することができるものとする。

除し、リンクを切断することができるものとする。

4 ホームページ

当分の間、ホームページは名古屋大学附属図書館内のサーバーに置く。

表彰規程

第1条 東海地区大学図書館協議会会則第4条第5号に基づき加盟館の職員に対して行う表彰はこの規程の定めるところによる。

第2条 毎年総会の前日までに通算20年図書館に在職する者。

第3条 この規程による表彰は加盟館長の推薦により総会において行う。

第4条 表彰者には記念品及び感謝状を贈呈する。

第5条 この規程の改正は総会の議決によって行う。

附 則

この規程は、昭和44年10月29日から実施する。

表彰者推薦に関する申合せ

（昭和53年9月4日）

東海地区大学図書館協議会の加盟館に在職する者のうち、つぎの各項のいずれかに該当する者を推薦することとする。

(1) 每年総会の前日までに通算20年以上加盟館に在職する者。

(2) 每年総会の前日までに通算25年以上図書館に在職し、かつ3年以上加盟館に在職する者。

なお、(1)、(2)のいずれについても事務補佐員としての在職期間も加算するものとする。

総会当番館一覧

東海地区大学図書館協議会 総会当番館一覧

回	年月	館名	県別
1	昭和 25. 6	名古屋大学	愛知
2	26. 6	金城学院大学	〃
3	26.11	三重大学	三重
4	27. 5	愛知学芸大学	愛知
5	27.10	名古屋工業大学	〃
6	28. 5	三重県立大学	三重
7	28. 8	名古屋市立大学	愛知
8	29.10	静岡大学	静岡
9	30. 9	岐阜大学	岐阜
10	31. 5	愛知大学	愛知
11	32.10	日本大学（三島）	静岡
12	33. 6	名城大学	愛知
13	34. 9	岐阜薬科大学	岐阜
14	35.11	名古屋大学	愛知
15	36.11	南山大学	〃
16	37. 6	岐阜県立医科大学	岐阜
17	38. 6	名古屋工業大学	愛知
18	39.10	愛知県立大学	〃
19	40.10	日本福祉大学	〃
20	41.10	中京大学	〃
21	42.11	岐阜薬科大学	岐阜
22	43.11	愛知学院大学	愛知
23	44.10	三重大学	三重
24	45. 9	同志大学	愛知
25	46.10	名古屋市立大学	〃
26	47.10	中部工業大学	〃
27	48.10	愛知教育大学	〃
28	49.10	大同工業大学	〃
29	50. 7	愛知県立芸術大学	〃
30	51. 6	市邨学園女子短期大学	〃
31	52. 6	静岡大学	静岡
32	53. 9	愛知工業大学	愛知

回	年月	館名	県別
33	54. 9	静岡女子大学	静岡
34	55. 9	名古屋学院大学	愛知
35	56.10	浜松医科大学	静岡
36	57. 9	名古屋女子大学	愛知
37	58.10	静岡薬科大学	静岡
38	59. 9	南山大学	愛知
39	60.10	豊橋技術科学大学	〃
40	61. 6	中京大学	〃
41	62. 6	愛知県立大学	〃
42	63. 6	愛知学院大学	〃
43	平成 元. 6	愛知教育大学	〃
44	2. 6	愛知大学	〃
45	3 .7	静岡県立大学	静岡
46	4 .6	中部大学	愛知
47	5 .6	岐阜大学	岐阜
48	6 .7	名古屋学院大学	愛知
49	7 .6	岐阜薬科大学	岐阜
50	8 .7	愛知大学	愛知
51	9 .7	浜松医科大学	静岡
52	10. 7	日本福祉大学	愛知
53	11. 7	愛知県立看護大学	〃
54	12. 7	愛知工業大学	〃
55	13. 7	三重大学	三重
56	14. 7	金城学院大学	愛知
57	15. 6	岐阜県立看護大学	岐阜
58	16. 7	南山大学	愛知
59	17. 7	名古屋工業大学	〃
60	18. 7	名城大学	〃
61	19. 8	愛知県立芸術大学	〃
62	20. 8	愛知淑徳大学	〃
63	21 予定	名古屋大学	〃
64	22 予定	名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学	〃

加盟館一覧

東海地区大学図書館協議会加盟館一覧

平成 20 年 12 月 1 日現在

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
(87)							
□■ 岐阜県 ■□ (13)							
朝日大学図書館	学校法人 朝日大学	藤下 昌己	〒501-0296	瑞穂市穂積1851-1	(058)329-1051	(058)329-0021	http://library.asahi-u.ac.jp/
岐阜大学図書館	国立大学法人	小森 成一	〒501-1193	岐阜市柳戸1-1	(058)293-2184	(058)293-2194	http://www.gifu-u.ac.jp/~gulib/
岐阜医療科学大学・ 岐阜医療技術短期大学 図書館	学校法人 神野学園	藤垣 康子	〒501-3892	関市市平賀字長峰 795-1	(0575)22-9401	(0575)23-0884	http://www.u-gifum.ac.jp/tosyokan/
岐阜経済大学図書館	学校法人 岐阜経済大学	中村 共一	〒503-8550	大垣市北方町5-50	(0584)77-3527	(0584)77-3528	http://www.gifukeizai.ac.jp/lib/index.html
岐阜県立看護大学 図書館		北山 三津子	〒501-6295	羽島市江吉良町 3047-1	(058)397-2304	(058)397-2304	http://www.gifucn.ac.jp/library/
岐阜市立女子短期大学 附属図書館		宮本 教雄	〒501-0192	岐阜市一日市場北町 7-1	(058)296-3123	(058)296-3130	http://www.gifucwc.ac.jp/tosyo/libtop_3.htm
岐阜聖徳学園大学 図書館	学校法人 聖徳学園	安田 徳子	〒501-6194	岐阜市柳津町高桑西 1-1	(058)279-6416	(058)279-1242	http://lib.shotoku.ac.jp/
岐阜女子大学図書館	学校法人 杉山女子学園	林 佐喜生	〒501-2592	岐阜市太郎丸80	(058)229-2212 (422)	(058)229-2222	http://libwww.gijodai.ac.jp/
岐阜保健短期大学 図書館	学校法人 豊田学園	小野 桂子	〒500-8281	岐阜市東鶴2-92	(058)274-5001	(058)274-5260	http://www.toyota.ac.jp/kango.html
岐阜薬科大学附属 図書館		平野 和行	〒502-8585	岐阜市三田洞東 5丁目6-1	(058)237-3931	(058)237-3631	http://www.gifupu.ac.jp/tosho/index.html
情報科学芸術大学院 大学附属図書館		安藤 泰彦	〒503-0014	大垣市領家町3-95	(0584)75-6803	(0584)75-6803	http://libsrv02.iamas.ac.jp/
中部学院大学附属 図書館	学校法人 岐阜済美学院	秦 安雄	〒501-3993	関市桐ヶ丘2丁目 1番地	(0575)24-2243	(0575)24-2434	http://www.chubugu.ac.jp/library/index.html
東海学院大学・東海学 院大学短期大学部附属 図書館	学校法人 神谷学園	神谷 和孝	〒504-8511	各務原市那加桐野町 5	(058)389-2969	(058)389-9851	http://www.tokaigakuin-u.ac.jp/library

□■ 静岡県 ■□ (13)							
静岡大学附属図書館	国立大学法人	加藤 憲二	〒422-8529	静岡市駿河区大谷 836	(054)238-4474	(054)238-5408	http://www.lib.shizuoka.ac.jp/
静岡県立大学附属 図書館	静岡県公立 大学法人	小幡 壮	〒422-8526	静岡市駿河区谷田 52-1	(054)264-5801	(054)264-5899	http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~library/
静岡県立大学短期大学 部附属図書館	静岡県公立 大学法人	古賀 震	〒422-8021	静岡市駿河区小鹿 2-2-1	(054)202-2617	(054)202-2620	http://oshikau.u-shizuoka-ken.ac.jp/library/index.html
静岡産業大学図書館	学校法人 第二静岡学園	野崎 耕一	〒438-0043	磐田市大原1572-1	(0538)36-8844	(0538)36-3580	http://www.iwatasu.ac.jp/lib/
静岡文化芸術大学 図書館・情報センター	学校法人 静岡文化芸術 大学	伊坂 正人	〒430-8533	浜松市中区中央 二丁目1番1号	(053)457-6124	(053)457-6125	http://www.suac.ac.jp/library/

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
静岡理工科大学附属図書館	学校法人 静岡理工科 大学	宮岡 徹	〒437-8555	袋井市豊沢2200-2	(0538)45-0231	(0538)45-0230	http://www.sist.ac.jp/lib/
聖隸クリストファー大学図書館	学校法人 聖隸学園	大場 浩	〒433-8558	浜松市北区三方原町 3453	(053)439-1416	(053)414-1146	http://collib.seirei.ac.jp/
東海大学付属図書館 清水図書館	学校法人 東海大学	赤川 泉	〒424-8610	静岡市清水区折戸 3-20-1	(054)334-0414	(054)334-0862	http://www.scc.u-tokai.ac.jp/library/lib-top.htm
東海大学付属図書館 沼津図書館	学校法人 東海大学	古賀 邦正	〒410-0395	沼津市西野317	(055)968-1114	(055)968-1153	http://www.ncc.u-tokai.ac.jp/home3/library/
東海大学短期大学部 静岡図書館	学校法人 東海大学	坂本 雅子	〒420-8511	静岡市葵区宮前町 101	(054)261-9527	(054)261-6865	http://web.sjc.u-tokai.ac.jp/~library/
常葉学園大学附属図書館	学校法人 常葉学園	織田 元泰	〒420-0911	静岡市葵区瀬名 1-22-1	(054)261-4499	(054)263-1164	http://www.tokoha-u.ac.jp/library/
日本大学国際関係学部 図書館	学校法人 日本大学	田中 徳一	〒411-8555	三島市文教町2丁目 31-145	(0559)80-0806	(0559)88-7875	http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/
浜松医科大学附属図書館	国立大学法人 佐藤 清昭		〒431-3192	浜松市東区半田山 一丁目20-1	(053)435-2169	(053)435-5140	http://www2.hama-med.ac.jp/w3a/toshokan/homepage.html

□■ 愛知県 ■□	(51)						
愛知大学図書館	学校法人 愛知大学	常石 希望	〒441-8522	豊橋市町畠町1-1	(0532)47-4181	(0532)47-4182	http://library.aichi-u.ac.jp/
愛知医科大学医学情報センター(図書館)	学校法人 愛知医科大学	菅屋 潤壹	〒480-1195	愛知郡長久手町大字 岩作字雁又21	(0561)62-3311	(0561)62-3348	http://www.aichi-med-u.ac.jp/mic/index.html
愛知学院大学図書館 情報センター	学校法人 愛知学院	大野 栄人	〒470-0195	日進市岩崎町阿良池 12	(0561)73-1111 (代表)	(0561)73-7810	http://www.lib.agu.ac.jp
愛知学泉大学図書館	学校法人 安城学園	武藤 宣道	〒471-8532	豊田市大池町汐取1	(0565)35-7097	(0565)35-1003	http://www.gakusen.ac.jp/library/
愛知教育大学附属図書館	国立大学法人 折出 健二		〒448-8542	刈谷市井ヶ谷町 広沢1	(0566)26-2683	(0566)26-2680	http://www.auelib.aichi-edu.ac.jp
愛知県立大学学術情報センター図書館	愛知県公立 大学法人	加藤 義信	〒480-1198	愛知郡長久手町 大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3	(0561)64-1111 (代表)	(0561)64-1104	http://www.aichi-pu.ac.jp/library/
愛知県立看護大学 看護学術情報センター	愛知県公立 大学法人	赤塚 大樹	〒463-8502	名古屋市守山区 上志段味字東谷	(052)736-1401 (代表)	(052)763-1504	http://libaikan.aichi-nurs.ac.jp/
愛知県立芸術大学附属図書館	愛知県公立 大学法人	森田 義之	〒480-1194	愛知郡長久手町大字 岩作字三ヶ峯1-114	(0561)62-1180 (代表)	(0561)62-0244	http://library.aichi-fam-u.ac.jp/index.html
愛知工科大学附属図書館	学校法人 電波学園	松原 十三生	〒443-0047	蒲郡市西迫町馬乗 50-2	(0533)68-1135	(0533)68-0352	http://www.aut.ac.jp/
愛知工業大学附属図書館	学校法人 名古屋電気学園	井 研治	〒470-0392	豊田市八草町八千草 1247	(0565)48-8121	(0565)48-2908	http://aitech.ac.jp/lib/
愛知産業大学・短期 大学図書館	学校法人 愛知産業大学	中山 将	〒444-0005	岡崎市岡町字原山 12-5	(0564)48-4591	(0564)48-5113	http://asu-g.net/univ/index.html
愛知淑徳大学図書館	学校法人 愛知淑徳学園	久保 朝孝	〒480-1197	愛知郡長久手町大字 長湫字片平9	(0561)62-4111 (代表)	(0561)64-0310	http://www2.aasa.ac.jp/org/lib/
愛知新城大谷大学・ 愛知新城大谷大学短期 大学部図書館	学校法人 尾張学園	池田 勝昭	〒441-1306	新城市川路字萩平 1-125	(0536)23-3311	(0536)23-8477	http://www.owari.ac.jp/shinshiro2/otani-top/index.htm
愛知東邦大学図書館	学校法人 東邦学園	浅生 卵一	〒465-8515	名古屋市名東区 平和ヶ丘3-11	(052)782-1243	(052)781-0931	http://www.aichi-toho.ac.jp/05unit/0llib.html

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
愛知文教大学附属図書館	学校法人足立学園	黒田 彰子	〒485-8565	小牧市大字大草字年上坂5969-3	(0568)78-2211 (0568)78-2240		http://www.abu.ac.jp/abulib/
愛知みずほ大学附属図書館	学校法人瀬木学園	松井 和弘	〒470-0394	豊田市平戸橋町波岩86-1	(0565)43-0116 (0565)46-5220		http://amc.mizuho-c.ac.jp/hp/shisetsu/tosyokan.html
桜花学園大学保育学部・名古屋短期大学図書館	学校法人桜花学園	小川 雄二	〒470-1193	豊明市栄町武侍48	(0562)97-1725 (0562)97-1703		http://libwww.nagoyacollege.ac.jp/
桜花学園大学桜堂記念図書館	学校法人桜花学園	森本 司	〒471-0057	豊田市太平町七曲12-1	(0565)36-4432 (0565)36-4433		http://www.ohkagakuen-u.ac.jp/toshoindex_tosyokan.htm
金城学院大学図書館	学校法人金城学院	柴田 道子	〒463-8521	名古屋市守山区大森2-1723	(052)798-0180 (052)768-1066		http://opc.kinjo-u.ac.jp
自然科学研究機構岡崎情報図書館	大学共同利用機関法人	岡田 清孝	〒444-8585	岡崎市明大寺町西郷中38	(0564)55-7191 (0564)55-7199		http://www.lib.orion.ac.jp
楣山女子大学図書館	学校法人楣山女子学園	石川 勝二	〒464-8662	名古屋市千種区星が丘元町17-3	(052)781-6452 (052)781-3094		http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/lib/
星城大学図書館	学校法人名古屋石田学園	法雲 俊邑	〒476-8588	東海市富貴ノ台2-172	(052)601-6000 (代表)	(052)601-6010	http://www.seijoh-u.ac.jp/
大同工業大学図書館	学校法人大同学園	水澤 富作	〒457-8530	名古屋市南区滝春町10-3	(052)612-6873 (052)612-6108		http://lis.daido-it.ac.jp/
中京大学図書館	学校法人梅村学園	安村 仁志	〒466-8666	名古屋市昭和区八事本町101-2	(052)835-7157 (052)835-1249		http://www.chukyo-u.ac.jp/tosho/
中京女子大学図書館	学校法人中京女子大学	高橋 昭弘	〒474-8651	大府市横根町名高山55	(0562)46-1239 (0562)46-3860		http://www.chujo-u.ac.jp/
中部大学附属三浦記念図書館	学校法人中部大学	鶴田 正道	〒487-8501	春日井市松本町1200	(0568)51-1111 (代表)	(0568)52-1510	http://www.bliss.chubu.ac.jp/
同朋学園大学部附属図書館	学校法人同朋学園	栗原 幸江	〒453-8540	名古屋市中村区稲葉地町7-1	(052)411-1951 (052)411-1120		http://lib.doho.ac.jp/
東海学園大学図書館	学校法人東海学園	中島 邦夫	〒468-8514	名古屋市天白区中平2丁目901	(052)801-1528 (052)804-1192		http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/
豊田工业大学総合情報センター	学校法人トヨタ学園	山口 真史	〒468-8511	名古屋市天白区久方2-12-1	(052)809-1743 (052)809-1744		http://libwww.toyota-ti.ac.jp/
豊田工業高等専門学校図書館	独立行政法人国立高等専門学校機構	深田 桃代	〒471-8525	豊田市栄生町2-1	(0565)36-5904 (0565)36-5920		http://www.toyota-ct.ac.jp/~jimu/tosyo/
豊橋技術科学大学附属図書館	国立大学法人稻垣 康善	〒441-8580		豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1	(0532)44-6562 (0532)44-6566		http://www.lib.tut.ac.jp
豊橋創造大学附属図書館	学校法人藤ノ花学園	中野 一豊	〒440-8511	豊橋市牛川町松下20-1	(050)2017-2105 (050)2017-2115		http://www.sozo.ac.jp/slic/
名古屋大学附属図書館	国立大学法人伊藤 義人	〒464-8601		名古屋市千種区不老町	(052)789-3666 (052)789-3693		http://www.nu1.nagoya-u.ac.jp/
名古屋外国语大学・名古屋学芸大学図書館	学校法人中西学園	久山 紀彦	〒470-0188	日進市岩崎町竹ノ山57	(0561)75-1726 (0561)75-1727		http://library.nakanishi.ac.jp/
名古屋学院大学学術情報センター	学校法人名古屋学院大学	小出 博之	〒456-8612	名古屋市熱田区熱田西町1-25	(052)678-4092 (052)682-6826		http://www2.ngu.ac.jp/white/Libra/libra-j00.html
名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部図書館	学校法人市邨学園	秋田 量正	〒484-0000	犬山市宇樋池61-22	(0568)67-3798 (0568)67-9321		http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/
名古屋芸術大学附属図書館	学校法人名古屋芸術大学	橋本 裕明	〒481-8503	北名古屋市熊之庄古井281	(0568)24-0315 (代表)	(0568)26-3122	http://www.nua.ac.jp/index.html
名古屋工业大学附属図書館	国立大学法人 多田 豊	〒466-8555		名古屋市昭和区御器所町	(052)735-5098 (052)735-5102		http://www.lib.nitech.ac.jp

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
名古屋産業大学・名古屋経営短期大学図書館	学校法人菊武学園	安積 紀雄	〒488-8711	尾張旭市新居町3255-5	(0561)55-3081	(0561)55-5985	http://www.lib.nagoya-su.ac.jp/
名古屋商科大学中央情報センター	学校法人栗本学園	浅野 一明	〒470-0193	日進市米野木町三ヶ峯4-4	(0561)73-2111 (代表)	(0561)74-0341	http://www.nucba.ac.jp/cic/index.html
名古屋女子大学学術情報センター	学校法人越原学園	越原 洋二郎	〒467-8610	名古屋市瑞穂区汐路町3-40	(052)852-9768	(052)852-1830	http://lsic.nagoya-wu.ac.jp/
名古屋市立大学総合情報センター	公立大学法人名古屋市立大学	鋤柄 増根	〒467-8501	名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1	(052)872-5795	(052)872-5781	http://www.cc.nagoya-cu.ac.jp/lib/index.html
名古屋造形大学図書館	学校法人同朋学園	森田 紘	〒485-8563	小牧市大字大草字年上坂6004	(0568)79-1255	(0568)47-0361	http://www.nzu.ac.jp/~lib/
名古屋文理大学図書情報センター	学校法人滝川学園	奥村 純市	〒492-8520	稲沢市稲沢町前田365	(0587)23-2400 (代表)	(0587)21-2844	http://www.nagoya-bunri.ac.jp/library/top.html
名古屋柳城短期大学図書館	学校法人柳城学院	夏目 恒雄	〒466-0034	名古屋市昭和区明月町2-54	(052)841-2635	(052)841-2697	http://ryujo.opac.jp/homepage/
南山大学図書館	学校法人南山学園	水谷 重秋	〒466-8673	名古屋市昭和区山里町18	(052)832-3163	(052)833-6986	http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN
日本赤十字豊田看護大学図書館	学校法人日本赤十字学園	石黒 士雄	〒471-8565	豊田市白山町七曲12-33	(0565)36-5119	(0565)37-7897	http://www.rctoyota.ac.jp/library/index.htm
日本福祉大学付属図書館	学校法人日本福祉大学	小泉 純一	〒470-3295	知多郡美浜町大字奥田字会下前35-6	(0569)87-2325	(0569)87-2795	http://library.n-fukushi.ac.jp/
人間環境大学附属図書館	学校法人岡崎学園	神谷 昇司	〒444-3505	岡崎市本宿町字上三本松6-2	(0564)48-7815	(0564)48-7815	http://www.uhe.ac.jp/outline/library/l_index.html
藤田学園医学・保健衛生学図書館	学校法人藤田学園	原田 信広	〒470-1192	豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98	(0562)93-2420	(0562)93-2649	http://library.fujita-hu.ac.jp/index.html
名城大学附属図書館	学校法人名城大学	高橋 友一	〒468-8502	名古屋市天白区塙釜口1-501	(052)832-1151 (代表)	(052)833-6046	http://toshoh.meijo-u.ac.jp

□ ■ 三重県 ■ □	(10)				
皇學館大学附属図書館	学校法人皇學館 渡辺 寛 〒516-8555	伊勢市神田久志本町1704	(0596)22-6322	(0596)22-6329	http://www.kogakkan-u.ac.jp/html/trait/p05-1.html
鈴鹿医療科学大学附属図書館	学校法人鈴鹿医療科学大学 林 顕效 〒510-0293	鈴鹿市岸岡町1001-1	(059)383-8991	(059)383-9915	http://www.suzuka-u.ac.jp/lib/
鈴鹿国際大学附属図書館	学校法人享栄学園 氷見 潔 〒510-0298	鈴鹿市郡山町663-222	(059)372-3950	(059)372-2827	http://www.suzuka-iu.ac.jp/study/library.html
鈴鹿短期大学図書館	学校法人享栄学園 田中 雅章 〒513-8520	鈴鹿市庄野町1250	(059)378-1020	(059)379-4693	http://www.suzuka-jc.ac.jp
三重大学附属図書館	国立大学法人 小林 英雄 〒514-8507	津市栗真町屋町1577	(059)231-9083	(059)231-9086	http://www.lib.mie-u.ac.jp/
三重県立看護大学附属図書館	斎藤 真 〒514-0116	津市夢が丘1-1-1	(059)233-5608	(059)233-5668	http://www1.mcn.ac.jp/
津市立三重短期大学附属図書館	雨宮 照雄 〒514-0112	津市一身田中野157	(059)232-2341	(059)232-9647	http://www.tsu-cc.ac.jp/toshokan/index.html
三重中京大学図書館	学校法人梅村学園 浜谷 英博 〒515-8511	松阪市久保町1846	(0598)29-1122	(0598)29-4986	http://lib.mie-chukyo-u.ac.jp/
四日市大学情報センター	学校法人曉学園 植田 栄二 〒512-8512	四日市市萱生町1200	(059)365-6712	(059)365-6619	http://www.yokkaichi-u.ac.jp/jhkweb_jpn/HP/tosyo/
四日市看護医療大学図書館	学校法人曉学園 山崎 正人 〒512-8045	四日市市萱生町1200	(059)340-0705	(059)361-1401	http://www3.yokkaichi-u.ac.jp/jhkweb_jpn/HP/index.html

役員館一覧

東海地区大学図書館協議会役員館一覧 (平成 10 年度～平成 21 年度)

年度	総 当番館	研修会 会場館	会長館	運営委員会	機関誌編集 委員会	監事会	研修企画 小委員会	ホームページ 小委員会
				会長 国立 3、公立 3、私立 4 (短大 1 を含む) オブザーバ：総会当番館	会長 編集委員は会長 の指名	総会で選出、 監事館の図書館 長が監事となる	会長館 国立、公立、私 立の運営委員館 から各 1 館 研修会会場館	会長館 国立、公立、私 立の運営委員館 から各 1 館
平成 10 年度	日本福祉 大学	名古屋 大学 岐阜経済 大学	名古屋 大学	愛知教育大学 岐阜大学 浜松医科大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 名古屋市立看護短期大学部 ／三重短期大学 愛知工業大学 岐阜女子大学 金城学院大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 名城大学		
平成 11 年度	愛知県立 看護大学	名古屋 大学 岐阜女子 大学						
平成 12 年度	愛知工業 大学	愛知教育 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	三重大学 名古屋工業大学 静岡大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 三重短期大学 堀山女学園大学 大同工業大学 岐阜聖徳学園大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 名城大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 堀山女学園大学 研修会会場館	
平成 13 年度	三重大学	大同工業 大学 名古屋 大学	名古屋 大学					
平成 14 年度	金城学院 大学	名古屋 大学 名古屋市 立大学	名古屋 大学	愛知教育大学 岐阜大学 豊橋技術科学大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 堀山女学園大学 金城学院大学 皇學館大学 愛知女子短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 名城大学	名古屋大学 岐阜大学 愛知県立看護 大学 金城学院大学 研修会会場館	
平成 15 年度	岐阜県立 看護大学	名古屋 大学 堀山女学 園大学	名古屋 大学					
平成 16 年度	南山大学	名古屋 大学 岐阜大学	名古屋 大学	浜松医科大学 三重大学 名古屋工業大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 ／静岡県立大学短期 大学部 (H17) 南山大学 中京大学 東海女子大学 名古屋経済大学短期大学部	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 金城学院大学	名古屋大学 名古屋工業大学 名古屋市立大学 中京大学 研修会会場館	
平成 17 年度	名古屋工 業大学	中京大学 名古屋 大学						
平成 18 年度	名城大学	岐阜県立 看護大学 名古屋 大学	名古屋 大学	静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知教育大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部 (H18) / 三重短期大学 (H19) 名城大学 中部大学 中京女子大学 名古屋柳城短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 南山大学	名古屋大学 静岡大学 名古屋市立大学 中部大学 研修会会場館	名古屋大学 豊橋技術科学 大学 名古屋市立大学 中京女子大学
平成 19 年度	愛知県立 芸術大学	名古屋 大学 中部大学						
平成 20 年度	愛知淑德 大学	浜松医科 大学 名古屋 大学	名古屋 大学	岐阜大学 浜松医科大学 三重大学 愛知県立看護大学 (H20) ／愛知県立大学 (H21) 名古屋市立大学 津市立三重短期大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛学院大学	愛知県立芸術 大学 名城大学	名古屋大学 浜松医科大学 名古屋市立大学 朋学園大学	名古屋大学 三重大学 名古屋市立大学 豊田工業大学
平成 21 年度	名古屋 大学	朋学園 大学 名古屋 大学						

研修会一覧

東海地区大学図書館協議会研修会一覧 (平成元年度～平成19年度)

年度	年月日	会 場	演 题	講 師	所 属
元	元.12.5	名 城 大 学	学術情報サービスの展開と大学図書館 アダム・スミスの蔵書をめぐって	門條 司 水田 洋	化学情報協会 名城大学
	2. 1.31	名 古 屋 大 学	大学図書館の未来像	丸山 昭二郎	鶴見大学
2	2.11.29	名 古 屋 大 学	Collection building について 大学図書館とニュー・メディア	川原 和子 橋爪 宏達	三重大学 学術情報センター
	3. 1.30	大同工業大学	『経済学文献季報』のデータベース化について - KEIS から KEIS II へ 私の日本の古典文献とのつきあい	山内 隆文 朝倉 治彦	名古屋学院大学 四日市大学
3	3.11. 8	名古屋学院大学	ドイツ及び英国の図書館事情 江戸時代の出版	牧村 正史 長島 弘明	名古屋大学
	4. 1.17	愛知県図書館	目録システムにおけるハイパーテキストの適用可能性 新図書館概要説明及び見学	石塚 英弘 鈴木 康之	図書館情報大学 愛知県図書館
4	4.10.21	南 山 大 学	慶應義塾大学の新しい試み - マルチメディアの統合 - 図書館の施設計画に関連して	原田 悟 加藤 彰一	慶應義塾大学 名古屋大学
	5. 3.19	名 古 屋 大 学	カリフォルニア大学バークレー校の図書館システム 電子情報サービスの新しい展開	棚橋 章 寺村 謙一	名古屋大学 丸善(株)
5	6. 1.26	施設見学会：けいはんなインフォザール			
	6. 3.23	愛知医科大学	シーボルトと中京の学者たち 大学図書館におけるコレクション形成・管理の意義と問題点	武内 博 三浦 逸雄	東京学芸大学 東京大学
6	6.12. 6	愛知学院大学	アメリカ図書館最新事情 地域・館種を越えた図書館サービス - すべての図書館をすべての利用者に -	渡辺 和代 川瀬 正幸 雨森 弘行	名古屋アメリカンセンター 名古屋大学 三重県立図書館
	7. 2.22	施設見学会：三重県図書館			
7	7.10.27	名 古 屋 大 学	鯨と捕鯨の文化史 研究図書館としての電子図書館の事例 - 機能と運営 -	森田 勝昭 渡辺 博	甲南女子短期大学部 奈良先端科学技術大学院大学
	7.12. 7	愛知工業大学	シンポジウム：利用者教育の在り方 - 方法と問題点 -	光齋 重治 高橋 一郎 四谷 あさみ 堀 茂 金子 豊	中部大学 愛知県立大学 愛知淑徳大学 名古屋大学 名古屋大学
8	8.10.24	名 古 屋 大 学	インターネット、イントラネットを前提とした図書館情報サービスの将来 電子図書館の諸相：US Berkeley Digital Library Project と Ariadne97	後藤 邦夫 谷口 敏夫	南山大学 光華女子大学
	8.12. 4	愛知淑徳大学	シンポジウム：NDC 新版9版について	石山 洋 万波 凉子 中井 えり子 酒井 信	東海大学 名古屋市立大学 名古屋大学 名城大学

年度	年月日	会場	演題	講師	所属
9	9.10.30	名古屋大学	英国大学図書館における電子情報サービスの進展 フランス国立図書館 BNF	尾城 孝一 篠田 知和基	東京工業大学 名古屋大学
	9.12.10	朝日大学	講演 歌うコンピュータ・描くコンピューターマルチメディア時代への布石ー フォーラム：マルチメディアと電子図書館－図書館機能におけるホームページー	板谷 雄二 津田 明美 林 哲也 鈴木 康生 三浦 基	朝日大学 愛知工業大学 浜松医科大学 名古屋大学 南山大学
10	10.12.5	名古屋大学	テーマ：電子ジャーナルの”いま”と”こんご” 講演 デジタルメディアの現状と今後 電子ジャーナルの事例報告 EES, Science Direct FirstSearch, FirstSearch ECO Journals@ovid, HighWire Press	逸村 裕 エルゼビア 紀伊國屋書店 ユサコ	愛知淑徳大学
	10.12.16	岐阜経済大学	テーマ：大学図書館における電子情報サービスの実際 ネット時代の教育・研究環境と図書館の活用 電子情報サービスの事例報告	松島 桂樹 安田 多香子 野村 千里 夏目 弥生子	岐阜経済大学 愛知県立大学 南山大学 名古屋大学
11	11.11.2	名古屋大学	テーマ：著作権法と大学図書館 大学図書館にかかわる著作権問題 電子図書館サービスと著作権	石倉 賢一 山本 順一	千葉大学 図書館情報大学
	11.12.7	岐阜女子大学	テーマ：大学図書館と学生用図書 大学教育改革と学生用図書 事例報告	柴田 正美 江口 愛子 吉根 佐和子 福井 司郎	三重大学 浜松医科大学 名古屋市立大学 中京大学
12	13.1.18	愛知教育大学	テーマ：大学図書館における相互協力 大学図書館における相互協力 事例報告	石井 啓豊 平井 芳美 濱口 幾子 加藤 直美	図書館情報大学 名古屋大学 愛知県立看護大学 愛知工業大学
	13.3.9	名古屋大学	テーマ：大学図書館の管理・運営 大学図書館の管理・運営 コンソーシアムを視野においた大学図書館の運営	長谷川 豊祐 松下 鈞	鶴見大学 国立音楽大学
13	13.12.20	大同工業大学	テーマ：古文書の整理と保存： 電子メディア変換（画像）による利用について 講演 古文書の整理と保存 事例報告 徳島大学附属図書館貴重資料高精細デジタルアーカイブ－21世紀地域ネットワークへの試み－	秋山 晶則 岡田 恵子	名古屋大学 徳島大学
	14.1.24	名古屋大学	テーマ：図書館の電子化と所蔵資料を核とした地域との連携 デジタル時代の図書館 所蔵資料の高度活用を目指して－地域の博物館・図書館等の連携－	逸村 裕 種田 祐司	名古屋大学 名古屋市博物館
14	14.12.13	名古屋大学	テーマ：学術情報の電子化を考える 講演 学術情報の電子化が意味するもの－研究者の立場から 考える－ 事例報告 名古屋大学における電子ジャーナルの現状について	倉田 敬子 澄川 千賀子 川添 真澄	慶應義塾大学 名古屋大学

年度	年月日	会場	演題	講師	所属
14	15. 3. 4	名古屋市立大学	テーマ：現代の大学図書館と著作権 講演 現代の大学図書館と著作権	土屋 傑	千葉大学
15	15.12.15	名古屋大学	テーマ：図書館のサービス・マネジメントと評価 講演 図書館のサービス・マネジメント：顧客の選好と評価	永田 治樹	筑波大学
	16. 2.19	栃山女学園大学	テーマ：SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について 講演 SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について	安達 淳	国立情報学研究所
16	16.12.17	名古屋大学	テーマ：電子的学術情報利用の進展と今後の展望 事例報告 名古屋大学の電子図書館化計画－機関リポジトリ構築 計画を中心にして－ 医学系図書館の電子ジャーナル状況と日本医学図書館 協会電子ジャーナルコンソーシアムの現状 電子ジャーナルの利点と課題－サイエンス・ダイレクトを例に－	郡司 久 坪内 政義 高橋 昭治	名古屋大学 愛知医科大学 エルゼビアジャパン
	17.3.3	ぱるる プラザ Gifu	テーマ：大学図書館におけるアウトソーシング 事例報告 日本福祉大学付属図書館におけるアウトソーシング アウトソーシングを活用した大学図書館運営－立命館 大学における現状と課題－ アウトソーサーからみたアウトソーシング	岡崎 佳子 田中 康雄 図書館流通センター	日本福祉大学 立命館大学
17	17.12.2	中京大学	テーマ：図書館情報リテラシー指導の現状－各大学の事 例報告－ 基調講演 大学図書館と情報リテラシー	逸村 裕	名古屋大学
			事例報告 名古屋大学附属図書館における情報リテラシー教育 図書館情報リテラシー教育－小さな図書館、小さな学 部での試み－ 中京大学図書館 情報リテラシー教育の現状 ニッチ戦略（隙間産業）で、大学に貢献できる情報リ テラシー教育支援を目指す－三重大附属図書館の取 組－ 岐阜県立看護大学図書館における利用教育 大学ポータルを中心とした名古屋学院大学の情報環境	次良丸 章 原 泰子 春日井 正人 杉田 いづみ 井上 貴之 中田 晴美	名古屋大学 名古屋市立大学 中京大学 三重大大学 岐阜県立看護大学 名古屋学院大学
18	18.1.30	名古屋大学	テーマ：利用者サイドに立つ図書館サービス 講演 北米大学図書館における利用者中心の図書館サービス	シャロン・ ドマイヤー	マサチューセッツ大学
			利用者の利用行動に基づいた図書館サービス	越塚 美加	学習院女子大学
18	19.1.12	岐阜県図書館	テーマ：大学図書館の地域連携 事例報告 相互利用協定と愛知県内図書館のILL定期便設置実証 実験 静岡県内の大学図書館における連携について 岐阜県における公共図書館との連携図書館 東海目録（TOMcat）：病院図書室と大学図書館の連携 図書館の教育支援、地域支援：豊田高専の英語多読を 通じて	村上 昇平 大石 博昭 木村 晴茂 坪内 政義 西澤 一	愛知県図書館 静岡大学 岐阜大学 愛知医科大学 豊田工業高等専門学校
	19.3.7	名古屋大学	テーマ：Web2.0 時代の図書館サービス 基調講演 Web2.0 時代の図書館 講演 図書館利用者の情報探索活動に関する実証的研究 Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開	岡本 真 寺井 仁 林 賢紀	Academic Resource Guide 名古屋大学 農林水産省
19	19.11.28	名古屋大学	「図書館職員基礎研修」 講義 大学図書館職員に求められているもの 資料の収集～目録・分類 電子情報（電子ジャーナル、データベース等）	雨森 弘行 河谷 宗徳 栗野 容子	お茶の水女子大学 三重大学 名古屋大学

年度	年月日	会 場	演 题	講 師	所 属
19	19.11.28	名古屋大学	図書館情報リテラシー教育 ILL 大学図書館の最近の動向・海外事情	紅露 剛 万波 涼子 松林 正己	南山大学 名古屋市立大学 中部大学
	20.3.5	中部大学	テーマ：魅力ある大学図書館をめざして 講演 どこから拓く？ 大学図書館の可能性－学習支援の視 点から ここから拓いた－お茶大図書館活性化のための5つの 作戦	井上 真琴 茂出木 理子	同志社大学 お茶の水女子大学

「東海地区大学図書館協議会誌」掲載記事の電子的公開、転載、学術機関リポジトリでの公開について

- ・著作権は著作者本人にあります。
- ・著作者本人が、ホームページ等で電子的公開、転載、あるいは学術機関リポジトリへ搭載する場合、著作者本人からの申請書等の提出は必要ありません。

(平成 19 年 7 月 9 日 東海地区大学図書館協議会運営委員会（第 19-1 回）決定)

東海地区大学図書館協議会誌 第 53 号 (2008)

平成20年12月20日印刷

平成20年12月25日発行

編集・発行 東海地区大学図書館協議会事務局
名古屋市千種区不老町 名古屋大学附属図書館内
電話 052-789-3666
ホームページ <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/>
振込先 三菱東京UFJ銀行今池支店 普通預金 口座 1747229